

No. 2479/24



前大審院檢事從五位三島毅君序
東京控訴院判事從六位今村信行君閱
前法律取調報告委員事從七位大戶復三郎君著



刑事訴訟法要解 完

獨樂園藏版

訴訟法要解序



大戶君曾學吾二松夔
數年去入司法省法學
校業成任判事實行所
學殆十年頃推其所著

新頒訴訟法要彙來請
叙余因指堂前二松樹
曰彼亭之卓立達天賦
之節猶人民遂自主之
權也然其初動爲惡樹

亂竹所妨害依場沙洗
除之力始能如此亦猶
良吏除姦民妨害而民
始如遂是 朝廷所以
有訴訟法之頒布也然

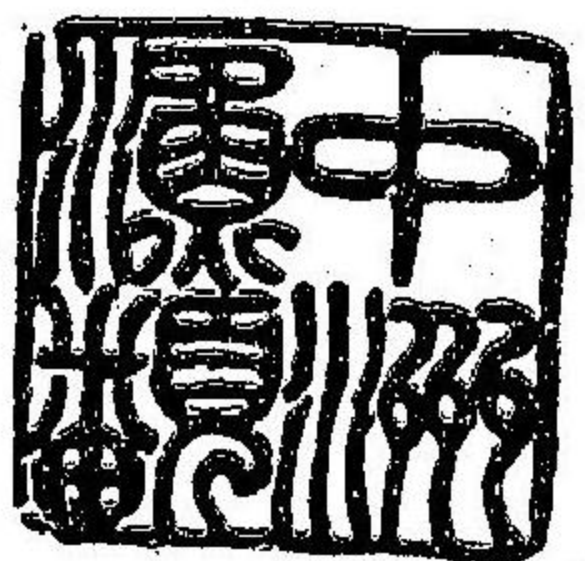
法文詞簡而意奧是子
所以有要解之苦也其
有益於吏民豈鮮少哉
抑此著說法精密固得
之法學哉而其文尚明

易解則均非得三二松
賞乎乃二松之贊亦
將增生色也請以世代
序言君曰善乃書

明治庚寅七月

大審院檢事

從五位三島毅撰



緒言

夫レ訴訟法ハ他人ヲシテ巳ノ權利ヲ知ラシメ又他人己ノ權利ヲ犯ストキ之ニ對シテ權利ノ成立スルヲ知ラシメ若クハ之ヲ尊敬セシメンガ爲メ裁判所ニ訴フルノ方法ヲ示定セルモノナリ而シテ民法ノ主眼トスル所ヲ繹スルニ民法ハ人ト人トノ關係及ヒ人ガ物ニ對シテ有スル所ノ權利ノ性質竝ニ其權利ノ廣狹ヲ定ムルモノナリ然レモ若シ他人ヲシテ其權利ヲ知ラシムルコト能ハス又之ヲ犯ストキ裁判所ニ訴フルノ方法ヲ定ムルコトナキトキハ民法ハ之レ死物ノミ之レ徒法ノミ毫モ其効力アルヲ見サルナリ故ニ訴訟法ト民法トハ恰モ唇齒ノ關係アルモノニシテ造次

モ相離ルヘカラサルモノナリ試ニ訴訟法ノ内部ニ入り之ヲ觀察スルニ訴訟法ハ人ヲシテ裁判所アルヲ知ラシメ訴訟ヲ爲シ答辯ヲ爲シ證據ヲ出シ辯論ヲ爲シ裁判言渡ヲ爲サシメ之ヲ覆審セシメ又裁判執行ヲ爲サシメン爲メ覆踐スヘキ規則ヲ蒐集セルモノニシテ實ニ權利伸達ノ方法至レリ盡セリト謂フ可キ矣又民事訴訟法ト刑事訴訟法トハ均シク之レ訴訟手續ヲ定ムルト雖トモ其間大ニ相異ナルモノアリ民事訴訟法ニ於テハ訴訟本人ヨリ事ヲ始ムルモノニシテ裁判所ノ裁判ヲ爲スニモ本人ノ申立ヲ以テ之カ基礎トナスト雖モ刑事訴訟法ニ至テハ通常政府自身ニ訴人ト爲ルヲ以テ裁判官ハ眞實ヲ之レ穿鑿シ以テ只管公然

ノ利益ニ配心スルモノナリ
上來述フル如ク訴訟法ハ權利ノ基礎ヲ確定スルニ在ラスシテ之カ活用方法ヲ定ムルモノナリ故ニ訴訟法ヲ創定スルニ方テハ寧ロ理論ヲ後ニシ便益ヲ先ニセサル可カラサルナリ而シテ便益トハ眞實ヲ發見シ眞實ヲ證定シ切實ニ法律ヲ適用シ又訴訟手續ヲ急速ニシ訴訟費用ヲ儉省スルヲ之レ務ムルヲ謂フナリ
創定訴訟法ヲ案スルニ或訴訟ニ檢事ヲシテ立會ハシムル如キ又本人訊問法ノ如キ儘々佛法ニ倣フ所ナキニアラズト雖トモ其大概ニ至テハ摸範ヲ獨法ニ採レリ夫レ如此獨法ニ摸倣セル所以ノモノ大ニ故アリテ存ス乃チ獨法ハ理

論ニ拘泥セズ專ラ便益ニ基キ設定セラレ、モノニシテ能ク訴訟法ノ本体ニ適合スレハナリ或ハ曰ク創定民法ハ專ラ佛法ヲ採用セリ然ルニ之ヲ運用スル訴訟法ニ至リ獨法ニ模倣スルハ不可ナリト之レ民法ト訴訟法トハ其基クトヨリノ大則互ニ相異ナル所アルヲ知ラサルノ言ノミ抑訴訟法ハ便益主義ニ基ク可キモノトスルトキハ何國ノ法則ニテモ能ク此主義ニ適合スルモノアレハ直ニ採テ以テ之ヲ用ニル可ナリ安ソ佛ト獨トヲ問フヲ要センヤ

創定訴訟法ハ其手續ノ能ク整理スルハ論ナク訴訟ノ便益ヲ計リ且訴訟人ニ自由權利ヲ與フル尠少ナラサルナリ試ニ之ヲ舊法ニ比較スルニ裁判管轄ノ合意、裁判職員ノ除斥

及ヒ忌避、檢事ノ立會、訴訟上ノ救助、口頭審理、原狀回復、證據保全、督促手續、抗告、證書訴訟及ヒ爲替訴訟、仲裁手續ノ如キ孰レモ新制ニ係ルモノニシテ此等ノ制一トシテ訴訟ノ便益訴訟人ノ自由ヲ計ラサルハナシ若シ法ヲ執ル者訴訟ヲ爲ス者能ク此法ヲ運用セハ蓋シ其便益自由ヲ感スル尠カラサルヘシ

民事訴訟法要解

例言

一本書ハ明治二十三年三月二十七日法律第二十九號ヲ以テ公布ノ民事訴訟法
認テ解釋スルモノナリ

一本書正條ノ下字解、解義、分拆、理由等ノ目ヲ設ケ其意義ヲ解釋シ以テ各事由
ヲ講究スルニ便ナラシム即チ其概畧ヲ舉クニハ左ノ如シ

字解 條中緊要ナル語ノ意義ヲ釋明ス

解義 其條全體ノ意義ヲ解釋ス

分拆 其條ノ意義ヲ分拆釋明ス

理由 其條ヲ設ケシ理由ヲ説明ス

的例 其條ノ意義ニ適切ナル譬喩ヲ指示ス

比較 其條ノ法則ヲ爾餘ノ法則ト對比シ以テ其差異ヲ説示ス

○例言

辯疑 其條ノ文旨ヨリ生ヌル疑義ヲ辯明ス

參照 其條ニ該當スル獨逸訴訟法ヲ比照ス即チ獨第何條トアルハ獨逸

法ノ略語ナリ

以上分項釋明スルト雖モ律意明瞭ニシテ一々明示ヲ要セサルモノハ之ヲ

省略シ或ハ相關聯シテ分ツ可ラサルモノハ一項中ニ之ヲ併記ス

一本書ハ務メテ了解シ易キヲ旨トシ平易約説ス行文右側ニ批點ヲ施スモノ

ハ讀者ノ特ニ注目ス可キ要點ヲ指示スルモノナリ

明治二十四年十一月

著者誌

法律第二十九號

民事訴訟法目錄

第一編 總則	自第百八十一條	一
第一章 裁判所	自第百四十二條	丁
第一節 裁判所ノ事物ノ管轄	自第百九十一條	丁
第二節 裁判所ノ土地ノ管轄	自第百九十五條	丁
第三節 管轄裁判所ノ指定	自第百九十八條	丁
第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意	自第百九十九條	丁
第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避	自第百四十一條	丁
第六節 檢事ノ立會	自第百四十二條	丁
第二章 當事者	自第百四十三條	丁
第一節 訴訟能力	自第百四十七條	丁
第二節 共同訴訟人	自第百四十八條	丁
○目錄	至第百五十一條	一

○目 録

第三節 第三者ノ訴訟參加……………	自第五十一條	七十二丁
第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人……………	自第六十二條	九十一丁
第五節 訴訟費用……………	自第七十一條	百四丁
第六節 保證……………	自第八十二條	百二十二丁
第七節 訴訟上ノ救助……………	自第九十一條	百二十九丁
第三章 訴訟手續……………	自第一百零二條	百四十二丁
第一節 口頭辨論及ヒ準備書面……………	自第一百零三條	全 丁
第二節 送達……………	自第一百零五條	百八十一丁
第三節 期日及ヒ期間……………	自第一百零八條	二百六丁
第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復……………	自第一百一十二條	二百二十二丁
第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止……………	自第一百一十七條	二百三十一丁
第二編 第一審ノ訴訟手續……………	自第一百十九條	二百四十五丁
第一章 地方裁判所ノ訴訟手續……………	自第一百九十五條	全 丁
至第三百七十二條		

第一節 判決前ノ訴訟手續……………	自第九十條	全 丁
第二節 判決……………	自第二百二十四條	二百九十六丁
第三節 闕席判決……………	自第二百四十五條	三百二十二丁
第四節 計算事件財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續……………	自第二百六十五條	三百四十六丁
第五節 證據調ノ總則……………	自第二百七十三條	三百五十七丁
第六節 人證……………	自第二百八十八條	三百七十三丁
第七節 鑑定……………	自第二百九十一條	四百九丁
第八節 書證……………	自第三百三十三條	四百二十二丁
第九節 檢證……………	自第三百三十四條	四百四十六丁
第十節 當事者本人ノ訊問……………	自第三百五十七條	四百四十八丁
第十一節 證據保全……………	自第三百六十四條	四百五十一丁
第二章 區裁判所ノ訴訟手續……………	自第三百七十三條	四百五十八丁
至第三百九十五條		

○目 録

○目 録

四

第一節 通常ノ訴訟手續	自第三百七十三條	四百五十八丁
第二節 督促手續	自第三百八十一條	四百七十七丁
第三編 上訴	自第三百九十五條	四百八十六丁
第一章 控訴	自第三百九十六條	全 丁
第二章 上告	自第四百零三條	五百二十一丁
第三章 抗告	自第四百三十一條	五百四十三丁
第四編 再審	自第四百五十四條	五百五十九丁
第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟	自第四百六十六條	五百八十一丁
第六編 強制執行	自第四百八十三條	五百九十四丁
第一章 總則	自第四百九十七條	五百九十五丁
第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行	自第五百零三條	六百八十六丁
第一節 動産ニ對スル強制執行	自第五百六十四條	全 丁
第一款 通則	自第五百六十九條	全 丁

第二款 有體動産ニ對スル強制執行	自第五百九十三條	六百八十九丁
第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行	自第六百二十四條	七百二十二丁
第四款 配當手續	自第六百二十五條	七百五十四丁
第二節 不動産ニ對スル強制執行	自第六百二十九條	七百六十七丁
第一款 通則	自第六百四十一條	全 丁
第二款 強制競賣	自第六百四十二條	七百七十丁
第三款 強制管理	自第七百零六條	八百二十二丁
第三節 船舶ニ對スル強制執行	自第七百零七條	八百三十二丁
第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行	自第七百一十九條	八百三十二丁
第四章 假差押及ヒ假處分	自第七百三十三條	八百四十丁
第七編 公示催告手續	自第七百三十七條	八百五十一丁
第八編 仲裁手續	自第七百六十四條	八百七十九丁
	自第七百八十五條	八百九十五丁
	自第七百八十六條	八百九十五丁

○目 録

五

民事訴訟法要解

大戸復三郎著

第一編 總則

〔解義〕 總則ハ裁判所ノ管轄當事者(即チ訴訟人)ノ資格及ヒ訴訟ノ手續等訴訟法一般ニ適用ス可キ原則ヲ示定セルモノニシテ訴訟法中最モ必要ナル部分トナス

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

〔解義〕 本條ハ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ可キ事ヲ示定セリ

事物ノ管轄トハ能ク辨別セサル可ラス事物ノ管轄ハ訴訟カ區裁判所ノ管轄トシテ付テノ管轄ト云フ而シテ訴訟事件ハ事物ニ付テ
或ハ事物ノ性質ニ依リ或ハ事物ト一定ノ裁判所ノ管轄區トノ關係ニ依リ定マルモノニシ
テ事物ノ性質ニ基因スル所ノ管轄ヲ事物ニ付テノ管轄ト云ヒ事物ト一定ノ裁判所ノ管轄
區トノ關係ニ基因スル所ノ管轄ヲ土地ニ付テノ管轄ト云フ而シテ訴訟事件ハ事物ニ付テ

○裁判所ノ事物ノ管轄

○裁判所ノ事物ノ管轄

ノ管轄ノ原則ニ基キ區裁判所若シハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルヤチ知ルコトヲ得又土地
ニ付テハ管轄ノ原則ニ依リ如何ナル地ノ區裁判所若シハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルヤチ
知ルコトヲ得ヘキナリ

一ノ訴訟事件ニ付事物上及ヒ土地上管轄スル所ノ裁判所ハ法律上ノ裁判所ナリ故ニ被告
ハ事物及ヒ土地ニ付テハ管轄裁判所ニ從屬セサルヲ得ス若シ其意ニ反シ管轄ニアラサル
裁判所ニ訴ヘサルトキハ之ヲ拒ムノ權アリ

裁判所ノ管轄(事物及ヒ土地ニ付テハ管轄)ハ或ハ法律ニ因リ或ハ上級裁判所ノ命令ニ因
リ或ハ原告ノ合意ニ因リ定マルモノトス法律ノ之ヲ定ムルトキハ法律上ノ管轄ト云ヒ
上級裁判所ノ命令ニ因リ定マルトキハ裁判所ノ指定シタル管轄ト云ヒ原告ノ合意ニ因
リ定マルトキハ原告合意ノ管轄ト云フ

管轄ニハ或ハ專屬(專ラ一裁判所ノ管轄ニ屬シ決シテ他ノ裁判所之ヲ管轄スルコトヲ得
サルノ意)ノモノアリ或ハ專屬ニアラサルモノアリ
事物ノ管轄ニ付テハ裁判所構成法ノ規定ニ從ハサル可ラス

裁判所構成法第十四條及ヒ第二十六條ニ管轄ノコトヲ規定セリ然レトモ全法第十七條及
ヒ第三十條ニ基キ本法中ニモ此規定アリ即チ第三百六十六條第三百八十三條第五百四十
三條第六百四十一條第七百十八條第七百三十九條第七百六十一條及ヒ第七百七十四條是

〔參照〕 獨 第一條 事件上裁判所ノ權限ハ裁判所編成法ニ依テ之ヲ定ムルモノトス

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從フ

〔解義〕 本條ハ訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從ヒ價額ヲ算定

ス可キコトヲ示定セリ

訴訟物ノ價額ニ依リ裁判管轄ヲ異ニスル時ハ以下ノ諸條ニ依準セサル可ラス裁判所構成

法第十四條ニ依リハ區裁判所ハ訴訟物ノ價格百圓ヲ超過セサルトキノニ管轄權限ヲ有セ

リ故ニ出訴ノ際訴訟物ノ價格ヲ定ムルコト最モ必要ナリ而シテ價額ノ算定方法ニ至テハ

以下數條ニ規定セリ

本條訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハノ文字尤モ注意セサル可ラス何トナレハ價

額百圓ヲ超過スルト否トニ因リ概テ區裁判所ト地方裁判所ノ管轄ヲ異ニスルト雖モ構成

法第十四條第二號ニ定ムル如ク價額ニ拘ラス區裁判所ノ權限ニ屬スルモノアレハナリ

〔參照〕 獨 第二條 裁判所ノ權限裁判所編成法ニ從ヒ訴訟事件ノ價額ニ依リ定マル場合

ニ限リ後條ノ規定ヲ適用スルモノトス

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス

果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ

一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セズ

〔字解〕 果實トハ天然ノ收穫(即チ穀菜等ノ收穫)及ヒ民法上ノ收穫(即チ貸家料貸地料元

○裁判所ノ事物ノ管轄

○裁判所ノ事物ノ管轄

資ノ利子等)ヲ總稱ス

〔解義〕 本條ハ價額ノ算定及ヒ算定ノ時期ヲ示定セリ

第一項ハ訴訟物ノ價額ヲ估計スルハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ヲ標準トシテ算定ス可キコトヲ定メリ而シテ何レノ時期ヲ以テ起訴ノ日時ト爲ス可キカハ本法第百九十条第三百七十八條等ニ明定セリ

本條起訴ノ日時ニ於ケル價額トアルヲ以テ若シ商賣物品ナルトキハ當時ノ市價ニ依ラサル可シ

一度起訴ノ日時ニ於テ價額ヲ定ムルトキハ爾後ニ至リ價額ニ増減ヲ生スルト雖モ裁判管轄ニ影響ヲ及ボサルナリ(本法第百九十五條第二項)

第二項ハ果實損害賠償及ヒ訴訟入費ヲ主タル請求ニ附帶シテ訴フルトキハ主タル訴訟物ノ價額ニ算入セサルコトヲ規定セリ故ニ主タル請求百圓ニシテ之ニ附加セル請求五十圓ナルトキ五十圓ハ百圓ニ算入セサルヲ以テ猶ホ區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノトス主タル請求百圓ニシテ附加ノ請求百五十圓ナルトキト雖モ亦同一ナリ然ルニ若シ附加ノ百五十圓ノミ請求スルトキハ單行獨立ナルヲ以テ地方裁判所ノ管轄ナリトス夫レ如此奇怪ノ結果ヲ生スルコトアリト雖モ附加ノ請求主タル請求ニ超過スルコト實際殆ト稀ナリ

〔理由〕 物件ノ價額常ニ一定セズ今日百圓ノ價格ナルモ明日百十圓或ハ九十圓ニ高低スルモ圖ラレヌ故ニ訴訟物ノ價額ヲ定ムルニ一定ノ時期ヲ豫定スルヲ必要ナリ之レ本條第一

項ノ設アル所以ナリ又第二項果實ノ類ヲ主タル請求ニ算入セサル所以ノモノハ是等ノ價額ヲ算定スル常ニ困難繁冗ニシテ爲メニ主タル請求ヲ妨クルコトアルト又主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ訴訟ノ重ナル目的ハ主タル請求ニ在レハナリ

〔附例〕 果實ノ例 地所取戻ノ訴訟ニ於テ收穫物ヲ併セ請求スルトキハ收穫物ノ價額ハ地所ノ價額ニ算入セズ又元金百圓ニ利息二十圓ヲ附加シテ請求スルモ利息ハ元金ニ算入セサルナリ

損害賠償ノ例 買取ニ關スル訴訟ニシテ其取引違約ヨリ生スル損害ノ請求又家屋取戻ノ訴訟ニシテ原告カ他ノ住所ヲ得ルカ爲メ要セシ額ノ賠償ヲ請求スルモ主タル買取品又ハ家屋ノ價額ニ算入セサルナリ

訴訟費用ノ例 訴訟進行中ノ訴訟費用ハ起訴ノ時未ダ成立セサルヲ以テ専ラ既往ノ費用ナ云フモノナリ證據保全ニ關シ又ハ督促手續ニ關スル費用ノ類是ナリ

〔參照〕 獨 第四條 訴訟提起ノ時限ハ價額算定ニ付テノ標準トナルモノトス收穫、使用、利子、損害及費用ハ附帶要求トシテ申立ルトキ之ヲ算外トス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲ルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セズ

〔字解〕 反訴トハ其訴ニ對抗シテ一ノ訴ヲ起スチ云フ例ハ買主カ物品ノ引渡ヲ訴フルニ

○裁判所ノ事物ノ管轄

○裁判所ノ事物ノ管轄

當リ賣主ヨリ其代價ヲ請求スルカ如シ

〔解義〕 本條ハ數箇ノ請求額ヲ合算スル事ニ付キ示定セリ

第一項ハ一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ノ場合ヲ除ク外之ヲ合算スルコトヲ定メリ故ニ百圓ノ貸附金數口アルトキハ一個ツ、之ヲ訴フルトキハ區裁判所ノ管轄ニ屬スト雖モ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ合算スルニ依リ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルモノトス

單ニ數箇ノ請求ヲ爲ストキハトアルヲ以テ其請求ノ原因互ニ相異ナルト雖モ之ニ拘ラサルモノトス例ヘハ百圓ノ貸附金ト價額百圓ニ相當スル物件ノ引渡トヲ求ムルトキ之ヲ合併スルモ決シテ不可ナルコトナシ然レトモ訴訟ノ性質或ル裁判所ノ管轄ニ專屬スルモノト專屬セサルモノトアルトキハ之ヲ合併スル能ハサルナリ何トナレハ管轄專屬ナルトキハ決シテ之ヲ變換ス可ラサレハナリ(本法第三十一條)

又受訴裁判所ハ便宜ニ依リ數箇ノ訴訟ヲ分離シ若クハ合同セシムルコトヲ得可シ載セテ本法第百十八條第百二十條ニ規定セリ

第二項ハ本訴ト反訴ト合算ス可ラサルコトヲ規定セリ抑本訴ト反訴トハ互ニ其訴人ヲ異ニスルヲ以テ其シヤ之ヲ合算セシメントスルモ到底爲シ能ハサルモノトス

〔參照〕 獨 第五條 一訴訟ニ於テ申立テタル數箇ノ請求ハ之ヲ合算スルモノトス訴訟事件ト反訴事件ト合算ハ之ヲサヌコトヲ得ス

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 賃貸借又ハ永賃貸ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一ヶ年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一ヶ年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

〔字解〕 地役トハ一ノ土地カ他ノ土地ノ爲メ義務ヲ負ユルコトノ名稱ニシテ例ヘハ甲地ヨリ乙地ヲ通行スルノ權利又甲地カ乙地ヨリ汲水スルノ權利ヲ有セルカ如シ而シテ權利アリ

○裁判所ノ事物ノ管轄

○裁判所ノ事務ノ管轄

ル土地即チ前例ニテ甲地ハ要役地ニシテ義務アル土地即チ乙地ハ承役地ナリ

〔解義〕〔的例〕〔比較〕本條ハ訴訟物ノ價額ヲ定ムルニ當リ最モ疑義ヲ生シ易キモノヲ舉示シテ其價額ヲ定ムル方法ヲ示定セリ

民法ニ依ルニ債權ノ擔保ヲ對人擔保、物上擔保ノ二種ニ分テリ猶ホ對人擔保ハ保證、連帶、任意ノ不可分トシ物上擔保ハ留置權、動産質、不動産質、先取特權、抵當トナセリ而シテ對人擔保物上擔保ハ孰レモ債權ノ擔保ニシテ即チ權利者ノ權利ヲ保證スルモノナリ故ニ債權ハ主ニシテ擔保ハ之カ從タルニ過キス此ニ債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ヲ訴訟ノ目的物トシテ訴フルトキ其價額ハ主ナル債權ニ依ラシカ將テ擔保又ハ擔保ノ從タル物權ニ依ラシカ頗ル疑義ヲ生シ易シ則チ本法ハ之ヲ斷定シテ主ナル債權ノ額ニ依リ若シ物權ノ目的物ノ價額債權ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ルヘントセリ故ニ債權ノ價額五拾圓ニシテ物權ノ目的物ノ價額百五拾圓ナルトキハ債權五拾圓ニ依ルチ以テ區裁判所ノ管轄トナス反之債權ノ額百五拾圓ニシテ物權ノ目的物ノ額五拾圓ナルトキハ價額寡キ目的物ニ依ルチ以テ猶ホ區裁判所ノ管轄ニ屬ス

本法ニ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權トアルハ即チ物上擔保ノコトナリ右從ナル物權カ訴訟物ナルトキハ其價額カ債權ノ價額ヲ超過スルトキニ限リ債權ノ價格ニ依ル可キチ以テ裁判官ハ是等ノ訴訟起ル毎ニ必ス先ツ其物件ノ價額ヲ調査セサル可ラス初メ原告ヨリ訴狀ヲ呈出スルトキ之ニ物件ノ價額ヲ記入セシムルヲ要ス

地役カ訴訟物ナルトキハ要役地カ地役ニ依リ得ル所ノ利益額ニ依ル若シ要役地ノ得ル所ヨリモ地役ノ爲メ承役地ノ減額多キトキハ其減額ニ依ラサル可ラス而シテ其増價額及ヒ減價額ヲ算定スルハ頗ル困難ナリトス試ニ之ヲ例セシニ甲乙相隣セルニ地アリ甲地ハ袋地ニシテ通路ナキカ或ハ迂回ノ不便アルチ以テ隣地ナル乙地ニ對シ通行權ヲ約セリ初メ甲地ハ袋地ニシテ通路ナク又迂回セシ爲メ地所ノ價額僅ニ五拾圓ナリシニ隣地ニ通行權ヲ得大ニ便利トナリタルカ爲メ百圓ノ價額トナレリ此場合ニ於テハ要役地ノ得ル所ノ増價ハ五拾圓ナルチ以テ區裁判所ノ管轄ナリトス反之乙地ハ初メ價額三百圓ナリシニ甲地ニ通行權ヲ與ヘタル爲メ價額百五拾圓ニ減シタリトセシニ此時ハ其減額増額ヨリ多キチ以テ地方裁判所ニ訴ヘサル可ラス又甲地ハ大ニ山水ノ眺望ニ富メリ其前ニ在ル乙地ニ對シ建築又ハ植樹シテ其眺望ヲ妨ケサルコトヲ約セリ此場合ニ於テモ乙地ニ建築スルト否トニ依リ大ニ甲地ノ價額ニ影響ヲ及ス可シ又乙地モ建築スル能ハストスルトキハ大ニ權利ヲ制限スルチ以テ其地價ヲ減スルヤ必セリ増額ト云ヒ減額ト云フ要スルニ是等ノ場合ヲ指稱スルモノナリ

賃貸借又ハ永賃借ノ契約ノ存否又ハ其期限ニ付キ訴訟起ルトキハ其爭アル時期ニ相當スル借賃ノ額ヲ以テ標準トス例ニハ一方ハ五年間ノ約定ニテ之ヲ賃貸セシニ既ニ期限到着セシチ以テ其明渡ヲ求メシトスルニ一方ハ十年間ノ約定ニテ借受ケタルチ以テ未ダ期限ニ至ラサル旨主張スルトキハ乃チ五年ノ時期ニ付キ爭ヒアルモノナルチ以テ其五年ニ相

○裁判所ノ事務ノ管轄

○裁判所ノ事物ノ管轄

借入ル借賃ヲ訴訟價額ト爲ス可キナリ又契約ノ有無ニ付キ争ヒアルトキハ其何年間貸與
ニ置キテ申立ツル所ノ年期ヲ標準トシテ之カ訴訟價額ヲ算出ス可キナリ然レトモ其
時期カ無年期ナルカ若クハ二十年以上ノ時期ナルトキハ一年借賃ノ二十倍ノ額ヲ超過
スルコトヲ得ス若シ其時期不確定ナリトモ一年借賃ノ二十倍ヲ制限トシ裁判所ノ
意見ニ因リ之ヲ定ムルモノトス又無賃ノ貸借ナリトモ法律ハ貸付ノ貸借ニ付テノモ
規定スルモノナルヲ以テ此場合ニ於テハ第三條ノ規定ニ從ヒ物件ノ價額ヲ以テ訴訟價額
トスルノ外ナカル可シ

本法ニ定ムル場合ト裁判所構成法第十四條ニ定ムル區裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ト混同
ス可ラス構成法第十四條ハ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若ク
ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃借人ト
賃借人トノ間ニ起リタル場合ニシテ決シテ契約ノ有無又ハ時限ニ關スル訴訟ニアラス抑
是等ノ場合ニ區裁判所ニ屬セシメタル所以ノモノハ概テ其事件ノ輕微ニシテ迅速周到ニ
要スルト且局地ノ狀況ヲ熟知スル裁判所ノ裁判ニ付スルヲ良トスルニ在リ

定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一年收入ノ二十倍ニ依ル若シ期
限定アリタルモノニ付テハ將來ノ收入總額二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ラサル可
クテ而シテ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物トナルキハ必ズ獨立セサル可ラス何トナ
シ若シ他ノ主ナル權利ニ附從スルモノナルトキハ本法第三條第二項ニ準據セサル可ラ

サレハナリ彼ノ遺言上契約上ノ年金其他小作ノ權利上ニ關シ單獨ニ争訟セル如キハ即チ
本條ニ屬ス

〔辨疑〕 茲ニ債主三人アリ各同一ノ不動産ヲ抵當ニ取リ後三人トモ負債者ヲ訴ヘ遂ニ抵
當不動産ヲ公賣シ債主ノ中一人先取權ヲ以テ若干圓ヲ領收セリ然ルニ其殘額ニ對シ餘ノ
債主二人互ニ先取權ヲ争ヘリ此時訴訟物ノ價額ハ何レニ依ル可キカ曰ク其殘額ニ依ル可
クシテ當初ノ請求價額ニ依ル可ラサルナリ何トナレハ抵當權ハ起訴ノ原由ニシテ訴訟ノ
物件ニアラサレハナリ

又賃賃借ノ場合ニ關シ年期中物價ノ高低ニ依リ賃料ヲ定ムルコトヲ約セリ然ルニ期限半
ハニシテ争訟ヲ起セリ此時何レノ價額ニ依テ定ムヘキヤ曰ク本法第六條ニ依リ裁判所ノ
意見ヲ以テ定メサル可ラサルナリ

〔參照〕 獨 第六條 訴訟事件ノ價額ハ訴訟ノ事件物件ノ現有ナルトキハ其價額ニ依リ要
求ノ保證又ハ質主權ナルトキハ其要求ノ額ニ依リ之ヲ定ルモノトス質主權ノ物件要求額
ヨリ低價ヲ有スルトキハ其低價ヲ標準トス

獨 第七條 地所使用權ノ價額ハ使用スル地所ノ爲メ使用權ノ有スル價額ニ依リ之ヲ定
メ使用權ノ爲メ使用セラル、地所ノ價額ヲ減少スルノ額其價額ヨリモ大ナルトキハ此減
少額ニ依リ之ヲ定ムルモノトス

獨 第八條 借地又ハ賃借ノ關係ノ現存又ハ繼續訴訟事件トナル場合ニ於テハ訴訟トナ

○裁判所ノ事物ノ管轄

リタル全期限ニ收入スル賃料ノ額ヲ以テ價額算定ノ標準トシ二年間賃料ノ二十五倍額前ノ額ヨリ少キトキハ其少額ヲ以テ價格算定ノ標準トナスモノトス
獨 第九條 復歸スル使用又ハ供給ニ關スル權利ノ價額ハ一年間收入ノ價額ニ依リ左ノ如ク算定スルモノトス

收入權ノ將來消滅スルコト確カナルモ其消滅期限確カナラサルトキハ十二倍半ノ額
收入權ノ期限制限ナキトキ又ハ確定シタルモノナルトキハ二十五倍ノ額但收入權ノ期限確定シタルモノナル場合ニアリテ將來收入ノ全額前ノ額ヨリ少キトキハ此全額ヲ以テ標準トス

第六條 訟訴物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム
裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ訟訴物件ノ價額ニ依テ裁判所ノ管轄ヲ異ニスル場合ニ於テ其訟訴物件ノ價額確定シ難キ時裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ示定セリ
訟訴物ノ價額ニ關シ争ヒアルトキ其他被告ノ欠席ニ依リ價額ノ審定ヲ要スル等ノ場合ニ於テハ裁判所ハ任意ニ之カ價額ヲ定ムルコトヲ得ヘシ猶ホ當事者ノ間損害ノ生否及ヒ損害ノ額又ハ辨償スルキ利益ノ額ニ付キ争ノ起リタルトキ總テノ情況ヲ酌量シ心證ヲ以テ

之ヲ裁決スルコトヲ得ルト同一ナリ而シテ裁判所ハ之カ價額ヲ定ムルニ付本法第百十七條ノ原則ニ基キ檢證若クハ鑑定人ヲ命スルコトヲ得可シ又裁判所ハ任意ニ決定シ得可キヲ以テ必ズ提出セラレタル證據ヲ採用スルノ義務ナキノミナラス更ニ立證ノ結果ニ拘束セラル、コトナシ然レトモ裁判所ハ本法第三條乃至第五條ノ規定ヲ遵奉セサル可ラス
〔參照〕 獨 第三條 訟訴事件ノ價額ハ裁判所其見込ヲ以テ之ヲ定ルモノトス裁判所ハ申立タル探證ヲ命シ並ニ職權ヲ以テ檢證處分及鑑定人ノ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ地方裁判所ノ言渡ニ對シ上訴ヲ許サ、ル場合ヲ示定セリ
本條及ヒ次條ハ同一ナル訴權ニ關シ事物ノ管轄ノ言渡ニ付キ二個ノ裁判所ニ於テ互ニ撞着スル言渡ヲ爲スコトヲ豫防セシトスルニ在リ

地方裁判所ニ於テ一旦判決シタル上ハ其事件カ區裁判所ニ屬スヘカリシテ理由トシテ上訴ヲ爲スコトヲ許サス何トナレハ元合議裁判所ハ單獨ナル區裁判所ヨリハ其裁判完全ナリト推測スレハナリ

本條ノ正文ヲ觀味スルトキハ區裁判所ノ判決ニ對シテハ地方裁判所ニ屬スヘキ理由トシテ不服ヲ訴アルコトヲ得ヘキカ如ク然レトモ本法第三十條第百六條ニ依ルトキハ本案ノ辨論前抗辨セサル時ハ後日ニ至リ之ヲ訴フル能ハサルハ明カナリ但專屬管轄ニ屬ス

ルトキハ格別ナリ
〔参照〕 獨 第十條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ區裁判所ノ權限ニ屬スルヲ理由トシテ不服ヲ申立ルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ヲ羈束ス

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ確定シタル管轄違ノ言渡ニ關シ示定セリ

本條ノ法制ナル蓋シ已チ得サルニ出ツルモノナリ原則上ヨリ論スルトキハ已ニ管轄權限ナキトキハ斷然管轄違ノ言渡ヲ爲シテ可ナリ然ルニ本條ニ於テハ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其裁判確定シタルトキハ後ニ其事件ノ繫屬スヘキ裁判所ニ於テ必ス管轄審判セサル可ラスト爲セルハ既ニ一ノ裁判所ニ於テ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其裁判確定スルトキハ再ヒ之カ審判ニ委スル能ハサレハナリ

本條ハ事物ノ管轄ニ付云々トアルヲ以テ土地ノ管轄ニ付テハ後ニ其事件ノ屬ス可キ裁判所ヲ拘束スルコトナシ故ニ若シ其管轄ニ非ラスト思料スルトキハ管轄違ヲ宣告シテ可ナリ此時ハ裁判所構成法第十條第四ニ依リ直近ノ上級裁判所ニ管轄ノ指定ヲ申請セサル可ラス

〔参照〕 獨 第十一條 事件止裁判所ノ權限ニ付テノ規定ニ依リ裁判所ノ權限違ナルコト

ノ言渡確定シタルトキ其裁判ハ其後事件ノ裁判關係トナル裁判所之ヲ遵守スヘキモノトス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ

區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

移送ノ申立ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ
移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

〔解義〕 本條ハ前條ト牽連セルモノニシテ即チ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ノ宣告ヲ爲ス時ニ當リ遵奉ス可キ規則ヲ示定セリ

地方裁判所カ事物ニ付管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ其事件ヲ自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ移送スル旨ヲ言渡サ、ル可ラス
區裁判所カ前ト同シ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ之ト同時ニ其訴訟ヲ所屬ノ

地方裁判所ニ移送スルコトヲ言渡サハル可シ此場合ニ於テモ必ず原告ノ申立アルヲ要ス原告ヲ移送ヲ申立ツルニハ其判決ニ至ル前即チ最終ノ辨論ニ於テセサル可ラス然レトモ若シ辨論ノ際之ヲ申立テ意ヲ爲メニ移送ノ判決ヲ受ケサルトキト雖モ決シテ區裁判所又ハ地方裁判所ニ訴フルノ道ヲ失フコトナシ唯此場合ニ於テハ新ニ訴訟ヲ起スノ差アルノ移送言渡ノ判決確定スルトキハ其訴訟ハ初ヨリ移送ヲ受ケタル裁判所ニ起シタルモノト看做サル、ナリテ新ニ起訴スル如キ手續ヲ要セス

〔参照〕 獨 第二百四十九條 事件上裁判所ノ權限ニ付テノ規定ニ依リ裁判所ノ管轄違ヲ言渡ストキハ同時ニ原告ノ申立ニ依リ訴訟ヲ其管轄内一定ノ區裁判所ニ移付スヘキモノトス

其判決確定シタルトキ訴訟ハ區裁判所ニ於テ裁判關係トナリタルモノト看做ス

獨 第四百六十六條 裁判所ノ管轄違ヲ事件上權限ニ付テノ規定ニ依リ言渡ストキハ同時ニ原告ノ申立ニ依リ訴訟ヲ地方裁判所ニ移付スヘキモノトス

其判決確定シタルトキハ其訴訟ヲ地方裁判所ニ於テ裁判關係トナリタルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル

普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス

但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

〔解義〕 本條以下ハ土地ノ管轄ヲ示定セリ

土地ノ管轄ノ何タルコト及ヒ土地ノ管轄ト事物ノ管轄ノ差異トハ本法第一條ノ解義ニ詳

悉セリ

第一項ハ人ノ住所ハ即チ其人ノ普通裁判籍ナルコトヲ示セリ後條ニ至リ特別ノ裁判籍ナルモノヲ視ル可シ是ニ於テカ能ク普通ノ文字ヲ了解スルコトヲ得可シ

住所トハ人ノ常ニ生活スル場所ヲ云フ而シテ各人ノ住所何所ニアルヤニ至テハ民法ニ依リ決定スヘキコトナリ人若シ數多ノ裁判所管轄區内ニ於テ數多ノ住所ヲ有スルトキハ隨テ數多ノ普通裁判籍ヲ有ス

本條ニ所謂人トハ有形人無形人(即法人)内外國人ヲ包含セリ

第二項ハ普通裁判籍アル地ノ裁判所ヲ以テ其人ニ對スル訴訟ノ管轄裁判所ナルヲ示セリ原告ハ被告カ當ニ其管轄ニ屬セサル可ラサル義務アル處ニ就テ自己ノ權利ヲ伸暢セサル可ラス即チ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キトアルハ被告ニ付テ云フモノナリ故ニ裏面ヨリ云フトキハ被告ハ管轄外ノ審理ニ應セサルノ權利アリトス

又普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル訴ニ付キ管轄ヲ有スルト雖モ本條ハ訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定ムル場合ヲ例外ニ附セリ專屬裁判籍トハ特ニ或ル裁判所ニノミ訴訟ヲ管轄セシムルノ謂ヒニシテ本法第二十二條第三百八十三條第五百六十三條ノ如キ是ナリ

〔參照〕 獨 第十二條 人ノ普通裁判管轄ヲ有スル裁判所ハ其人ニ對シ提起スヘキ總テノ訴訟ニ付權限ヲ有スルモノトス但訴訟ニ付特別裁判管轄ヲ定メタルルキハ此限ニアラス
獨 第十三條 人ノ普通裁判管轄ハ其住處ニ依テ定マルモノトス

第十一條 軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備、後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セス

〔解義〕〔理由〕 本條ハ軍人軍屬ニ關スル普通裁判籍ヲ示定セリ

軍人軍屬ハ裁判上屯營所ヲ以テ住所トナス即チ軍人軍屬ニ對シ訴ヲ起スルハ屯營所々在
地ノ裁判所ヲ以テ管轄トナス而シテ軍人軍屬ハ陸軍ニ屬スルモノト海軍ニ屬スルモノト
ノ二種アリ海軍中軍艦附ノ者ハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トナス然レハ屯營所若クハ軍艦定
繫所ヲ以テ住所トスルハ常備軍人ニ限レリ故ニ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履
行ノ爲メノミニ服役スル者若クハ非役士官ノ如キハ常人ト全ク常ニ生活スル場所ヲ以
テ住所トナス夫レ如此區別スル所以ノモノハ自然ノ道理ニ基ケルモノナリ何トナレハ常
備軍人ニ在テハ屯營所若クハ軍艦定繫所ニ常住シ其餘ノ軍人ニ在テハ常ニ本住所ニ在レ
ルハナリ本條ハ軍人軍屬ニ對シ財產權上ニ付テノ訴ハ原告ノ
然レハ兵役義務履行ノ爲メニ服役スル軍人軍屬ニ對シ財產權上ニ付テノ訴ハ原告ノ

撰テ以テ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ起スコトヲ得可シ(本法第十五條第二項)
是レ特別裁判管轄トシテ一ノ便法ヲ設ケタル所以ナリ

常備軍ニ屬スルモノハ平時編制隊ノ軍人ニシテ概テ左ニ掲クルモノナリ云フ
士官、軍醫及ヒ軍吏其任官ノ當日ヨリ免官ノ時期ニ至ル

降伏軍人即チ降伏ノ日ヨリ其終期又ハ降參議約ノ取消ニ至ル

隨意兵及ヒ新募生兵軍部ニ於テハ給養ヲ爲スノ日ヨリ又隨意兵ハ現ニ軍隊ニ編入セラレ
タル日ヨリ共ニ其常備服役ヲ終ルノ日ニ至ル

軍部ノ文官ハ其任官ノ日ヨリ以テ解任ノ日ニ至ル

〔參照〕 獨 第十四條 軍人ハ裁判管轄ニ付キ屯營地ニ其住所ヲ有スルモノトス
此規定ハ專ラ兵役義務履行ノ爲メ服役シ又ハ獨立シテ住所ヲ有スルコト能ハサル軍人ニ
ハ之ヲ適用セサルモノトス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ノ
裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所
ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ
其住所ナリトス

〔解義〕〔理由〕 本條ハ一定ノ官吏ニ對スル普通裁判籍ヲ示定セリ

○裁判所ノ土地ノ管轄

外國ニ差遣セル本邦ノ公使(即チ全權大使、全權公使、辦理公使、代理公使)及ヒ公使館ノ官吏(即チ書記官、交際官、書記生其他ノ官吏)並ニ該官吏ノ家屬從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ最後ニ有セシ住所トス、最後ノ住所トハ本邦ヨリ差遣セラレ、際住居セシ場所ヲ云フ若シ此等ノ者ニシテ住所ナキハ東京市内ノ或區ヲ以テ住所トス而シテ該區ニ付テハ司法大臣ノ豫定セル所ニ從フ

抑外交官吏ノ資格アル人ヲシテ治外法權ノ權利ヲ享受セシムルハ萬國公法ノ原則ナリ故ニ身ハ外國ニ在ルモ恰モ內國ニ在ルト同一ナル取扱ヲ受クルモノナリ本條ノ規定セル所即此原則ヲ當行スルニ過キス而シテ是等ノ官吏ノ家屬從者ニ對シ同一ノ規定ヲ與フル所以ノモノハ畢竟公使又ハ官吏ニ附屬スルヲ以テナリ

〔參照〕 第十六條 治外法權ノ權利ヲ有スル獨逸人並ニ外國ニ於テ任用セラレタル獨逸國又ハ一邦ノ官吏ハ裁判管轄ニ付キ其本國內ニ有セシ住所ニ從フモノトス其住所ナキトキハ本邦ノ首府ヲ其住所ト看做シ其首府數個ハ裁判管轄ニ分ル、トキ住所ト看做スハキ管轄地ハ司法省一般ノ布達ヲ以テ之ヲ定ム
撰任領事ニハ此規定ヲ適用セサルモノトス

第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依リテ定マル

然レモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限リ前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

〔解義〕 本條ハ現在地ニ於ケル普通裁判籍ヲ示定セリ

內國ニ住所ヲ有セサルコト雖然セルモ本人ノ現在地ヲ以テ普通裁判籍トナス

本人ノ現在地トアルニ依リ仮令一時ノ滞在ニテモ被告力將ニ起訴セラレントスルノ當時裁判所管轄區内ニ居留シアリテ而シテ訴狀ノ送達ヲ爲シ得ルノ時間猶ホ居留スレハ可ナリトス若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルモ其最後ニ有セシ內國ノ住所ヲ以テ裁判籍トナス

外國ニ住所ヲ有セル者ニ對シテハ內國ニ於テ權利關係ヲ生シタルモ限リ其最後ニ有セシ內國ノ住所ヲ以テ裁判籍トナス若シ然ラサルモハ內國何所ノ裁判所ニ於テモ出訴スルコト能ハサルナリ

〔理由〕 本條ハ原告ヲ保護スルノ趣旨ニ出ツルモノトス

〔比較〕 本條第一項ハ本法第十五條ト混同ス可ラス本條ハ內國ニ住所ヲ有セサルモ限リ一ノ便法ヲ設ケ其現在地ヲ以テ裁判籍ト定メタルモノニシテ反之本法第十五條ハ一定ノ住所アリテ勿論普通裁判籍ヲ有セリト雖モ或地方ニ永ク在寓スルヲ以テ又特別裁判籍トシテ同所ハ起訴スルコトヲ許セルモノナリ

〔辨疑〕 本條第一項ノ場合ニ於テ被告執達吏ヲ避ケテ隱匿シ又ハ本法第四百四十五條第一項

○裁判所ノ土地ノ管轄

○裁判所ノ土地ノ管轄

ノ場合ノ如ク送達ヲ執行シ能ハサル時ハ如何ニ處置シテ可ナランカ曰ク原告ニ於テ被告
カ送達ノ當時現在セシヨトキハ舉證スル上ハ本法第百四十五條第二項ノ手續ヲ斷行シ得ヘ
キナリ

〔參照〕 獨 第十八條 住所ヲ有セサル人ノ普通裁判管轄ハ獨逸國內ノ滞在在地ニ依テ定マ
リ此滞在不明ナルトキハ最終ノ住所ニ依テ定マルモノトス

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依
リテ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ
定ム

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社
團又ハ財團等ノ普通裁判籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段
ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキハ又ハ數所ニ
於テ事務ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト
看做ス

〔字解〕 法人トハ諸ノ無形人ト云ヘル義ニシテ法律上一個人ト看做ス所ノモノナ
リ法人ハ常天ト均シク權利ヲ得義務ヲ負フコトヲ得ル而シテ公ノ法人トハ官廳市町村ノ如キ

チ云ヒ私ノ法人トハ諸多ノ商會社ノ類ヲ云フ

社團トハ共同結社ト云ヘル義ニシテ會社組合協會ノ如キモノノ代名詞ナリ即チ社團ハ類
ニシテ會社組合ハ種ナリ例ニハ社團ハ動物ニシテ會社組合ノ如キハ馬又ハ牛ト云フニ同

財團トハ財ノ集マリト云フノ義ニシテ破産財團又ハ共有財團ト云フノ類是ナリ社團ト財
團トハ只人ニ關スルト財ニ關スルトノ差アルノミ

〔解義〕 本條ハ法人ニ對スル普通裁判籍ヲ示定セリ

國ニ對シテハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ヲ以テ普通裁判籍トナス而シテ訴訟上
國ヲ代表スルハ何レノ官廳ナリヤ又如何ナル手續ヲ以テ代表スルヤハ勅令ノ定ムル所ニ
從フ

公私ノ法人及ヒ法人ノ資格ヲ以テ訴ラル、コトヲ得ル會社其他ノ社團財團等ニ對シテハ別
段ノ定メナキト事務所所在ノ地ヲ以テ普通裁判籍トナス若シ事務所ノ設ケアラサルカ又
ハ數所ニテ事務ヲ取扱フキハ首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ普通裁判籍トナス

其資格ニ於テ訴ヘラル、コトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團トアルハ純然タル法人ニアラ
サルモ法人ト均シク訴訟上被告トナリ得ルモノヲ指稱ス即チ共同組合協會等ノ如キ是ナ
リ

〔參照〕 獨 第十九條 附屬團體並ニ其資格ヲ以テ出訴セラル、コトヲ得ル會社、組合又

○裁判所ノ土地ノ管轄

○裁判所ノ土地ノ管轄

ハ其他協會、義捐物、公場及財産ノ普通裁判管轄ハ其所在地ニ依テ定マラルモノトス此所在地ト看做スヘキモノハ別段ノ定メアルニアラサレハ其管理ヲナス地ナリトス
礦業組合ハ礦坑ノ所在地ヲ管轄スル裁判所ニ普通裁判管轄ヲ有シ其資格ヲ以テ出訴セラ
ル、コトヲ得ル官署ハ其署所在地ノ裁判所ニ普通裁判管轄ヲ有スルモノトス
本條ニ規定シタル裁判管轄ノ外申合規則又ハ其他ノ方法ニ依テ特ニ定メタル裁判管轄ヲ
許スモノトス

獨 第二十條 國庫ノ普通裁判管轄ハ訴訟ニ付國庫ヲ代理スルカ爲メ任セラレタル官署
ノ所在地ニ依テ定マルモノトス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永
ク寓在ス可キ者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判
所ニ之ヲ起スコトヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若
クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

〔解義〕 本條以下ハ特別裁判籍ヲ示定セルモノナリ生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其
他一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對シテハ普通裁判籍ヲ指キ其現在地ノ裁判所ニテモ訴
ヲ起スコトヲ得可シ是レ原告被告双方ニ便宜ヲ與スルモノナリ

本條ニハ財産權上ノ請求ニ付キ云々トアリ故ニ身分ニ關スル訴訟ナト荷モ財産請求以外
ニ係ルモノハ普通ノ裁判籍ニ從ハサル可ラス

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁
判所ニ財産權上ノ請求ヲ爲スコトヲ得ヘシ此事ハ第十一條中ニ解釋セリ

〔參照〕 獨 第二十一條 其性質ニ依リ長キ滞在ヲ要スヘキ關係ヲ以テ一定ノ地ニ滞在ス
ル者特ニ從僕、手職工、製造所勞役者、營業手傳人、大學生徒、學生又ハ徒弟トナリテ一定
ノ地ニ滞在スル者ナルトキ之ニ對シ財産權上請求ニ關シ提起スル總テノ訴訟ニ付テハ其
滞在地ノ裁判所權限ヲ有スルモノトス此規定ハ專ラ兵役義務履行ノ爲メ服役シ又ハ獨立
シテ住所ヲ有スルコト能ハサル軍人ニモ亦之ヲ適用ス但滞在地ノ裁判所ニ代ルモノハ屯
營地ノ裁判所ナリトス

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル
者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ
得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益
者又ハ賃借人ニ對スルニ訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用
ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

○裁判所ノ土地ノ管轄

○裁判所ノ土地ノ管轄

〔解義〕 本條ハ營業事務所ニ關スル特別裁判籍ヲ示定セリ
製造商業其他ノ營業ニ付キ各所ニ支店ヲ設ケ本店ト獨立シテ取引ヲ爲スコトアリ銀行ノ
如キ機車鐵道ノ如キ各所ニ支店ヲ設ケテ諸取引及ヒ運賃業ヲ扱フコト多シ此場合ニ於テ
ハ其店舗ト營業ニ關シ直接ニ取引ヲ爲スルニ限リ店舗所在地ノ裁判所ニ訴テ起スコトヲ
得可シ

住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者用益者又ハ賃借人ニ對シテモ前ト同シク
住家及ヒ建物ノ所在地ノ裁判所ニ起訴スルコトヲ得ヘシ
住家及ヒ農業用建物アル地所トハ地所耕作ノ爲メ耕作地等ニ居宅又ハ建築物ヲ設クル場
合ヲ云フモノナリ故ニ庭園ヲ具備スル爲メ別荘ヲ設クル如キハ本條ニ適セス而シテ住家
建築物アル地所ヲ利用スル地所ト雖モ訴訟力地所ノ利用上ニ涉ラザルハ普通裁判籍ニ從ハ
ザル可ラス

〔辨疑〕 土地ノ所有者其土地ヲ耕作スル爲メ之ニ本住家ヲ設クルハ本法第十條以下ノ普
通裁判籍ニ屬ス可キヲ以テ本條第二項中住家アル土地ヲ利用スル所有者トアルハ殆ソト
贅文ニ屬スルカ如何曰ク土地ノ所有者其地ニ常住スル時ハ固ヨリ普通裁判籍ナレバ
本條ハ所有者カ他人ヲ傭フテ耕作セシムルカ或ハ巳ノ時々耕作ニ出ツル爲メ便宜上住家
ヲ設クル等ノ場合ヲ豫定セルモノナリ

〔參照〕 獨 第三十二條 製造、商業又ハ其他ノ營業ヲナス爲メニ直接ニ取引ヲナス店舗

チ有スル者ナルトキ其店舗ノ取引ニ關係チ有スル總テノ訴訟ハ其者ニ對シ其店舗所在地
ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

其店舗ノ裁判管轄ハ住家及農業用建築物チ有スル地所チ其所有者、入額所得者又ハ借地人
トナリテ耕作スル者ニ對スル訴訟ニ付テモ効アルモノトス但此訴訟ハ地所ノ耕作ニ關ス
ル權利上關係ニ係ルトキニ限ル

第十七條 內國ニ住所チ有セサル債務者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テ
ノ訴ハ其財産又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起ス
コトヲ得債權ニ付テハ債務者(第二債務者)ノ住所ヲ以テ其財産ノ所在
地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財
産ノ所在地トス

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ財産權上ノ請求ニシテ內國ニ住所チ有セサル者ニ對スル訴訟ハ其
人ノ財産地又ハ請求スル物品所在地ノ裁判所ニ於テ管轄ス可キコトヲ示定セリ外國ニ住
所チ定ムル義務者又ハ內國ニ住所チ定ムルコトナク漫ニ漂寓スル義務者ニ對シテ權利者チ
保護スルニ在リ

元來本條ノ趣義タル內國ニ現在スル財産チ強制執行ノ物件ト爲スチ以テ主眼トスルニ在
リ是レ債務者ニ對シ財産權ニ關スル請求ニ制限シタル所以ナリ而シテ財産權上ノ請求タル

○裁判所ノ土地ノ管轄

上ハ如何ナル原因ニ出ツルモ何所ニテ發生セシモ又自己ノ權利ニ因スルト他人ノ權利ヲ讓受ケタルト申問ハサルナリ本條ハ債務者ノ財産中債權ニ係ルモノハ債務者ノ住所ヲ以テ財産所在地トシ又債權ニ付キ物カ擔保スルモノハ其物ノ所在地ヲ以テ財産所在地トセリ而シテ後ニ在ル債務者ハ被告ニ對スル債務者ヲ指稱セルモノニシテ決シテ原告ニ對スル債務者ヲ云フニアラズ本條特ニ(括弧)ヲ設ケ第三債務者ト割註セシ所以ナリ詳ニ言ヘハ被告カ債權ヲ有スルモノハ必ス其債權ニ對スル債務者ナカル可ラス本條ニ第三債務者トアルハ即チ之ヲ稱スルモノナリ此場合ニ於テハ第三債務者ノ住所ヲ以テ裁判管轄地トシ又債權カ物ヲ以テ擔保セラル、片例ヘハ地所ノ抵當又ハ先取特權ヲ以テ保証セラル、片ハ其物ノ現在地ヲ以テ裁判管轄地トナス

本條ノ裁判管轄ハ出訴ノ際財産若クハ物件カ受訴裁判所管轄區内ニ存在スルヲ以テ可トス仮令ヒ其後ニ於テ財産ヲ他ニ移轉セシムルモ決シテ既定ノ管轄上ニ影響ヲ及ボスコトナシトス

〔參照〕 獨 第二十四條 獨逸國內ニ住所ヲ有セサル者ニ對スル財産權上請求ニ係ル訴訟ニ付テハ其財産又ハ訴訟ヲ以テ請求セラレタル物件ノ存在スル地ヲ管轄スル裁判所權限ヲ有スルモノトス

要求ニアリテ財産ノ所在地ト看做スヘキモノハ負債者ノ住所ナリトシ要求ニ付キ物件其保證ノ責ヲ負フトキハ亦其物件ノ所在地ナリトス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

〔字解〕 銷除トハ無能力又ハ錯誤、強暴、詐欺ニ依リ承諾ヲ與ヘシ契約ヲ取消スコトヲ云ヒ廢罷トハ債務者カ債權者ヲ詐害シテ第三者ト爲シタル契約ヲ廢棄スルヲ云ヒ解除トハ未必條件ノ成就スルトキ若クハ雙務契約ニテ一方違約シタル片其契約ヲ解除スルヲ云フ而シテ以上ニ付テハ民法財産編第五百四十四條乃至第五百六十一條ニ規定セリ

〔解義〕 本條ハ契約ニ關スル裁判管轄即チ被告カ契約ヲ履行スヘキ地ノ裁判所之ヲ管轄ス可キコトヲ示定セリ

契約ノ成立若クハ不成立ヲ確定スル訴、契約ノ履行若クハ契約ノ銷除、廢罷、解除ヲ求ムルノ訴、契約ノ不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ヲ求ムルノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行スヘキ地ノ裁判所ニ起スコトヲ得ヘシ故ニ被告ハ其裁判所管轄區内ニ現住スルヲ要セス又其管轄區内ニ財産ヲ有スルコトヲ要セサルナリ

本條ハ契約ヲ履行スヘキ地ヲ豫メ定ムルヲ要セス苟モ契約履行地ト爲シ得ル限りハ渾テノ場合ニ於テ起訴シ得ヘキ趣義ナリ

義務ヲ履行ス可キ地ハ民法ニ之ヲ規定セリ例ヘハ賣買ノ場合ニ於テ物品引渡ハ賣主ノ住

所ニ於テシ其代價ノ拂出ハ買主ノ住所ニ於テスルカ如キ是ナリ
〔參照〕 獨 第二十九條 契約ノ成立又ハ不成立ノ確定契約ノ履行又ハ解除ニ關スル訴訟
並ニ契約不履行又ハ不當ナル履行ニ付テハ損害賠償ニ關スル訴訟ニ付テハ訴訟トナリタ
ル義務ヲ履行スヘキ地ノ裁判所權限ヲ有スルモノトス

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社
員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ
裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

〔解義〕 本條ハ會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又社員ヨリ全社員ニ對スル訴ハ其會社其他
ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ起スヲ得ヘキコトヲ示定セリ其請求ノ訴旨タル社
員ノ資格ニ基ク限リ若シ社員ノ資格ニアラサル訴ナルハ普通裁判籍ニ從ヒ其者
ノ住所地ノ裁判所ニ起サ、ル可ラス本條ハ須ラク本法第十四條ト參看スヘキモノトス
〔參照〕 獨 第二十三條 町村、團結、會社、組合又ハ其他協會ノ普通裁判管轄ヲ有スル裁
判所ハ此等ノ者ヨリ仲間タルノ資格ニ於ケル仲間ニ對シ又ハ其仲間中ニ於テ其資格ヲ以
テ提起スル訴訟ニ付權限ヲ有スルモノトス

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所
ニ之ヲ起スコトヲ得

〔字解〕 不正ノ損害トハ有意又ハ過失ヨリ他人ニ損害ヲ負セタルヲ云フ即損害ノ所爲カ
有意ニ出タルハ民事ノ犯罪トナシ又無意ニ出タルハ准犯罪トナスコト民法財産篇第
三百七十條以下ニ規定セリ

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ起
スヘキコトヲ示定セリ
蓋シ行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ訴フルハ損害ノ事實明確ニシテ舉證ニ便ナルト隨テ
迅速ニ訴訟ヲ結了スルヲ得レハナリ

〔參照〕 獨 第三十二條 不法ノ行為ヨリ生スル訴訟ニ付テハ其行為ヲナシタル地ノ管轄
裁判所權限ヲ有スルモノトス

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對
スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ラス本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起
スコトヲ得

〔解義〕 本條ハ事實上ノ牽連事件ニ對スル裁判管轄ヲ示定セリ
辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡
ニ拘ラス本訴訟ノ第一審裁判所ニ起スコトヲ得ヘシ
訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ラストアリ故ニ價額百圓ヲ超過スルト雖モ區裁判所カ本訴訟ノ

第一審裁判所ナルハ猶ホ其裁判所ニ訴フルヲ得ヘシ
本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スヲ得トアリ故ニ上級ノ裁判所ニ於テ生セル手数料又
ハ立替金ト雖モ猶ホ第一審裁判所ニ訴ヲ起サ、ル可カラス

〔参照〕 獨 第三十四條 訴訟代人附添人送達受領代人及裁判所使吏ノ手数料及立替金ニ
關スル訴訟ニ付テハ本訴訟ノ裁判所權限ヲ有スルモノトス

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ

本權竝ニ占有ノ訴及ヒ分割竝ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス
地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

〔字解〕 本權トハ占有ニ對スル語ニシテ所有權ト云フノ義ナリ占有トハ所有者ト同一ノ形
狀ヲ以テ物件ヲ保有スルヲ云フ占有ノ事ハ民法財産篇第七十九條以下ニ規定セリ

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ不動産ニ對スル訴ハ不動産所在地ノ裁判所ニ起サ、ル可ラサルヲ
示定セリ

不動産ニ付本權竝ニ占有ノ訴分割竝ニ經界ノ訴ハ不動産所在地ノ裁判所ニ及地役ニ付テ
ノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所ニ起サ、ル可ラス蓋シ不動産ニ付能ク權利ノ關係ヲ定ムル
ハ地所所在地ノ裁判所ニ若クナシトノ趣旨ニ出ツル者ナリ不動産ノ訴ハ所在地ノ裁判所
專ラニ管轄ストアラルヲ以テ決シテ當事者ノ合意ヲ以テ其管轄ヲ動ス可ラサルナリ(本法
第三十一條)

〔參照〕 獨 第二十五條 所有權、物件ノ負擔又ハ其負擔ノ解除ヲ申立ル訴訟、分界訴訟、
分割訴訟及ヒ現有訴訟ニ付テハ不動産物件ニ關スル場合ニ限リ其物件ノ所在地ヲ管轄スル
裁判所特ニ權限ヲ有スルモノトス

地所使用權又ハ地所負擔ニ關スル訴訟ニアリテハ使用セラル、地所又ハ負擔ヲ受ル地所
ノ位置ニ依テ定マルモノトス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ
基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ
得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權
ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ不動産ニ關スル特別裁判籍ヲ示定セリ

本條第一項ハ不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ
訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得可キコトヲ定メリ即チ負債ニ關スル
訴ハ書入質ニ關スル訴ト共ニ又辨償義務解除ノ訴ハ書入質取消ノ訴ト共ニ又土地ニ付着
シタル未済義務ニ關スル訴ハ其土地ノ負擔ヲ認諾セシムル訴ト共ニ不動産上ノ裁判籍ニ
訴フルヲ得ルカ如シ但其訴ノ同一被告ニ對スル限リ又第二項ハ不動産上ノ裁判籍

○裁判所ノ土地ノ管轄

ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ノ蒙ムリタル損害賠償ノ訴ヲ起スヲ得ヘキコトヲ定メリ不動産所有者若クハ占有者ニ對シ人權ヲ有スル場合ハ民法ニ於テ講究スヘキコトナリ

本條ヲ設クルノ趣旨タル畢竟請求ノ便利ヲ計リタルニ在リ不動産ニ加ヘタル損害ヲ請求スルトキ不動産上ノ裁判籍ニ訴フルハ殊ニ便利ナリトス

〔參照〕 獨 第二十六條 物件上ノ裁判管轄ニ於テハ書入質上ノ訴訟ニ負債訴訟ヲ合シ書入質消除ノ訴訟ニ身上義務ノ解除ノ訴訟ヲ合シ地所負擔ノ認諾ノ訴訟ニ未済供給ノ訴訟ヲ合シテ提起スルコトヲ得但其合併シタル訴訟ヲ同一ノ被告ニ對シ提起スルキニ限ル 獨 第二十七條 物件ノ裁判管轄ニ於テハ不動産物件ノ所有者又ハ現所有者タルノ資格ニ於テ之ニ對シ提起スル身上ノ訴訟並ニ地所ノ損害ニ付テノ訴訟又ハ權制得有ニ付テノ損害要價ニ關スル訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十四條 相續權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區内ニ存在

スルトキニ限ル

〔字解〕 遺贈トハ遺囑贈與ノ事ニシテ臨終ニ際シ某ニ死後或物件ヲ贈與センコトヲ遺囑スルノ義ナリ又遺產債權者トハ遺產ニ對シ債權ヲ有スルノ義ニシテ死者ニ對シ貸金ヲ爲ス等債權ヲ有スルキハ即チ其遺產ニ對シ債權アルモノナリ

〔解義〕 本條ハ相續權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ハ遺產者臨終ノ際住居セシ地ノ裁判所ニ起スヲ得ヘキコト及ヒ相續裁判籍ニ於テハ遺產ノ全部又ハ一部カ其管轄區内ニ存在スルキニ限リ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル訴ヲ起スヲ得ヘキコトヲ示定セリ

相續權ヲ訴争スルキ遺囑贈與ニ付受贈者ト相續人トニ紛紜アルキ又相續分配ニ付相續人間ニ爭議ヲ生スルキハ即チ死者カ臨終ノ際有セシ普通裁判籍ノ裁判所ニ起訴スルコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨 第二十八條 相續權、贈遺又ハ其他臨終處分ヨリ生スル請求又ハ遺產ノ分配ニ關スル訴訟ハ遺囑者其死去ノ時普通裁判管轄ヲ有シタル裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

遺產ノ裁判管轄ニ於テハ遺囑者又ハ相續人タルノ資格ニ於テ之ニ對スル請求ヨリ生スル遺產債主ノ訴訟モ亦提起スルコトヲ得但遺產ノ全額又ハ一部其裁判所ノ管轄内ニ存在スルトキ又ハ相續人數名アリテ未タ遺產ヲ分配セサルトキニ限ル

○裁判所ノ土地ノ管轄

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

〔**解義**〕 本條ハ第二十二條ニ規定セル不動産ノ訴ヲ除クノ外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ヲ選擇シテ訴ヲ起スヲ得ヘキコトヲ示定セリ

數多ノ普通裁判管轄若クハ數多ノ特別裁判管轄相撞着シ又ハ普通裁判管轄ト特別裁判管轄ト相撞着スルニ論ナク原告ハ之ヲ撰定スルノ權アリ

〔**參照**〕 獨 第三十五條 原告ハ數箇ノ權限ヲ有スル裁判所ノ中ニ於テ撰定スルノ權アルモノトス

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動産上ノ裁判籍ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

〔**解義**〕 本條ハ管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外不動産上ノ裁判籍上ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルモ之ヲ爲シ得ヘキコトヲ示定セリ

管轄裁判所ノ指定ニ付申請ヲ爲ス場合及ヒ其指定ヲ爲ス裁判所ハ次條ニ於テ知ルコトヲ得

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

〔**解義**〕 裁判所構成法第十條ヲ繕閱セハ管轄裁判所ノ指定ニ付申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ヲ知リ得ヘシ

〔**參考**〕 裁判所構成法第十條 法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除外左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ併セテ之ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於テ本件ヲ裁判スルノ權アルヤヲ裁判ス

第一 權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且此ノ法律第十三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之ヲ行フコトヲ得サルトキ

〔**參看**〕 第十三條 區裁判所ノ判事差支アルモハ毎年地方裁判所長ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但監督判事ノ職務ハ其裁判所ノ判事官等ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス
一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同シク毎年以前以テ之ヲ定ム
第二 裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲其ノ權限ニ付疑ヲ生シタルトキ
第三 法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

○管轄裁判所ノ指定

第四 二以上ノ裁判所ノ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ

第一法律ノ理由ニ依リ裁判權ヲ行フコトヲ得サル場合ハ本法第三十二條ニ規定セリ又特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得サルトハ本法第八十二條ノ場合ノ如キヲ云フナリ

第二ハ各種ノ裁判所ノ管轄區ノ境界ニ付キ爭論ノ起リタル場合ニシテ例ヘハ住所ニ關スル裁判管轄ニ依リ起訴セントスルニ當リ其被告ノ住宅各裁判所管轄區境界線ニ跨ル場合ノ如キ之ナリ

第三ハ積極的ノ裁判管轄ノ爭ニシテ第四ハ消極的ノ裁判管轄ノ爭ナリ

〔參照〕 獨 第三十六條 權限ヲ有スル裁判所ノ定メハ左ノ場合ニ於テ等級上一階上級ノ裁判所之ヲナスモノトス

第一 當然權限ヲ有スル裁判所或ル場合ニ於テ法律上又ハ事實上裁判官ノ職務執行ニ故障アルトキ

第二 各異裁判所ノ管轄ノ區劃ニ關シ訴訟ニ付テノ權限ヲ有スル裁判所不明ナルトキ

第三 各異ノ裁判所ニ普通裁判管轄ヲ有スル數人訴訟仲間トナリ普通裁判管轄ニ於テ出訴セラルヘキ場合ニシテ其訴訟ニ付キ共通特別裁判管轄ノ定メラサルトキ

第四 物件上ノ裁判管轄ニ於テ訴訟ヲ提起スヘキ場合ニ於テ其物件各異ノ裁判所管轄區内ニ存在スルトキ

第五 一訴訟ニ付キ各異ノ裁判所ノ權限ヲ有スルノ言渡ヲナシタル裁決確定シタルトキ

第六 訴訟ニ付キ各異裁判所ノ一ノ權限ヲ有スル場合ニ於テ其各裁判所ノ權限ヲ有セサルノ言渡ヲナシタル裁決確定シタルトキ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

〔解義〕 本條ハ一讀明瞭ニシテ別ニ解釋ヲ要セス申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ハ前條ノ解義ニ依テ自知ラセラルヘシ

〔理由〕 申請ヲ決定スルニ口頭辯論ヲ須ヒス又決定ニ對シ上訴ヲ許サ、ル所以ノモノハ一ノ請願ヲ處分スルマテニシテ決シテ爭訟ヲ裁決スルニ非ラサレハナリ

〔參照〕 獨 第三十七條 權限ヲ有スル裁判所ヲ定ル爲メノ申立ニ付テノ裁決ハ豫メ口頭上ノ審問ヲクシテ之ヲナスコトヲ得

權限ヲ有スル裁判所ヲ定ル決議ニ對スル不服ハ之ヲ申立ルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因

○裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ効力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セ

第一 財産權上ノ請求ニ非ラサル訴訟ニ係ルトキ

第二 專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

〔解義〕

第二十九條ハ訴訟人ノ合意ヲ以テ事物上若シハ土地上ノ管轄ニアラサル第一審裁判所ヲ管轄裁判所ト爲スヲ得ヘキコト第三十條ハ被告カ暗黙ニ依リ管轄ヲ承認セル場合ヲ第三十一條ハ訴訟人ノ合意ヲ以テ管轄ヲ定ムヘカラサル場合ヲ示定セリ

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ依リ管轄權ヲ有スルコトヲ得ヘシ故ニ價額百圓ヲ超過スルモ區裁判所ヘ訴フルモ又百圓ヲ超過セサルモ地方裁判所ニ訴フルモ當事者双方ノ隨意ナリトス

當事者ノ合意ニ因リ管轄ヲ定ムルハ第一審裁判所ニ限レリ故ニ之レヨリ上級ナル裁判所ハ雙方ノ合意ヲ以テ管轄權ヲ變更ス可カラサルナリ

又當事者ノ合意ハ書面ニ依テ分明ナラシメサル可ラス且當事者ノ合意ハ例ニハ一定ノ會社ノ關係又ハ一定ノ保險契約ノ如ク權利ノ關係一定シ且其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限り有効ナリ若シ萬般ノ權利關係ニ係ルトキハ裁判所ハ管轄違ノ宣告ヲ爲スヘキナリ

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲スモハ仮令ヒ非管轄裁判所ナルモ第一審裁判所ハ前ト同シク管轄權ヲ有ス此時ハ被告カ暗黙ニ之ヲ認諾セリト看做スモノナリ然レモ若シ被告カ初ヨリ欣席セシモハ決シテ之ヲ默諾セシモノト看做ス能ハサルナリ

第三十一條 以上當事者ノ合意ニ因リ管轄ヲ定ムルヲ得ヘシト雖モ若シ其訴訟ニシテ財産權上ノ請求ニ係ラサルトキ又ハ其訴訟ニシテ專屬管轄ニ屬スルモハ決シテ之ヲ許サ、ルナリ財産權上ノ請求ニ係ラサルトキトハ婚姻ニ關スル訴其他身分上ニ關スル訴ノ如キヲ云ヒ又專屬管轄トハ不動産ニ係ル訴訟ニシテ本法第二十二條ニ定ムル如キヲ云フ

〔分拆〕 合意ノ管轄ニ付其要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 第一審裁判所ノ管轄權ヲラサル可ラス

第二 當事者ノ合意ハ書面ニ依リ分明ナラシムルカ又ハ被告カ口頭辯論ヲ始ムル前異議ヲ申立サルカヲ要ス

第三 一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ナラサル可ラス

○裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第四 訴訟カ必ス財産權上ニ係リ且管轄カ專屬ナラサルヲ要ス
〔理由〕 管轄ノ合意ヲ許シタルハ元ト訴訟ノ眼目トスル所原被告ノ便益ヲ計リ且法權保護
ノ周到ニシテ迅速ナルヲ期スルニ在リ又管轄ノ合意ヲ一定ノ權利關係財産權上ノ請求及
ヒ管轄ノ專屬以外ニ制限シタルハ公然ノ秩序ヲ保護スル爲メ特ニ法律ヲ以テ定メタルヲ
濫ニ變更セシメカラシカ爲メナリ

〔參照〕 獨 第三十八條 當然權限ヲ有セサル始審裁判所ハ原被告雙方ノ明約又ハ黙約ニ
依リ權限ヲ有スルモノトス

獨 第三十九條 黙約ト看做スヘキハ被告權限違ヲ申立ルコトナクシテ本事件ノ口頭上
審問ヲ受ケタルトキナリトス

獨 第四十條 契約ハ一定ノ權利上關係及其關係ヨリ生スル訴訟ニ關セサルトキハ法律
上効力ヲ有セサルモノトス契約ハ其訴訟財産權上ヨリ他ノ請求ニ關スルトキ又ハ其訴訟
ニ付キ特別裁判管轄ノ定マリタルトキハ之ヲ許サ、ルモノトス

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セ
ラル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ

付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者共同義務者若クハ償
還義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナ
ルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第二 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受ク
ルトキ又ハ訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルトキ
又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタル
トキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判
事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命
判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、ユト無
シ

〔字解〕 除斥トハ判事カ或ル原因ニ依リ訴訟事件ニ付テノ職務執行ヨリ擯斥セララル、ナニ
ヒ又忌避トハ除斥ト同一ノ原因及ヒ偏頗ノ恐レアルトキ當事者ヨリ判事ノ掛リ替ヲ求ム
ルヲ云フ受命判事トハ下調ノ爲メ特ニ裁判所ヨリ命ヲ受ケタル判事ヲ云ヒ又受託判事ト

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

ハ他廳ヨリ或取調ノ囑託ヲ受ケタル判事ヲ云フ

〔解義〕〔理由〕本條ハ判事カ職務ヨリ除斥セラル、場合ヲ示定セリ

除斥ハ原告ノ忌避スルト否トニ關セズ法律ノ力ニ依テ命スルモノナルヲ以テ敢テ訴訟經過ノ時期如何ニ依ルヲ要セザルナリ法律上除斥ス可キ判事ノ參與シタル判決ニ對シテハ上訴ヲ爲シ又ハ再審ヲ求ムルコトヲ得ヘシ而シテ忌避ハ原告ノ有スル權利ニシテ即チ判事ニ偏頗ノ恐レアルトキ之ヲ行フコトヲ得ヘキモノナレハ自ラ其權利ヲ拋棄シ其審判ニ就クコトヲ得ヘシ故ニ忌避ハ一定ノ時期ニ於テセサルトキハ遂ニ申立ノ効ヲ失フニ至ルヘシ裁判官適當ノ時ニ回避シ又原告ノ忌避ヲ認可シタルニ拘ラス其訴訟ニ參與シタルトキハ亦其判決ニ對シ不服ヲ訴フルコトヲ得ヘキナリ

本條ハ除斥ノ原因數個ヲ擧示セリ

第一ハ裁判官自ラ關係ヲ有スル事件ニ付テハ之ヲ裁判セシメストノ原則ニ依レルモノナリ判事カ原告ナルトキ又訴訟ニ係ル請求ニ付當事者ト共同權利者共同義務者若クハ當事者ニ對シ償還義務者ナルトキハ即チ裁判官自ラ關係ヲ有スル訴訟ナルヲ以テ其職務ヨリ除斥セラルヘキナリ而シテ主參加人若クハ補助參加人トナルトキモ亦訴訟ノ當事者ナルヲ以テ第一中ニ包含スヘシ又判事ノ歸力之レト同一ナル關係アルトキニ於テモ猶ホ判事ニ關係アルヲ以テ除斥セラルヘキナリ

第二ハ判事又ハ其婦カ當事者又ハ其配偶者ト親族ナルトキニシテ此時ハ姻族ノ關係アリ

テ假令ヒ婚姻ノ解ケタルトキト雖モ猶ホ除斥セラル、モノトス而シテ何人ヲ以テ親族ト爲スカハ民法ニ規定スヘキコトナレトモ現今ハ刑法第百十四條ニ規定セルヲ以テ之ニ依準セサル可ラス

第三ハ判事カ同一事件ニ付證人鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ若クハ受ケタリシトキ又訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ有シタルトキ自カラ訴訟ニ關係ヲ有スルヲ以テ職務ヨリ除斥セラル可シ而シテ證人鑑定人及ヒ訴訟代理人法律上代理人ノコトハ後條ニ規定セリ

第四ハ判事カ前審又ハ仲裁ニ於テ干與シタル裁判ニ對シ當事者ヨリ不服ヲ唱ヘ上訴シタル場合ナリ例ヘハ地方裁判所判事カ上級裁判所ニ轉任セシニ前ニ地方裁判所ニ於テ躬ラ干與シタル裁判ニ對シ上訴ヲ提起シ來レリ此時判事ハ其職務ヨリ除斥セラルヘキナリ但受命判事又ハ受託判事トシテ下調ヲ爲スニハ假令前ニ審判又ハ仲裁ニ干與セシト雖モ除斥セラル、コトナシ何トナレハ受命判事受託判事ハ本案ニ付キ判決ヲ爲スモノニアラサレハナリ

〔參照〕 獨 第四十一條 裁判官ハ左ノ場合ニ於テ其職務執行ヲ法律上禁止セラル、モノトス

第一 裁判官自己ニ原告一方トナル事件又ハ一方ト共同權利者共同義務者又ハ償還義務者ノ關係ヲ有スル事件ナルトキ

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第二 婚姻ノ存否ヲ問ハス裁判官ノ婦ノ事件ナルトキ

第三 裁判官ト直系ノ血族姻族又ハ養子ノ關係アル人又ハ三度ニ至ル傍系ノ血族又ハ二度ニ至ル姻族ノ關係アル人ノ事件ナルトキ但姻族ノ關係ヲ生シタル婚姻ヲ解キタルトキモ亦同シ

第四 裁判官原被告一方ノ訴訟代人又ハ附添人トシテ任セラレ又ハ任セラレタリシ事件又ハ一方ノ法律上代人トシテ出廷スルノ權ヲ有シ又ハ有シタリシ事件ナルトキ

第五 裁判官證人又ハ鑑定人トナリテ尋問ヲ受ケタル事件ナルトキ

第六 裁判官前裁判又ハ仲裁裁判手續ニ於テ不服ヲ受ケタル裁決言渡ノ際參與シタル事件ナルトキ但受命裁判官又ハ受託裁判官ノ行務ニ關スルトキハ此限ニアラス

第二十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セララルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕〔的例〕 本條ハ忌避ノ事ニ付キ示定セリ

前條ニ掲グル事由ニ依リ判事カ職務執行ヨリ除斥セララルトキ又判事ニ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ掛判事ヲ忌避シ其掛替ヘテ求ムルコトヲ得ヘシ

判事カ職務執行ヨリ除斥セララル、場合ハ法律ニ於テ之ヲ豫定セルヲ以テ其以外ノ事由ニ涉リ之ヲ除斥スル能ハスト雖モ若シ其事由ニシテ偏頗ノ恐アリトスルニ足ルトキハ訴訟人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得ヘシ判事モ亦是等ノ事由アルトキ其訴訟ヲ回避シ得ヘシコトハ後條ニ規定セリ

偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ忌避スルコトヲ得ルトアリ故コ苟モ偏頗ノ恐アリトスルニ足ルトキハ前條ノ除斥ト異リ其事由ノ如何ヲ問ハス總テ之ヲ忌避スルコトヲ得ヘキナリ

本條ハ偏頗ノ忌避ニ付之カ解義ヲ掲ケリ即チ判事カ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキハ之カ偏頗ノ恐アリトスルコトヲ得ヘシ

不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトハ例ヘハ裁判官其訴訟事件ニ付キ意見ヲ泄シ若クハ忠告シ又ハ原被告ノ一方ニ親密ナル交際アルカ若クハ怨恨アルカ又ハ證人若クハ鑑定人ト指名セラレタルトキノ如シ

右偏頗ニ付故ヲ解義ヲ掲グル所以ノモノハ當事者ヨリ些末チ事由トシ濫ニ忌避スルノ弊ヲ防クニ在リ

〔參照〕 獨 第四十二條 裁判官其職務執行ヲ法律上禁止セラレタル場合竝ニ偏頗ノ恐レアルトキハ之ヲ忌避スルコトヲ得ルモノトス

偏頗ノ恐レアル爲メノ忌避ハ裁判官ノ公平ニ對スル嫌疑ヲ辨明スルニ適切ナル理由アル

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

トキ之ヲナスコトヲ得忌避權ハ各個ノ場合ニ於テ原被告雙方ニ屬スルモノトス

第二十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

〔解義〕 本條ハ忌避ニ付テノ申立ノ時期ヲ示定セリ

判事カ除斥セラル、場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得ヘシ又偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ本案ノ口頭辨論ニ立入ル前之カ申立ヲ爲サ、ル可ラス故ニ若シ判事ノ面前ニ於テ本案ノ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ答辨シタル後ハ最早之カ申立ヲ爲スコトヲ得サルナリ但原被告カ申立ヲ爲ス當時忌避ノ原因アルヲ知ラサルモハ格別ナリトス

除斥セラル、場合ニ於テノ忌避ト偏頗ノ恐アル場合ニ於テノ忌避ト如此差異ヲ設ケタルノ理由ハ第三十二條ノ解義ニ詳悉セリ

〔辨疑〕 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ依令ヒ辨論ヲ

終結シタルモ未タ判決ヲ受ケサル以前ナレハ猶ホ之ヲ爲シ得ヘキヤ如何曰ク然リ判決ヲ受ケサル以前ニ在テハ未タ訴訟ハ落着セサルヲ以テ本條如何ナル程度ニ在ルヲ問ハストアルニ包含スルモノナリ若シ程度ノ文字ヲ狹隘ニ解釋シ辨論終結以前ニ限ルトスルトキハ其取調ノ無効ニ歸スルヲ知了シナカテ之カ判決ヲ與ヘサル可ラサルニ至ル豈ニ如此ノ律意ナランヤ故ニ辨論終結後判決以前ニ於テ職員ノ除斥セラル、事由ヲ發見スルトキハ更ニ適當ノ取調ヲ爲サ、ル可ラナリ

〔參照〕 獨 第四十三條 原被告其知了シタル忌避ノ理由ヲ申立ルコトナクシテ審問ニ就キ又ハ申立ヲナシタルトキハ偏頗ノ恐レアルカ爲メ裁判官ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其疏明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ疏明ス可シ

〔解義〕 本條以下第四十條ニテハ忌避ノ手續ヲ示定セリ

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

忌避ノ申請ハ忌避セント欲スル判事ノ所屬セル裁判所ニ爲サ、ル可ラス而シテ申請ハ書面ヲ以テスルモ又ハ口頭ヲ以テ申立テ書記ヲシテ調査ヲ錄取セシムルモ自由ナリトス
 忌避ノ原因ハ之ヲ疏明セサル可ラズ故ニ判事カ法律ニ依リ職務執行ヨリ除斥セラル、場
 合ニ於テノ忌避ナレハ本法第三十二條ニ列記セル事由ヲ疏明ス可シ又偏頗ノ恐アル場合
 ニ於テノ忌避ナレハ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ルヘキ事情ヲ疏明セサル可ラ
 ス又之ヲ疏明スルコトハ初メ提出セシ書面ニ於テスルカ口頭ヲ以テスルトキハ其當時ニ申
 立ツルヲ通常トス又判事カ第三十七條ニ從ヒ陳述シタル意見ハ探テ以テ疏明ノ用ニ充ツ
 ルコトヲ得ヘシ

原告カ申立チ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ答辨セシ後ニ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ原因
 ノ其後ニ生シタルカ又ハ原因アルコト後ニ覺知セシカヲ證明セサル可ラス何トナレハ申
 立チ爲ス當時其原因アルコトヲ覺知セルトキハ自ラ權利ヲ拋棄スルモノト見做シ之カ忌避
 ヲ許サ、レハナリ

〔參照〕 獨 第四十四條 忌避ノ申立ハ裁判官所屬ノ裁判所ニ之ヲナスヘキモノトス又其
 申立ハ裁判所書記ニ口述シテ筆記セシムルコトヲ得

忌避ノ理由ハ之ヲ證明スヘキモノトス宣誓ハ其證明ノ爲メ之ヲ用ルコトヲ許サス忌避セ
 ラレタル裁判官ノ證言ハ其證明ノ爲メ之ヲ引用スルコトヲ得

忌避セラレタル裁判官ハ忌避ノ理由ニ付職務上陳述ヲナスヘキモノトス

原告被告裁判官ノ審問ニ就キ又ハ之ニ申立チナシタル場合ニ於テ偏頗ノ恐レアルカ爲メ其
 裁判官ヲ忌避スルトキハ後日始メテ其忌避ノ理由ノ生シ又ハ原告被告ノ之ヲ知了シタルコ
 トヲ證明スヘキモノトス

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌
 避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得
 ス

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近
 上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス
 若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

〔解義〕〔理由〕 本條ハ忌避ノ申請ヲ裁判スルコトニ付キ示定セリ

忌避セラレタル判事カ合議裁判所即チ地方裁判所以上ノ裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所
 定員ノ判事ヲ以テ之ヲ裁判セシム而シテ忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ干與スルコトヲ得
 ズ若シ忌避セラレタル判事ヲ除キ他ノ判事ニテ定數ノ人員ニ充タサルトキハ直近上級ノ
 裁判所之ヲ裁判ス即チ地方裁判所ニ對シテハ控訴院控訴院ニ對シテハ大審院之ヲ裁判ス
 而シテ判事ノ定數ニ充タサル場合ニ於テ之ヲ上級裁判所ニ移送スルハ何人カ其任ニ當ル可

キカニ付キ規定セズト雖此時ハ其裁判所ヨリ上級裁判所ニ移送セサル可ラス何トナレハ判事ノ定數ニ充タサルトテ之ヲ却下スル能ハサルハナリ
 區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所之ヲ裁判ス故ニ區裁判所ハ其申請ヲ地方裁判所ニ送致セサル可ラス然レニ區裁判所判事ニシテ其申請ヲ正當ナリトスルトキハ最早地方裁判所ニ於テ裁判スルノ必要ナク隨テ申請ヲ送致スルヲ要セサルナリ區裁判所判事ノ忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所ニ於テ裁判スル所以ノモノハ區裁判所ハ單獨判事ニ合議制ニアラサルヲ以テ判事ニ對シ忌避スルトキハ即チ區裁判所ヲ忌避スル者ト爲セハナリ且之ヲ裁判スルモ全一權力アル他ノ單獨判事ニテ爲サル可ラサルハナリ

〔參照〕 獨 第四十五條 忌避ノ申立ニ付テハ忌避セラレタル者ノ所屬裁判所之ヲ裁決シ其裁判所忌避セラレタル職員ノ退去スルカ爲メ議決スルコト能ハサルトキハ等級上一階上級ノ裁判所之ヲ裁決スルモノトス
 區裁判官忌避セラレ、トキハ地方裁判所之ヲ裁決スルモノトス區裁判官忌避ノ申立ヲ理由アリトスルトキハ裁決ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 本兩條ハ忌避申立ノ審理及ヒ上訴ノコトニ付キ示定セリ

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ須ヒスシテ裁判所ノ會議室ニ於テ之ヲ爲スモノトス而シテ忌避セラレタル判事ハ其判決以前ニ當リ已ノ意見書ヲ提出セサル可ラス裁判所ハ即チ申請書及ヒ意見書ニ依リ決定スヘキモノナリ

第三十八條 裁判所ニ於テ忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣告シ他ノ判事ヲ交任セシムルキハ申請者ニ於テハ最早満足シ又相手人ニ於テモ交任セラレタル裁判官ノ審理ヲ受クルモ固ヨリ差等アルノ理ナキヲ以テ孰レモ之ニ對シ上訴スルヲ得サルナリ然レニ其申請ヲ不當ナリト宣告スルキハ大ニ利害ニ關係アルヲ以テ之カ上訴ヲ許セリ而シテ即時抗告ニ限リ之ヲ爲スコトヲ許シタルハ是レ迅速ニ訴訟ノ落着センヲ希望スルニ出ツルモノナリ

〔參照〕 獨 第四十六條 忌避ノ申立ニ付テノ裁決ハ豫メ口頭上審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得

其申立ヲ理由アリトシテ言渡ス決議ニ對シテハ上訴ヲナスコトヲ得ス其申立ヲ理由ナシトシテ言渡ス決議ニ對シテハ即時故隨チ申立ルコトヲ得

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

獨 第四十四條第三項 忌避セラレタル裁判官ハ忌避ノ理由ニ付職務上陳述ヲナスヘキモノトス

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルマテ總テノ行爲ヲ避ク可シ然レトモ偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス可シ

〔解義〕〔理由〕 本條ハ忌避セラレタル判事ノ行爲ニ付キ示定セリ

判事ニシテ忌避セラレタルトキハ其申請ニ對スル裁判ノ完結スルマテ總テノ行爲即チ審理其他一切ノ處分ヲ停止セサル可ラス而シテ偏頗ノ事由ヲ以テ忌避セラレタルトキハ其行爲ニシテ猶豫ス可カラサルモノニ限り之ヲ爲スコトヲ得ヘシ故ニ法律上職務執行ヨリ除斥セラル、場合ニ於ケル忌避ニ至テハ其裁判ノ決着スルマテ如何ナル行爲ト雖ヒ之ヲ停止セサル可ラサルナリ抑法律上職務執行ヨリ除斥セラル場合ハ仮令當事者ノ申請ナキモ法律ノ力ニ依リ當然其執行ヲ禁止セラル、ヲ以テ此場合ニ於ケル忌避ニ付テハ總テノ行爲ヲ爲ス能ハサル固ヨリ當然ナリト雖ヒ偏頗ノ忌避ニ至テハ或ハ其申立ノ不相當ニシテ屢々訴訟ノ滯滞ヲ來シ對手人ニ損害ヲ被ラセ易キノ弊アルヲ以テ法律ハ特ニ此場合ニ限り猶豫ス可ラサル行爲ノミ之ヲ爲スコトヲ得ルト定メタリ而シテ其行爲ノ猶豫ス可ラサルト否ニ至テハ偏ニ裁判官ノ斟酌ニ任サ、ル可ラサルナリ

〔參照〕 獨 第四十七條 忌避セラレタル裁判官ハ忌避申立ノ終結前ハ遅延ス可ラサル處

分ニアラサレハ之ヲナスコトヲ得ス

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セララル疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス

此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルヌトヲ要セス

〔解義〕 本條ハ判事カ職權上忌避シ得ヘキ事ヲ示定セリ

忌避申請ノ管轄裁判所ハ仮令當事者ノ申請アラサルモ掛判事ヨリ若クハ同僚判事ヨリ忌避ノ原因タル事情アリトシテ即チ偏頗ノ嫌疑トシテ忌避セラル、ニ相當ナルヘント申立ヲ爲スコトキハ相當ノ裁判ヲ爲サ、ル可ラサルナリ若シ其申立ニシテ相當ナリトスルトキハ速ニ掛替ヲ命シ又忌避ノ原因ナシトスルトキハ之カ回避ヲ許サ、ル可シ猶ホ判事カ法律ニ依リ除斥セラル、疑アルトキモ裁判ヲ爲サ、ル可ラサルナリ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セラル、疑アルトキトアリ故ニ第三十二條ニ掲クル法律ニ依リ職務ヲ停止セラル、コトノ顯然ナル場合ヲ云爾セルニアラサルハ明カナリ何トナレハ若シ法律ニ依リ職務ヲ停止セラル、コトノ顯然ナル時ハ法律上直ニ回避セサル可ラサレハナリ因テ除斥セラル、ノ事由アリヤ否ヤニ付キ疑ノ存セル場合ト解釋セサル可ラス

○裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

〔參照〕 獨 第四十八條 忌避申立ヲ終結スルノ權アル裁判所ハ其申立ナキモ裁判官其忌
 避ノ理由トナルヘキ狀況ヲ申立テナストキ又ハ他ノ事由ニ依リ裁判官法律上職務執行ヲ
 禁止セラレタルヤニ付キ疑ヲ生スルトキ亦其裁決ヲナスヘキモノトス
 其裁決ハ豫メ原被告雙方ヲ尋問スルコトナクシテ之ヲナスモノトス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所
 屬ノ裁判所之ヲ爲ス

〔解義〕 本節除斥及ヒ忌避ニ付テハ諸規則ハ裁判所書記ニモ適用スヘキコトヲ示定セリ
 裁判所書記ハ調書ヲ作ル等頗ル重要ナル職務ニ在ルヲ以テ特ニ本條ヲ設ケテ判事ト同一
 ノ決定ニ及ヒタルモノナリ

〔參照〕 獨 第四十九條 此節ノ規定ハ裁判所書記ニモ亦之ヲ適用スルモノトス其裁決ハ
 裁判所書記ノ附屬スル裁判所之ヲナス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ立會
 ノ可シ

- 第一 公ノ法人ニ關スル訴訟
- 第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 〔理由〕 〔的例〕 本條ハ檢事カ訴訟ニ立會フ可キ場合ヲ示定セリ

檢事ハ裁判所職員ノ一ニシテ專ラ刑事ノ公訴ヲ起シ其取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ
 正當ナル適用ヲ請求シ及ヒ其判決ノ適當ニ執行セラレ、ヤヲ監視スルニ在リト雖モ檢事
 及シテ元ト社會ノ自代トナリ公益ヲ保護スルニ淵源スルヲ以テ民事ノ訴訟ニテモ公安
 關係モサルトキハ之ニ立會ヒ相當ノ意見ヲ陳述セサル可ラス是レ特ニ本條ノ設ケアル
 所以ナリ本條ハ檢事ノ義務トシテ立會ハサル可ラサルモノニシテ訴訟ノ公安ニ關スル數

○檢事ノ立會

個ノ場合ヲ列記セリ

第一 公ノ法人ニ關スル訴

公ノ法人ニ付テハ本法第十四條ニ於テ解釋セル如ク國縣郡村等ノ無形人ナ云フモノニシテ之ニ對スル訴訟ハ或ハ安寧秩序ニ關スルアリ或ハ社會ノ公益ニ關スルアリテ最モ檢事ノ立會ヲ必要トスルモノナリ

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧蝕ノ遺産ニ關スル訴訟

婚姻ノ無効ヲ爭ヘルカ如キ夫婦間ノ財産ニ關シ雙方爭アルカ如キ一方父ナリト云ヒ一方父ニアラスト爭ヒ若クハ養親子ノ關係ノ有無ニ付キ爭アルカ如キ無能力者即チ幼者禁治產者ニ關スル爭ノ如キ養料ヲ給與スル義務ノ有無ニ付キ爭アルカ如キ失踪者及ヒ相續人ナキ遺留財産ニ對シ爭ヲ生スルカ如キハ孰レモ公安ニ關係セサルハナシ是等ノ事ハ各國大抵民法中ニ規定セリト雖モ個ハ民法中ノ公法ト稱スヘキモノニシテ決シテ他純然タル私契約ト同視スルヲ得サルモノナリ

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

證書ノ偽造或ハ變造ニ關スル訴訟ニ至テハ果シテ刑事上ノ犯罪アルモ知ル可ラス又再審ハ確定判決ヲ平翻セシメテ再審ニシテ而シテ法律ノ再審ヲ許セル場合ハ專ラ刑事ノ犯罪ニ關セルコト多シ是レ檢事ノ立會ヲ必要トスル所以ナリ

以上ノ場合ニ於テハ檢事ハ必ス口頭辨論ニ立會ヒ相當ノ意見ヲ陳述セサル可ラス而シテ此等ノ訴訟ニ立會フハ主トシテ法律上保護ヲ受クヘキ者ノ爲メナリト雖トモ其是非ニ拘ラズ何時モ其者ニ利益トナル可キ意見ヲ陳述セサル可ラサルノ責ナシ故ニ之カ反對ノ意見ヲモ陳述スルコトヲ得ヘキナリ

檢事ハ右等ノ訴訟ニ立會フト雖モ決シテ訴訟人ニアラサルヲ以テ刑事ノ公訴ト異リ當事者ノ辨論中ニ意見ヲ陳述スルヲ得ス必ス當事者ノ辨論終リタル後ニ於テセサル可ラサルナリ又當事者モ檢事ノ意見ニ對シ反駁辨論ヲ試ム可ラズ只檢事ノ陳述ニシテ事實ヲ誤解セルト之ヲ更正スルコトヲ得ヘキノモ

本條ハ檢事ニ訴訟ヲ通知スルノ規定ナキヲ以テ檢事ハ何ニ依テ其訴訟ノ有無ヲ知ルコトヲ得ヘキヤノ疑ナキニアラスト雖モ檢事ハ元ト同一裁判所内ニ在ルヲ以テ右訴訟アル毎ニ裁判所ヨリ之ヲ通知セシムルノ律意タル明カナリ

此他本法中檢事ノ關係スル場合ニアリ本法第百一條及ヒ第三百五十四條ニ定ムルモノ之

○檢事ノ立會

ナリ
本條ハ檢事ノ必キ立會ヲ要スヘキ場合ヲ規定セリ若シ本條以外ノ訴訟ニシテ公益世安ニ關係スルハ例ヘハ贈與ニ關スル訴訟相續分配ニ關スル訴訟ノ如キ立會ヲ必要ト認ムヘキハ檢事ハ其通知ヲ求メ意見ヲ述ブルコトヲ得ヘキナリ

〔參考〕 構成法第六條 各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付公訴ヲ起シ其取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラル、ヤチ監視シ又民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其意見ヲ述ブルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上其ノ職權ニ關スル監督事務ヲ行フ

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ト法律上代理人ニ依ルル訴訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從テ

〔字解〕 法律上代理人トハ法律上常ニ無能力者ヲ代表スル者ヲ云フ幼者ニ於ケル父若クハ

後見人婦ニ於ケル夫無形人タル社團ニ於ケル管理人ノ如キ是ナリ
〔解義〕 本節ハ當事者ノ訴訟能力ニ關シ示定セリ

原告者クハ被告トナリ自ラ訴訟ヲ爲ス能力ノ一代理人ヲシテ訴訟ヲ爲サシムル能力ノ一訴訟無能力者カ法律上代理人ニ代表セラル、一及ヒ法律上代理人訴訟ヲ爲スニ付特別委任ヲ要スル場合ノ一ハ民法ノ規定ニ從ハサル可ラス而シテ以上ノ能力ニ付テハ民法人事篇ニ依テ決定ス可キコトナリ

抑モ自行自治ノ能力ヲ有スルモノハ隨テ訴訟能力ヲ有スルコト明ナリ而シテ自行自治ノ能力ヲ有スルモノハ果シテ如何ナル人ナル乎ニ至テハ民法ノ規定ニ因テ始テ知ル可シト雖モ概テ左ニ掲クル者ハ訴訟能力ナキモノトス
智識ヲ具備セサル者例ヘハ小兒、精神病者ノ類
智識ヲ具備スルモ自治ノ權ヲ有セス又ハ制限セル自治ヲ有セル者例ヘハ未丁年者、浪費者、既脱後見幼者ノ類

又無形人タル社團、財團ハ原告トナリ得ルモ自ラ訴訟スルノ能力ナシ
法律上代理人カ訴訟ヲ爲スニ付特別委任ヲ必要トスル場合ハ民法人事篇ニ規定スヘキコトニシテ後見人カ或場合ニ於テ裁判所ノ認可ヲ受クルカ如キヲ云フ

〔參照〕 獨 第五十條 原告告ノ裁判所ニ出ルノ能力及訴訟能力ヲ有セサル原告告ノ爲メ他人ヲ以テスル代理(法律上代人)並ニ訴訟ヲ爲メ特別委任ノ必要ハ民法ニ從テ之ヲ

定ムルモノトス但後條ニ於テ之ニ違フ規定ヲ掲グル場合ハ此限ニアラス

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

〔解義〕 本條ハ一讀明瞭ニシテ解釋ヲ要セス

本條ノ趣旨ニ依テ推考スルルハ若シ外國人自國ノ法律ニ於テ訴訟能力ヲ有スルトキハ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ナキト雖トモ猶ホ訴訟能力者ト看做ス可キハ自ラ明ナリ

〔參照〕 獨 第五十三條 自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ナキ外國人訴訟裁判所ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルトキハ之ヲ其能力アルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滞ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルトキハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲナ

スコトヲ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

〔解義〕 〔理由〕 〔的例〕 本條ハ訴訟能力、代理資格、委任缺乏ニ付キ調査ス可キ事ヲ示定セリ

本條第一項ハ訴訟能力ハ完否、法律上代理人タル資格ノ適否及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル委任ノ有無ニ付キ裁判所ハ職權ヲ以テ調査ス可キコトヲ定メリ

訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハストアリ故ニ訴訟ノ結局ニ至ル間何時ニテモ之ヲ發見スルルハ調査セサル可ラサルナリ何トナレハ若シ是等ノ不完備アルルハ訴訟ハ遂ニ無効ニ歸スレハナリ又一方是等ノ不完備ニ付キ抗辨スルルハ必ス終局判決前ニ於テ中間判決ヲ爲サ、ル可ラサルナリ尙ホ訴訟ノ進行中原被告訴訟能力ヲ失ヒ或ハ法律上代理人死亡シ若クハ代理權ノ期滿ニ至ルルハ本法第八十條ニ依リ訴訟ハ中斷セラル可キナリ此

他本法中本條ニ參看スヘキ法條ハ第百十二條第百六條第百五十二條ナリトス

第二項ハ訴訟ノ遅延ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリテ且其欠缺ヲ補正シ得ヘキハ裁判所ハ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ訴訟ヲ繼續スルヲ得ヘキコトヲ定メリ尙ホ此場合ニ於テハ補正ノ爲メ與ヘタル一定ノ期限ヲ經過スルニ非ラサレハ之カ冒渡ヲ爲ス可ラストナセリ

訴訟遅延ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリトハ例ヘハ假差押假處分ノ實行、時効ノ中斷、

猶豫期限ノ經過等ニ付其利害ノ最モ時間ニ關係スル場合ヲ云フ
 欠缺スル所アルモ一旦訴訟ノ繼續ヲ許サレタル上ハ訴訟資格アル者ノ爲シタルト同一ノ
 効力アリトス然レモ一定ノ時期内ニ補正セヌシテ期間ヲ經過スルモ以前ニ溯リ渾テノ
 行爲ヲ無効トナスモノナリ此時ハ補正セサル訴訟人ハ出廷セサルモノト看做シ欠席判決
 ヲ受ク可キナリ

一定期間ノ滿了後ハ何時ニテモ裁判ヲ爲スコトヲ得ヘント雖モ若シ未タ裁判ヲ與ヘサル時
 ハ最終ノ口頭辨論マテハ欠缺ヲ追完スルコトヲ得ヘキナリ

〔參照〕

第五十四條 裁判所ハ職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代人ノ資格及訴訟ヲナス
 爲メ必要ナル委任ノ欠缺ヲキヤニ注意スヘキモノトス
 原告又ハ其法律上代人ニハ原告ノ爲メ遲延ノ恐レアルトキ其欠缺ヲ補フノ制限ヲ以
 テ訴訟ヲナスコトヲ許スヲ得終局判決ハ其欠缺ヲ補フ爲メ定ムヘキ期限ノ經過シタル後
 始メテ之ヲ言渡スコトヲ許スモノトス

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分明ナル相續
 人ニ對シ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件
 ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滞ノ爲メ危害ノ恐アル場
 合ニ限リ特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經
 スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキ
 ハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ
 申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭
 スルマテ訴訟行爲ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又
 ハ兵營地若シハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律
 上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滞ノ爲メ危害ヲシト雖モ前條ノ規定
 ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得

此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス現定ヲ除ク外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

〔解義〕 第四十六條及ヒ第四十七條ハ訴訟上代理人ヲ任命ス可キ場合ヲ示定セリ

第四十六條 訴訟無能力者ニシテ法律上代理人ノ全クアラサルモ又ハ相續人ノ定マラサ
 ル遺産又ハ分明アラサル相續人ニシテ同シク法律上代理人アラサルモ是等ニ對シテ訴ヲ
 起ス可キ場合ニ於テ其事件ヲ管轄ス可キ裁判所ノ裁判長ハ其事件ノ情狀ヲ細察シ若シ法

○訴訟能力

律上代理人ナキカ爲メ訴訟ヲ遲延シ爲ニ危害ヲ生スル恐アルルハ(例ヘハ出訴期限ニ切
迫セルトキノ如シ)特別代理人ヲ任セサル可ラサルナリ
特別代理人ノ任命ヲ付テノ申請ハ書面ニテモ又口頭ヲ以テモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ而シテ裁
判所ハ口頭辨論ヲ須ヒス直ニ會議室ニ於テ決定シ其裁判ヲ申請人ニ送達シ又申請ヲ認許
シタルルハ特別代理人ニモ該裁判ヲ送達スヘキモノトス
申請ヲ認許セシキハ固ヨリ異議ノ容ルヘキナキモ若シ申請ヲ却下サレタルルハ申請人ハ
其裁判ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得可シ而シテ抗告ノモニ限リ之ヲ許シタルハ未タ本訴訟ニア
ラサルト又迅速ニ落着センヲ希望スルニアリ抗告ノ手續等ハ本法第四百五十五條以下ニ
規定セリ

裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲
ニ付キ法律上代理人ト同一ナル權利義務ヲ有スルモノトス

第四十七條 又本法第十五條ニ掲クル場合ニ於テ訴訟無能力者カ現在地又ハ兵營地若ク
ハ軍監定繫所ノ裁判所ニ於テ訴ヲ受ク可キルニシテ法律上代理人他ノ地ニ住スルルハ裁
判所ハ如何ナル場合ニテモ特別代理人ヲ任セサル可ラス而シテ其手續ニ至テハ抗告ヲ許ス
規定ヲ除外總テ第四十六條ノ規定ニ依準ス可キモノトス

【參照】 獨 第五十五條 訴訟能力ヲ有セサル原告法律上代人ナクシテ出訴セラルヘキ
トキ其訴訟裁判所ノ裁判長ハ遲延ノ恐レアル場合ニ限リ申立ニ依リ法律上代人ノ出廷ス

ルマテ特別代人ヲ任スヘキモノトス

裁判長ハ第二十一條ノ場合ニ於テ訴訟能力ヲ有セサル者其所在地又ハ屯營地ノ裁判所ニ
出訴セラルヘキトキニモ亦此特別代人ヲ任スルコトヲ得

第二節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又
ハ訴ヲ受クルコトヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ

目的物タルトキ

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナ

ル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

【解義】 【理由】 【的例】 本條ハ共同訴訟人トシテ數人カ一時ニ訴ヲ爲シ又訴ヲ受クル場
合ヲ示定セリ

共同訴訟人ト爲リ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クル場合ハ左ノ如シ

第一 數人カ訴訟物件ニ付キ共同ノ權利義務アル時ニシテ例ヘハ訴訟ノ目的物ニ付キ數人
共有スルトキ又ハ數人連帶ノ權利者ナルトキ又不可分ノ債務者若クハ連帶義務者トナリ

○共同訴訟人

○共同訴訟人

テ金圓ノ貸借ヲ爲シタルトキノ如シ此時ハ其請求又ハ負擔ニ付キ同一ナル權利義務ヲ有
 スルヲ以テ共同訴訟人トシテ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クヘキナリ
 第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ理由ニ因リ權利者又ハ義務者ナルトキ例ヘハ數人ノ
 行爲ニ因リ損害ヲ被リタルトキ其數人ニ對シ賠償ヲ求ムルトキ又ハ連名ノ貸借ニシテ權
 利者義務者共ニ其一部宛ノ權利義務ヲ有スルニ止マルトキノ如シ此時ハ事實上及ヒ法律上
 同一理由ナルヲ以テ共同訴訟人トシテ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クヘキナリ
 第三 訴訟物件性質上同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ理由ニ基クノ請求又ハ義務ニ係ル
 トキニシテ例ヘハ保險會社カ數多ノ被保人ヨリ別個ニシテ而カモ同種類ナル規約券ヲ以
 テ其約束ニ相當スル純益配當金ノ支拂ヲ訴ヘタルトキ及ヒ數多ノ股分持主各種ノ證券
 ニ因リ各々或ル率額ノ配當ヲ受クヘシトシテ其配當ノ請求ニ對シ訴訟スルカ如シ此時モ
 共同訴訟人トシテ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クヘキナリ
 以上共同訴訟人トシテ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルルハ期日ノ短縮手續ノ簡約費用ノ節減
 ニ付キ大ナル利益アルモノナリ本條ヲ設クルノ趣旨モ亦此理由ニ外ナラス
 本條得ノ字ヲ加ヘタルヲ視レハ訴訟人ハ此場合ニ於テモ各別ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルヲ
 得ヘキハ明カナリ然レハ本法第百二十條ニ依ルルハ裁判所ハ職權ヲ以テ訴訟ノ合併ヲ命
 スルコトヲ得ヘキナリ又第百十八條ニ依レハ裁判所ハ合併シタル訴訟ニテモ便宜上辨論
 ヲ分離スルコトヲ得ヘキナリ

本條ニ掲グル以外ノ場合ニ於テハ快シテ共同訴訟人トナル可ラス若シ共ニ訴ヲ爲ストキ
 ハ裁判所ニ於テ却下スヘキナリ

又共同訴訟ハ數多ノ原告ナルカ將テ數多ノ被告ナルカノ場合ニシテ必ス二人以上ノ人
 ルヲ要ス故ニ彼ノ一人ニ對シ數多ノ請求ヲ合併シテ訴フルモノト混同ス可ラサルナリ

〔參照〕 獨 第五十六條 數人訴訟事件ニ付權利共同者ナルト又ハ同一ノ事實上及ヒ法律上
 ノ理由ニ依リ權利者又ハ義務者ナルトキハ訴訟仲間トナリ共同シテ出訴シ又ハ出訴セラ
 ルコトヲ得

獨 第五十七條 同種類及本然同種類ノ事實上及ヒ法律上ノ理由ニ基ク請求又ハ義務ノ訴
 訟事件ナルトキニモ亦數人訴訟仲間トナリ共同シテ出訴シ又ハ出訴セラルコトヲ得

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人
 ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠
 ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボサス

〔解義〕 本條ハ共同訴訟人ノ法律上ノ地位ニ關スルコトニ付キ示定セリ

抑共同訴訟人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルハ其形狀ニ於テ變體ヲ顯ハスモ法律上ノ効
 果ニ至テハ各自ニ訴ヲ爲シ又各自ニ訴ヲ受クルト毫モ異ナラサルナリ故ニ共同訴訟人中
 一人ノ訴訟行爲ハ他ノ共同訴訟人ニ利益ヲ與ヘス又損害ヲ加ヘサルナリ
 共同訴訟人ハ各自獨立スヘキヲ以テ他ノ共同訴訟人ト同一ナル辨論ヲ爲スヲ要セス各々

○共同訴訟人

○共同訴訟人

其所考ニ任セ攻撃辨護ヲ爲スコトヲ得ヘキナリ故ニ期日ニ出廷シ若クハ欠席スルコトノ結果ハ其者一人ニテ擔任セサル可ラス又訴訟入費ニ至テモ全一ノ結果ヲ見ハスモノトス(本法第八十條)

〔理由〕 本條ハ第三者ノ行爲ハ他人ノ利益ヲ爲サス又損害ヲ爲サスト云ヘル原則ニ基ケルモノトス(民法財産篇第三百四十五條)

〔參照〕 獨 第五十八條 訴訟仲間ハ民法又ハ此法ノ規定ニ於テ別段ノ定メナキ場合ニ限リ其一人ノ行爲他人ノ利益ヲ與ヘ及損害ヲ加フルコトナクシテ對手ニ對シ各自獨立スルモノトス

第五十條 然レモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキニ限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ効ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ爭ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク爭ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於テ爲ス可キ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ前條ノ例外ニシテ共同訴訟人ノ行爲カ他ノ共同訴訟人ニ効力ヲ及ホス可キ場合ヲ示定セリ

共同訴訟人ノ行爲ニシテ他ノ共同訴訟人ニ効力ヲ及ホスニハ左ノ條件ヲ要ス
訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキ

權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキトハ例ヘハ地所ノ共有者ニ對シ請求ヲ爲ス道路ノ通行權或ハ水道疏通權ニ關スル訴訟事件ノ如シ此場合ニ於テ共同訴訟人ノ陳述相異ナル

片(例ヘハ其一名ハ承諾シ他一名ハ之ヲ爭論スルキ)ノ如シ裁判所ハ其認定ニ依リ事實ノ證明アリタルヤ否ヲ判斷ス可キモノトス即チ地役ハ不可分ナルヲ以テ所有者ノ或一部ハ

地役ヲ免シ或一部ハ義務アリト爲スヲ得サルナリ必ス共有者ニ通シテ一齊ノ裁判ヲ與エサル可ラス此他民法上不可分ト定ムルモノハ皆チ此中ニ包含スルモノナリ

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦(辨護)ニシテ他ノ共同訴訟人ノ利益トナル可キトキハ其効ヲ及スモノナリ
又共同訴訟人中ノ或ル人カ對手人ノ主張ヲ爭ヒ又ハ認諾セサルキハ總テノ共同訴訟人モ亦

悉ク爭ヒ又ハ認諾セサルモノト見做ス

○共同訴訟人

○第三者ノ訴訟參加

又本條ハ共同訴訟人間其權利義務ニ付キ判決ノ異同ヲ來シ以テ匡救ス可ラサルノ混雜ヲ招キカサラシメノコトヲ慮リ共同訴訟入中期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ委任シタルモノト見做セリ此場合ニ於テモ懈怠シタル者ニハ懈怠セサリシ時ト同シシ總テノ送達呼出ヲ爲サ、ル可ラス即チ共同シテ起訴セル事件ハ及フ的其終局マテ共同シテ進行セシメントノ義ニ出タルモノナリ故ニ又懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ加ハルコトヲ得ヘキナリ

〔參照〕 獨 第五十九條 訴訟トナリタル權利上ノ關係訴訟仲間總員ニ對シ合一スルニアラサレハ確定スルコトヲ得サル場合又ハ訴訟仲間其他ノ理由ニ依リ欲クヘカラサル者ナル場合ニ於テ各箇ノ訴訟仲間裁判期日又ハ期限ヲ懈怠スルトキ其懈怠シタル訴訟仲間ハ懈怠セサル者ニ依リ代理セラレタル者ト看做ス

獨 第六十條 訴訟ヲ擔任スルノ權ハ各訴訟仲間ニ屬スルモノトス訴訟仲間對手ヲ裁判期日ニ喚出ストキハ其他ノ訴訟仲間チモ亦喚出ス可シ

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一部分ヲ自己ノ爲ニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴（主參

加）ヲ爲シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得

第二者カ原告及ビ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同シ

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトナ問ハス原告、被告若クハ主參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ所屬スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

〔字解〕 權利拘束トハ裁判關係ト云フノ義ナリ即チ原告被告ハ提起セラレタル訴訟ニ付キ受訴訟所ニ於テ法律上訴訟人タルノ關係ヲ生スルモノナリ而シテ權利拘束ハ民法上訴訟法上種々ノ効果ヲ生ス訴訟ノ提起アリタルル期滿免除ノ期限ヲ中斷スルハ民法上ノ効果ノ一ナリ訴訟法上ノ効果ニ至テハ本法第九十五條ニ規定セリ

〔解義〕 〔的例〕 本節ハ主參加、補從參加、告知參加、本人指示參加ノ四個ヲ規定セリ而シ

○第三者ノ訴訟參加

○第三者ノ訴訟參加

主參加ニ付テハ第五十一條第五十二條ノ目的タリ

第五十一條 他人ノ間ニ争訟スル目的物ノ全部又ハ一部ニ付キ自己ノ權利ヲ主張セント欲スルハ本訴訟即チ他人間ノ争訟ノ裁判確定ニ至ルマテ何時ニテモ其訴訟ノ第一審裁判所ニ本訴訟ノ原告告ヲ相手取り訴テ起スコトヲ得ヘシ之ヲ主參加訴訟ト云フ

例ヘハ甲者乙者ニ家屋ヲ賣リ後ニ至リ再ヒ之ヲ丙者ニ賣却セリ而シ丙者ヨリ先ニ其引渡ヲ請求シ甲丙二人ノ間ニ争訟ヲ起セリ此時乙者ハ甲丙ノ間ニ争訟セル家屋ニ付先取權アルコトヲ主張シ甲丙二人ヲ相手取り出訴セリ之ヲ主參加ノ場合トス

第一審ニ繫屬シタル裁判所ニ云々トアリ故ニ該争訟ニシテ第二審ニ繫屬スルキ即チ第一審ノ裁判ヲ終リ第二審ヘ上訴中ト雖モ猶ホ其訴訟ノ繫屬シタリシ第一審裁判所ニ訴ヘ出テサル可ラス

權利拘束ノ終ニ至ルマテトアリ權利拘束ハ裁判確定ニ至ルカ又ハ訴ヲ取下ク請求ヲ拋棄シ請求ヲ認諾シ和解ヲ爲シタルトキ始メテ終了スルモノナリ故ニ此等ノ事アラサル以前ニ在テハ何時ニテモ主參加訴訟ヲ提起スルコトヲ得ヘシ然レトモ争訟中參加ヲ爲サスルテ止ミタル第三者若シ眞ニ請求スヘキ權利アルトキハ假令本案ノ判決ハ既ニ確定シタリト雖モ其訴訟物件ニ對シテハ依然權利ヲ保有スル原則ニ依リ其判決ノ執行セラレントスルニ方テ其權利ヲ主張スルコトヲ得ヘシ(本法第五百四十九條)

權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物トアリ是ヲ以テ原告カ被告ニ訴狀ヲ送達シタル等權利拘束ノ始マリタル場合ナラサル可ラス

第三者カ原告被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルキモ前ト同シク兩人ヲ相手取り第一審裁判所ニ出訴スルコトヲ得可シ第三者カ原告被告ノ共謀ニ因テ損害ヲ受タル場合ハ民法財産篇第三百四十條以下ニ規定セリ主參加ハ一種ノ裁判管轄ヲ爲スモノナリ即チ第三者カ相争訟セル原告被告ヲ相手取り第一審ノ繫屬セシ裁判所ニ出訴スルコトヲ得ルハ一ノ新管轄ヲ定ムルモノト云フヘシ是レ其審理ヲシテ簡易ナラシムルノ趣旨ニ出ツルモノトス

第五十二條 主參加訴訟ヲ起シタルキハ本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルモ又上級審ニ繫屬スルモ主參加ニ付テノ裁判確定スルマテ之ヲ中止スルコトヲ得可シ而シテ裁判所ハ原告告若クハ主參加人ノ申立アルキ而巳ナラス職權ヲ以テモ中止スルコトヲ得ヘシ(本法第二百一十一條)

中止ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬セル裁判所ニ爲サ、ル可ラス其裁判所ハ口頭辨論ヲ須ヒス直ニ會議室ニ於テ申立ノ適否ヲ決定ス可シ又裁判所カ中止ヲ命スル決定ニ對シテハ中止ノ爲メ不利ナル者ヨリ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ即時抗告ノコトハ本法第四百六十六條ニ規定セリ

〔參照〕 第六十一條 何人タリトモ他人ノ間ニ於テ訴訟ノ裁判關係トナリタル物件又ハ權利ノ全部又ハ一部ヲ獨立シテ請求スル者ハ其訴訟ノ裁判確定スルマテハ始審裁判ニ

○第三者ノ訴訟參加

七十五

○第三者ノ訴訟參加

於訴訟ノ裁判關係トナリタル裁判所ニ原被告雙方ニ對スル訴訟ヲ以テ其請求ヲ申立ルノ權アルモノトス

獨第六十二條 本裁判手續ハ原被告一方ノ申立ニ依リ本立入ニ付テノ裁決確定スルマテ之ヲ延期スルコトヲ得

第五十三條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助(從參加)スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

〔解釋〕 本條ハ補助參加ノ事ヲ示定セリ

他人ノ間ニ相爭フ訴訟ニ於テ原被告一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係アル者ハ其一方ヲ補助スル爲メ之ニ參加スルコトヲ得ヘシ

補助參加ハ主參加ノ如ク本案ノ原被告ノ權利ニ係リ其訴訟物件ニ對スル特有ノ請求ヲ爲スニ非ラスシテ只本案ノ裁判自己ノ權利上ニ利害ヲ及ホスコトヲ悞ルニ在ルナリ故ニ本案原告ノ一方ヲ助ケテ以テ勝訴者ヲラシメシメ爲メ參加スルモノトス

訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間トアリ故ニ訴訟終局マテ何時ニテモ參加スルコトヲ得ヘシ又特リ第一審裁判ノミナラス訴訟力第二審ニ繫屬スルコト雖

此之ニ參加スルコトヲ得ヘシ

〔的例〕 其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スルトハ補助參加人ノ自己ノ權利又ハ義務カ其勝敗ニ因テ得喪アルノ義ニシテ一ニノ例ヲ舉ケレハ

甲者乙者ヨリ或物件ヲ買得セリ後丙者來テ其物件ノ所有權ヲ主張シ一ノ訴訟トナレリ

此場合ニ於テ乙者ハ其訴訟ノ勝敗ニ依リ大ニ己ノ利害ニ關係ヲ有スルモノナリ何トナレハ若シ丙者勝訴ヲ得シカ甲者ニ對シ奪取擔保ノ責ニ任セサル可ラザレハナリ故ニ乙者ハ

其訴訟ニ參加シ該物件ハ元來自己ノ所有ナルヲ以テ之ヲ賣渡セシモノニシテ決シテ汝ノ所有ニ非ラサル旨ヲ主張スルコトヲ得ヘシ

連帶權利者又ハ連帶義務者ノ一人カ訴訟ヲ爲スル他ノ相權利者義務者ハ其勝敗ニ依テ大ニ利害ヲ有スルヲ以テ之ニ參加スルコトヲ得ヘシ

債主ハ負債主ト第三者トノ訴訟ニ付キ大ニ利害ノ關係ヲ有セルヲ以テ場合ニ依リ負債主ヲ補助スルコトヲ得ヘシ(民法財産篇第三百二十九條)

〔參照〕 獨第六十三條 何人ヲリトモ他人ノ間ニ裁判關係トナリタル訴訟ニ於テ原被告一方ノ勝訴トナルコトニ權利上ノ利益ヲ有スル者ハ其一方ヲ補助スルカ爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

副立入ハ訴訟中何時タリトモ其訴訟ノ裁決確定スルマテ上訴ノ呈出ヲ併セ亦之ヲナスコト得

○第三者ノ訴訟參加

第五十四條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限
 リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總
 テノ訴訟行爲ヲ有効ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ存スル期
 間内ニ故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有ス
 從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト抵
 觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準
 ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕 本條ハ補助參加人ノ地位ニ付キ示定セリ

從參加人ハ畢竟主タル原告若クハ被告ヲ補助スルニ過キサルヲ以テ其訴訟ノ現狀ヲ變更セシムル
 能ハサル勿論ナリト雖原被告一方ノ勝訴已ニ利害ヲ及ホスヲ以テ只管之ヲ補助シテ攻
 撃及ヒ防禦ヲ爲シ且原被告ノ爲ニ存スル期間内欠席故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上
 訴ヲ爲ス等總テノ訴訟行爲ヲ有効ニ行フコトヲ得ヘキモノトス
 然レハ從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相互ニ抵觸ス
 ルハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ニ依テ依テサレ何トナレハ從參加人ハ單
 ニ補助スル爲メ附從スルニ過キサルハナリ但民法上從參加人ノ陳述及ヒ行爲ヲ重要トセ
 ルコトノ規定アルハ此ニ從ハサル可ラス

〔參照〕 獨 第六十四條 副立入人ハ其附隨ノ時存スル現狀ニ於テ訴訟ヲ承諾スヘキモノ
 ト副立入人ハ其陳述及ヒ行爲本原被告ノ陳述及ヒ行爲ト抵觸セサル場合ニ限り攻撃方
 及辨護方ヲ申立及有効ニ總テ訴訟上ノ行爲ヲナスノ權ヲ有ス

第五十五條 從參加人ハ訴訟ヨリ脱退シタルトキト雖モ其補助シタル原
 告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張ス
 ルコトヲ得ス

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告
 ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラルトキ又
 ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラサリシ攻撃及ヒ防禦ノ
 方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セサリシトキニ限り其補助シタル原
 告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ補助參加人ト本案原被告トノ關係ヲ示定セリ

從參加人ハ一度其訴訟ニ參加シタルトキハ後ニ其參加ヲ止メタルトキト雖モ補助シタル
 原告若クハ被告トノ關係ニ付テ左ノ効果ヲ生スルモノトス
 其訴訟ニ對シ言渡サレタル確定裁判ヲ相當ナリトシテ之ヲ遵奉セサル可ラス
 本案原被告カ不十分ノ訴訟ヲ爲シタルトキ抗辯ヲ失フ

○第三卷ノ訴訟參加

故ニ已ノ補助シタル原告若クハ被告ニシテ敗訴ノ言渡ヲ受ケタルキハ原告若クハ被告ヨリ求メラル、補償ニ應セサル可ラス例ヘハ已ヨリ原告若クハ被告ニ一ノ物件ヲ賣渡シ後、其所有者來テ其物件ヲ請求シ遂ニ原告若クハ被告ノ敗訴ニ歸シタルトキハ之ニ對シ擔保ノ責ニ任セサル可ラス而シテ此等ノ効力何ノ時期ニ又如何ナル程度ニ於テ生スルカハ民法ノ規定スル所ナリ

然レニ從參加人ハ參加ノ時ノ訴訟ノ現狀又ハ本案原告ノ陳述行為ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ妨ケラレ(例ヘハ主ナル原告カ從參加人ノ爲シタル上訴ヲ拋棄スル類)又ハ自ラ知了セサリシ攻撃辯護ノ方法ヲ原告カ故意又ハ過失ニ因リ施用セサリシトキハ其原告若クハ被告ノ爲シタル訴訟ヲ不十分ナリト主張スルコトヲ得ヘシ若シ原告若クハ被告ノ爲シタル訴訟ヲ不十分ナリト主張シ得ヘキトキハ前ニ掲グル所ト反對ノ効果ヲ生スルモノニシテ其詳細ハ民法ニ於テ研究ス可キナリ

〔參照〕 獨 第六十五條 副立入人ハ本原被告トノ關係ニ於テ裁判官ニ呈出シタル訴訟ヲ不當ニ裁決シタリトスルノ申立ニ付キ尋問セシメサルモノトス副立入人ハ其附隨ノ時ニ於ケル訴訟ノ現狀又ハ本原被告ノ陳述及ヒ行為ニ依リ攻撃方又ハ辯護方ヲ申立ツルコトヲ妨害セラレタル場合又ハ其知了セサリシ攻撃方又ハ辯護方ヲ本原被告故意ヲ以テ又ハ大過失ニ依リ申立テタル場合ニ限り本原被告訴訟ヲ不充分ニナシタリトスルノ申立ニ付キ尋問セラレハモノトス

第五十六條 從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ

申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ

從參加ハ故障、異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 本條ハ從參加人トナルノ方法ヲ示定セリ

從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ申請セサル可ラス

本訴訟ノ繫屬スル裁判所トアリ故ニ第一審裁判所ナラサルモ當時上級裁判所へ上訴セル

トキハ該上級裁判所ニ申請ヲ爲ス可キナリ

申請ニハ原告ノ氏名及ヒ訴訟事件ヲ表示シ又一定ノ利害關係アルコト及ヒ附隨セント欲

スル旨ヲ開示セサル可ラス

申請ハ當事者即チ原被告ニ送達シテ參加セント欲スル旨ヲ知ラシムルヲ要ス

又從參加ニ欲席裁判ニ對スル故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲ス

ルコトヲ得

〔參照〕 獨 第六十七條 副立入人ノ附隨ハ書面ヲ送達シテ之ヲナスモノトス其書面ニハ

○第三卷ノ訴訟參加

左ノ件々ヲ記載スヘシ

第一 原告及訴訟

第二 副立人ノ有スル一定ノ利益

第三 附隨ノ旨

其他準備書面ニ關スル普通ノ規定ヲ適用スルモノトス

第五十七條 原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

利害關係ノ存否ニ付キ爭アルトキハ從參加人其關係ヲ疎明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

〔解説〕〔理由〕本條ハ補助參加ヲ允許シ又ハ却下スル事ニ付キ示定セリ

原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ裁判所ハ原告及ヒ從參加人ヲ審問

シ參加ノ適否ヲ取調タル後之カ裁判ヲ爲ス然レモ訴訟外ノ手續ナルヲ以テ口頭辯論ヲ須ヒ直ニ會議室ニ於テ決定スルコトヲ得ヘシ

單ニ利害關係ノ存否ニ付キ爭アルトキハ從參加人ハ其關係ヲ證明ス而已ヲ以テ參加ヲ許サル可シ何トナレハ利害ノ關係ノ存否キハ爭ヘルヲ以テ其關係サレ分明ナレハ最早參加ニ付キ異議ヲキモノト見做スレハナリ而シテ參加許否ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ

參加ヲ許サレバ裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ訴訟ニ立會ハシメ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ之ヲ送達セサル可ラス何トナレハ若シ之ヲ立會ハシメサルキハ參加許否ノ裁判確定スルマテ本訴訟ヲ中止セサル可ラサレハナリ

〔參照〕 第六十八條 副立人ノ却下ヲ求ル申立ニ付テハ豫メ原告及副立人ノ口頭上審問ヲナシタル後之ヲ裁決スルモノトス副立人ハ其利益ヲ證明スルトキ其立入ヲ許サルヘシ

中間判決ニ對シテハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得

立入人ハ立入ヲ許サレサルノ言渡確定セサル間本裁判手續ニ立會ハシメラル、モノトス

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ被告ヲ脱退セシム可

○第三卷ノ訴訟法

八十三

〔解説〕〔理由〕本條ハ補助参加人カ訴訟ヲ擔任スル場合ヲ示定セリ

從参加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得ルトキハ其附隨セル原告若クハ被告ニ代リ其訴訟ヲ擔任スルコトヲ得ヘシ此時ハ初ヨリ参加人ト對手人ト訴訟セルモノト見做サレ附隨サレタル原告若クハ被告ハ全ク其訴訟ノ關係ヲ脱スルモノトス然レモ若シ参加人敗訴トナリ而シテ訴訟物件附隨サレタル原被告ニ存在スルトキハ勝訴者タル原被告ヨリ其執行請求ヲ受クルチ免レヌ又附隨サレタル原被告ハ場合ニ依リ参加人ニ訴訟ヲ讓ルコトアリ個ハ民法ニ於テ研究スヘキコトナリ

當事者雙方ノ承諾ヲ得テトアリ故ニ特リ附隨サレタル原被告ノ承諾ヲ得ル而已ナラス相手人ノ承諾ヲモ得サル可ラス何トナレハ参加人ハ無資力ニシテ眞シ對手人カ勝訴トナルモ完全ノ賠償ヲ受クル能ハサルコトアレハナリ

從参加人カ雙方ノ承諾ヲ得テ訴訟ヲ擔任セルトキハ裁判所ハ原告若クハ被告ノ申立アル其訴訟ヨリ原告若クハ被告ヲ脱退セシム可キ判決ヲ爲サシム可ラス

第五十九條 原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受クヘキコトヲ恐ルル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ

得

訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

〔解説〕本條ハ各原被告若シ其訴訟ノ敗訴者タル場合ニ於テ先權者ニ向テ反求ヲ爲サント思料シ又ハ不完全ナル訴訟ヲ爲シタリトテ請求ヲ受クルヲ恐ル、時ハ訴訟告知ヲ爲シ得ヘキコトヲ示定セリ

抑本條訴訟告知ト從参加トハ酷ク類似スルモノニシテ即裁判ノ勝敗ハ原被告ト第三者トノ間ニ存スル權利上關係ニ影響ヲ及ホシ得ヘキ場合ニ於テ爲スモノトス而シテ其相異ナル所ハ即チ從参加ハ本人ヲ補助シテ勝訴者ヲラシメシメカ爲メ任意ニ其訴訟ニ参加シ之ニ反シ訴訟告知ハ原被告一方ノ本人ノ意ニ出テ第三者ヲ要シテ其訴訟ニ参加セシメ其援助ニ因テ以テ勝訴者タルカ若クハ敗訴シタル場合ニ於テ自己ト第三者トノ間ニ於テ他日彼ノ訴訟ハ不十分ニ爲シタリ或ハ不當ノ裁判ナリトノ苦情ヲ免レシコトヲ豫防スルニ在ルナリ

而シテ原被告ハ如何ナル場合ニ於テ訴訟告知ヲ爲スヘキ責任アルカ又之ヲ爲サ、リシ時ハ如何ナル結果ヲ生スルカニ付テハ民法ノ規定スル所ニシテ只本法ニ於テハ訴訟告知ヲ訴訟上ニ允スヘキコト及ヒ其程式効用ニ付テノミ定ムルモノナリ

○第三卷ノ訴訟法

○第三者ノ訴訟參加

訴訟ヲ告知スルニハ必ス一ノ訴訟現在セサル可ラス蓋シ起訴スルト共ニ訴訟告知ヲ爲シ得ヘキモ將ニ起ラントスル訴訟ニハ未ダ之ヲ爲スコトヲ得サルナリ又訴訟ノ結局ト共ニ訴訟告知ヲ爲スヘキ時期消滅ス而シテ原告被告本法第五百四十九條ノ場合ニ方リ第三者ニ勸告シテ強制執行手續中ニ參加シ權利ヲ主張セシムルコトハ固ヨリ爲シ得ヘシト雖モ到底訴訟告知ノ効用ヲ有セサルナリ
告知スルコトヲ得トアリ故ニ之ヲ告知スルト否トハ原告被告ノ隨意ナリ然レハ敗訴シタル場合ニ於テ之ヲ告知シタルト否トニ依リ大ニ利害ニ關係アル可シ即チ先權者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求權ヲ失ヒ又第三者ヨリ請求ヲ受クルヲ免レサルコトアル可シ本法第六十二條第六十條ニハ必ス告知ヲ爲スヘキ場合ヲ示定セリ之レハ已チ得サルノ告知ト名シヘキモノナリ

第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得可キ場合并ニ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キ場合ハ須ラク民法ニ於テ研究セサル可ラス

本條第二項ハ訴訟ノ告知ヲ受ケタル者更ニ訴訟ノ告知ヲ爲シ得ヘキコトヲ示定セリ即チ被告告知人ハ又已ノ先權者ニ對シテ訴訟ノ起リシコト告知シ後日其先權者ニ對シテ擔保又ハ賠償ヲ請求スルノ道ヲ開キ且先權者ヨリ請求ヲ受クルノ豫防ヲ爲シ得ヘキナリ

〔參照〕 獨 第六十九條 訴訟ノ結果自己ニ不利ナル場合ノ爲メ他人ニ對シ保證又ハ損害賠償ノ請求ヲナスヲ得ヘシト信シ又ハ他人ノ請求ヲ受ルノ恐ゾアル原告被告ノ一方ハ訴訟

ノ裁決確定スルマテ他人ニ對シ裁判上訴訟ヲ通知スルコトヲ得
他人ハ更ニ訴訟通知ヲナスノ權アルモノトス

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ

此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニ其謄本ヲ送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ラス之ヲ續行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

〔解義〕 〔理由〕 本兩條ハ訴訟告知ノ手續ヲ示定セリ

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ヲ告知ス可キ理由及ヒ訴訟ノ現況ヲ記載シタル書面ヲ裁判所ニ提出シテ之ヲ爲シ而シテ該書面ハ第三者即チ被告告知人ニ送達スルヲ要ス

書面ニ訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ現況ヲ記載スル所以ノモノハ第三者チテ訴訟ニ參加スル必要ヲ知ラシメ且己ノ意見ヲ陳述スルヲ容易ナラシムルモノナリ

第三者ハ告知ヲ受ケルモ之ニ參加スルヲ否シテ自己ノ隨意ナリ然レモ若シ告知ヲ受ケルノ理由アルトキハ告知人トハ關係ニ付キ裁判ノ効果ヲ生スルモノトス

又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告又相手方ニ其謄本ヲ送達シタル書面ノ謄本ヲ送付セ

○第三卷ノ訴訟參加

○第三者ノ訴訟参加

サル可ラ夫對手人ハ第三者ニ告知スルノ理由ナク随テ参加セシム可ラスト思考スルトキハ返テ抗辨スルコトヲ得ヘシ
第六十一条 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ラス之ヲ續行スルモノトス何トナレハ告知ノ爲メ訴訟ヲ中止スルトキハ對手人ヲシテ謂ハレナク延滞ノ不利ヲ被ラシムレハナリ然レモ第三者カ参加ヲ拒ムカ若クハ定時期内ニ返答ヲ爲サルコトノ定マルマテハ裁判ヲ下ス可ラサルモノトス

第三者カ参加スルコトヲ陳述スルトキハ即チ從参加人トナルヲ以テ其手續方法ニ至テモ悉ク從参加ノ規則ヲ適用ス可キナリ

〔参照〕 獨 第七十條 訴訟通知ハ書面ヲ送達シテ之ヲナスモノトス其書面ニハ訴訟通知

ノ理由及訴訟ノ現状ヲ記載スヘシ
書面ノ謄本ハ之ヲ對手ニ交付スヘキモノトス

獨 第七十一条 他人訴訟通知者ニ附随スルトキ其原被告トノ關係ハ副立入ノ原則ニ依テ定マルモノトス

他人附随ヲ拒絕シ又ハ返答セサルトキ訴訟ハ他人ニ關セス之ヲ繼續スルモノトス

總チ本條ノ場合ニ於テハ他人ニ對シ第六十五條ノ規定ヲ適用スルモノトス但訴訟通知ニ依リ附隨ノ時ニ代ルモノハ附随スルコトヲ得シ時ナリトス

第六十二条 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占

有者トシテ被告ト爲リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ争フトキ又ハ陳述ヲ爲ササルトキハ被告ハ原告ノ申立ニ應ズルコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受クルコトヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨリ脱退セシム可シ

其物ニ付テノ訴訟ハ被告ニ對シテモ效力ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

〔解釋〕 (理由) (的例) 本條ハ本人指示加參ノ事ヲ示定セリ

他人ノ名義ヲ以テ物件ヲ保有(占有)スル者其物件ノ取戻シ又ハ底觀等ニ付キ請求ヲ受ケタルトキハ物件所有者ニ對シ訴訟ヲ告知スルノ權アリ例ヘハ他人ノ物件ヲ借用シ若クハ受託スル者物件保有ノ點ヲ以テ他人ノ訴訟ニ違フタル時保有者ハ其物件ニ付キ保護スル

○第三者ノ訴訟参加

ノ義務アラサルカ若クハ之ヲ保護スルヲ欲セサル時ハ物件所有者ニ對シ訴訟ノ幫助ヲ望ムノミナラズ尙ホ訴訟上ノ責任及ヒ辨護ノ義務ヲ一切本人ニ全委スルヲ得ヘシ而シテ之ヲ爲スノ方法ハ本案ノ辨論前ニ於テセサル可ラス何トナレハ一ノ妨訴抗辨ニ外ナラサレハナリ又第三卷即チ本人ノ誰ナルヲ指名シ其呼出ヲ請求スルハ本人カ陳述ヲ爲スカ若クハ陳述ヲ爲スナメ與ヘタル期日ノ經過スルマテ本案ノ辨論ヲ拒ムヲ得ヘシ

本人カ被告ノ主張ヲ争フトキ即チ自己ノ所有物ニ非ラス隨テ本訴ニ關係ナキ旨ヲ陳述スルカ又被告ノ告知ニ對シ有無ノ返答ヲ爲サルトキハ被告ハ原告ノ求ニ應シ物件ヲ返還スルモ又ハ展示セシムルモ己ノ自由ナリトス後日ニ至リ決シテ本人ニ對シ責任ヲ負フコト無カル可シ

本人カ被告ノ主張ヲ正當ト認タルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ訴訟ヲ引受クルコトヲ得ヘシ而シテ此場合ニ於テ原告ノ承諾ヲ要セサル所以ノモノハ其物件ニ對シテ爲シタル判決ハ被告ニ對シ有効ニシテ且執行力ヲ生スルカ故ニ(本條末項)毫モ原告ノ利害ナケレハナリ又本人カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ被告ハ裁判所ヘ申立テ其訴訟ヲ脱退スルコトヲ得ヘシ既ニ訴訟ヲ脱退スルトキハ初ヨリ訴訟ニ關セサルト同一ノ効果ヲ生スルモノトス

其物ニ付テノ裁判ニシテ被告ニ對シ執行力ヲ生スル場合ハ之ヲ例ヘハ本人カ訴訟ニ敗訴シタル時原告ハ其物ヲ保有スル借主受託者ニ對シテ之カ執行ヲ爲シ得ヘキ時ノ如シ

【參照】 獨 第七十三條 何人タリトモ物件ノ現有者トシテ出訴セラレタル者他人ノ名義

ナ以テ其物件ヲ現有スルコトヲ主張スル場合ニ於テ本事件ノ審問前他人ニ其訴訟ヲ通知シ陳述ノ爲メ之ヲ原告ニ指名シテ喚出ストキハ其陳述ヲナスマテ又ハ其指名セラレタル者ノ陳述スヘキ裁判期日ノ終ルマテ本事件ノ審問ヲ拒ムコトヲ得

其指名セラレタル者被告ノ主張ヲ肯シセス又ハ返答セサルトキ被告ハ訴訟ノ申立ニ應スルノ權アルモノトス

其指名セラレタル者被告ノ主張ヲ正當ナリト承認スルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受ルノ權アルモノトス原告ノ承諾ハ其申立テタル請求被告ニ於テ他人ノ名義ヲ以テ現有スルコトニ關係ナキモノニ限り必要ナリトス

其指名セラレタル者訴訟ヲ引受ケタルトキ被告ハ其申立ニ依リ訴訟ヲ免カレシメタルヘキモノトス事件ニ關スル裁決ハ被告ニ對シテモ亦効力ヲ有シ且執行セラルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス

辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

○訴訟代理人及ヒ輔佐人

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

〔字解〕 辯護士トハ現今ノ代理人ヲ云フナリ

〔解義〕 本條ハ訴訟代理人ノ事ヲ示定セリ

原告若クハ被告トナリ訴訟ヲ爲ストキハ自身ニ出廷スルカ若シ自身出廷セサルトキハ辯護士ヲシテ訴訟ヲ代理セシメサル可ラス而シテ又原告本人自ラ出廷スルモ若シ相當ノ陳述ヲ爲ス能ハサルトキハ裁判所ハ辯護士ヲシテ演述セシム可キヲ命シ得ヘシ(本法第百二十七條)

辯護士ノ在ラサル場合即チ管轄裁判所々屬ノ辯護士ナキトキハ訴訟能力者有スル(本法第四十三條乃至第四十七條)親族若クハ雇人ヲ以テ代理人ト爲スコトヲ得ヘシ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力アル者ヲシテ代理セシムルコトヲ得ヘシ然レハ訴訟代理ヲ常業トセル者所謂潛リ代理人ナルトキハ裁判所ハ之ヲ退斥セシムルコトヲ得ヘシ(本法第百二十七條)

區裁判所ノ訴訟ナルトキハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ代理セシムルコトヲ得ヘシ本條區裁判所ノ訴訟ニハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ代理セシムルコトノ規定ナシト雖モ地方裁判所以上ノ訴訟スラ之ヲ許スコトアルヲ以テ考フレハ區裁判所ノ訴訟ニテハ況ンヤノ原則ニ依リ之ヲ許可スルノ律意ヲ推知スヘキナリ

〔理由〕 地方裁判所以上ノ訴訟ニ本人之ヲ爲スノ外辯護士ヲシテ代理セシム可シト定メタル所以ハ訴訟ハ事實及ヒ法律ノ關係ヲ明示シ訴訟ノ全局ヲ裁判所ニ陳述スルノ能力ヲ具

有セサル可ラサルト旁ラ潛リ代理人ノ弊害ヲ防遏スルニ在リ
區裁判所ノ訴訟ニ辯護士ヲ必要トセサル所以ハ區裁判所ノ訴訟ハ概ネ急速ヲ要シ薄費ヲ主トスル所ノ輕微事件ナレハナリ

〔參照〕 獨 第七十四條 地方裁判所及其上級ノ諸裁判所ニ於テハ原被告訴訟裁判所ノ附屬代理人ヲ以テ訴訟代人トナシ代理セシムヘキモノトス(代官訴訟)

此規定ハ受命裁判官又ハ受託裁判官ノ裁判手續並ニ裁判書記ニ付テナスコトヲ得ル訴訟上行爲ニハ之ヲ適用セサルモノトス

訴訟裁判所附屬ノ代理人ハ自己ヲ代理スルコトヲ得

獨 第七十五條 代理人ヲ以テ代理セシムルコトヲ要セサル場合ニ限り原被告ハ訴訟ヲ自己ニナシ又ハ各訴訟能力者ヲ以テ訴訟代人トシテナスコトヲ得

第六十四條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコトヲ得

○訴訟代理人及補佐人

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

〔解義〕 本條ハ委任ノ程式ニ付キ示定セリ

訴訟委任ハ書面ニ依テ之ヲ證シ且書面ヲ裁判所ニ提出シテ訴訟記録ニ編綴セシメサル可ラス

委任書面ニ公正證書ト私署證書ノ別アリ公正證書ハ公證人之ヲ作ルヲ以テ對手人ニ於テ反證ヲ舉示セサル上ハ尤モ大ナル信憑力アリト雖私署證書ニ至テハ公證人ノ介入ナキヲ以テ對手人ニ於テ之ヲ承認セサルキハ何等ノ信憑力ナキモノトス是ヲ以テ私署證書ハ對手人ノ求アルトキハ公證人若クハ相當官吏ノ認證ヲ受ケ之ヲ提出セサル可ラス

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ訴訟本人ハ口頭ヲ以テ誰某ニ委任ス可キ旨ヲ述ヘ調書ノ錄取ヲ求ムルコトヲ得可シ此時ハ認證ヲ經タル書面委任ト同一ノ効力アルモノトス

〔參照〕 獨 第七十六條 訴訟代人ハ書面上委任ヲ以テ代理ヲ證明シ其書面ヲ訴訟書類ニ供フヘキモノトス

私製證書ハ對手ノ求メヨ依リ裁判所又ハ公證人ノ公證ヲ受クヘキモノトス其公證ヲナスノ際證人ヲ立會ハシメ及筆記ヲ作ルコトヲ要セス

第六十五條 訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強

制執行ニ因リ生ズル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲ス權ヲ授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非ラサレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セス

第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ効力ナシ

然レモ辯護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ委任ノ權限及ヒ制限ニ付キ示定セリ

第六十五條 訴訟委任ハ當然左ノ權限ヲ包含スルモノトナス

反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生ズル訴訟行爲
此他訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ヲ領收スル權

以上ハ訴訟進行中概テ發生ス可キ事項及ヒ訴訟結果上自ラ委任セラル、モノト推定ス可キモノニシテ本人ノ爲メニ不利ナラサル場合ハ斟酌シ以テ適宜ニ規定セルモノナリ

○訴訟代理人及ヒ輔佐人

○訴訟代理人及ヒ輔佐人

訴訟ニ關スル總カノ行爲トアリ故ニ訴訟進行中自ラ發生ス可キ事項ニシテ本人カ當然委任セシモノト推定シ得ヘキモノハ悉ク包含スルモノト解釋セサル可ラス
相手方ヨリ辨償スル費用ハ領收ヲ爲ス權トアリ故ニ訴訟費用以外ニ涉リ辨償ヲ受領スルノ權ナシト解釋セサル可ラス何トナレハ其他ノ辨償ヲ受クルハ爭訟外ノ行爲ナレハナリ
本條第二項ハ訴訟代理人カ特別委任ヲ受クルニ非ラサレハ之ヲ行フ能ハストシテ左ノ場合ヲ示定セリ

控訴若クハ上告ヲ爲スコト再審ヲ求ムルコト代人ヲ任スルコト和解ヲ爲シ訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張スル請求ノ認諾ヲ爲ス
以上ハ尤モ重要ノ事項ナルト又本人ニ不利益ナランヲ慮リ特ニ委任ヲ要スヘシト定メタルモノナリ

又委任中ノ事項ト看做スヘカラサルハ純然タル訴訟上ノ行爲ニ屬セサルモノ例ヘハ前ニ掲クル訴訟費用以外ノ辨償ヲ受領スルコト訴訟物件若クハ本人ヨリ預リタル證書ヲ對手人ニ引渡ス等ノ行爲是レナリ

又訴訟上能力ヲ有セサル者ノ法律上代人ハ自ラ代テ訴訟ヲ爲シ得ル以上ハ一切ノ制限ヲ被ラサルモノトス

本條ニ掲クル故障、假差押、假處分、強制執行、控訴、上告、再審ノコトハ後條ニ規定セリ
第六十六條 前條第一項ニ掲クル法律上認定セル委任ノ權限ハ委任者ト受任者ノ間何等

ノ制限ヲ加フルモ相手方ニ對シカキモノトス然レニ委任者ト受任者ノ間ニ於テハ固ヨリ効力アルヲ以テ若シ受任者ニ於テ制限ヲ超過セルモハ其責ニ任セサル可ラス
辨護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ訴訟行爲ノ各箇ニ付キ委任スルコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨 第七十七條 訴訟委任ハ反訴及裁判手續ノ再施並ニ權制執行ヨリ生スル行爲ヲ合セ總テ訴訟ニ關スル訴訟上行爲ヲナスノ權代人並ニ上級裁判所ニ出ル訴訟代人ヲ委任スルノ權、和解ヲナシ又ハ訴訟事件ノ拋棄ヲナシ又ハ對手ノ申立タル請求ヲ承諾シテ訴訟ヲ解除スルノ權對手ノ辨償スヘキ費用ヲ受領スルノ權アルモノトス

獨 第七十八條 本訴訟ニ付テノ委任ハ本立入又ハ押置又ハ臨時處分ニ關スル裁判手續ニ付テノ委任ヲ包含スルモノトス

獨 第七十九條 委任ノ法律上範圍ノ制限ハ和解ヲナシ又ハ訴訟事件ヲ拋棄シ又ハ對手ノ申立タル請求ヲ承諾シテ訴訟ヲ解除スルコトニ關スル場合ニ限り對手ニ對シテ法律上効力ヲ有スルモノトス

代言人ヲ以テ代理セシムルコトヲ要セサル場合ニ限り委任ハ各箇ノ訴訟上行爲ニ付キ之ヲ與フルコトヲ得

第六十七條 訴訟代理人數人アルトキハ共同若クハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其效力ナシ

〔解義〕 〔的例〕 本條ハ代理人數名アル場合ヲ示定セリ

○訴訟代理人及ヒ輔佐人

○訴訟代理人及ヒ輔佐人

本條數名ノ代理人原被告ヲ共同ニ又ハ各別ニ代理スルノ權アリト定メタルハ訴訟ヲシテ確定迅速ニ結了シ易ラシムルノ趣義ナリ

訴訟代理人數人アルトキハ共同ニ又行爲ノ各箇ニ付キ代理スルコトヲ得ヘシ若シ委任狀ニ全般及ヒ各箇ノ行爲ニ付キ委任スル如キ撞着アルトキハ對手人ニ對シ全ク法律上無効トナス

數名ノ代人別異ノ陳述ヲ爲シ例ヘハ一人ハ對手人ノ主張ヲ承認シ他ノ一人ハ之ヲ辨駁シ又一人ハ審廷ニ於テ和解ヲ爲シ他ノ一人ハ之ヲ抗爭スル等ノ事アルトキハ本法第二百十七條ニ從ヒ之ヲ處分シ又一人和解ヲ爲シ他ノ一人之ヲ抗爭スル場合ニ於テハ元來各自ニ完全ナル代理權アルヲ以テ一人ノ既ニ執行シタル行爲ニ對シテハ他ノ抗爭ハ成立タサルモノトナス

〔參照〕 獨 第八十條 數名ノ訴訟代人ハ共同シテ又ハ各箇ニ原被告ヲ代理スルノ權アルモノトス之ニ違フ委任ノ定メハ對手ニ對シ法律上効力ナラセズ

第六十八條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル

原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限り其効力ヲ失フ

〔解義〕 本條ハ代理人ノ行爲ニ付テハ効力ヲ示定セリ

訴訟代理人カ本法第六十五條第一項ニ從ヒ委任ノ範圍内ニ於テノ行爲不行爲ハ本人ノ行爲不行爲ト同一ノ効力アルモノトス故ニ代理人カ範圍内ニ於テノ行爲不行爲ヨリ生スル責任ハ悉ク本人ニ於テ負擔セサル可ラス然レモ委任權外ニ涉リ例ヘハ特別ノ委任ナクシテ自認又ハ拋棄ヲ爲シタルトハ相手方ニ對スルモ其効力ナキモノトス

又代理人カ審廷ニ於テノ事實上ノ陳述ハ本人ノ陳述ト同一ナル効力ヲ生スルハ一般ノ原則ナレモ若シ本人カ代理人ト共ニ出廷シ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトハ其効力ヲ失フモノトス

〔參照〕 獨 第八十一條 訴訟代人ノナシタル訴訟上行爲ニ付原被告ハ其自己ニナシタル時ト同一ノ義務ヲ有スルモノトス此規定ハ自認及其他ノ事實上陳述ニ之ヲ適用ス但共ニ出廷シタル原被告直ニ之ヲ取消シ又ハ更正スルトキハ此限ニアラス

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ

此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手

○訴訟代理人及ヒ輔佐人

方ニ之ヲ送達ス可シ
代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲サ
サル間ハ其委任者ノ爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 本條ハ代理委任ノ終期ニ付キ示定セリ

代理委任ノ消滅スル場合ハ民法財産取得篇第二百五十一條ニ規定セリ
委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任
ノ消滅ハ其消滅セルコト相手方ニ通知セザルトキハ其効力ナキモノトス何トナレハ通知
ヲ爲サ、レハ相手方ニ於テ之ヲ知ル能ハサレハナリ
何ヲ以テ本條ニ掲クル各場合ニ於テ代理委任ノ消滅スルヤハ須ラク民法ニ於テ講究セサ
ル可ラス

委任消滅ノ通知ハ原告若クハ被告ヨリ書面ヲ受訴裁判所ニ提出シ裁判所ヨリ相手方ニ送
達スルモノトス

代理人ハ謝絶ヲ爲シ委任消滅スルモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ヲ防衛スルマテ其
委任ノ行爲ヲ爲スコトヲ得ヘシ民法ニ依ルルハ代理人ハ本人若クハ相續人カ相當ノ處置ヲ
爲スマテ之ヲ處理スルノ義務アリトスレトモ本法ニ於テハ此等ノ義務ヲ負ハシメス然レ
トモ俄ニ代理ヲ謝絶シ爲メニ本人ヲシテ他ノ代理人ヲ委任スルカ若クハ其他ノ方法ニ依
リ權利ヲ防衛スルノ餘暇ナカラシムルハ蓋シ民法上ノ責任ヲ免レサル可シ

〔參照〕 獨 第八十二條 委任ハ委任者ノ死去ニ依リ及ヒ其訴訟能力又ハ其法律上代理ノ
變更ニ依リ効力ヲ失フコトナシ但訴訟代人訴訟延期ノ後相續人ニ代リ訴訟ヲナストキハ
其委任狀ヲ呈出スヘシ

獨 第八十三條 委任契約ノ解除ハ委任ノ消滅シタルコトヲ届出ルニ依リ代言訴訟ニ於
テハ他ノ代言人ニ委任シタルコトヲ届出ルニ依リ始メテ對手ニ對シ法律上効力ヲ有スル
モノトス

訴訟代人ハ自ら解約スルモ委任者別ニ其權利ヲ執行スルノ方法ヲ定メサル間之ニ代リ處
置スルモ妨ケナキモノトス

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做 ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク
代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保証ヲ立テシメ
又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スコトヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間
ノ滿了後ニ限り之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭
辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

○訴訟代理人及ヒ輔佐人

〔解説〕〔理由〕本條ハ委任調査ノ事ヲ示定セリ

代理人ニシテ委任ノ欠缺スルルハ原告若クハ被告ノ爲メ毫モ代理ノ効ナキモノトス即チ
審理中ナレハ相手方ヨリ異議ヲ申立ツルヲ得ヘシ又委任欠缺ノ儘裁判アリタルルハ通常
ノ上訴ハ勿論再審チモ爲スヲ得ヘシ(本法第四百六十八條)

裁判所ハ職權ヲ以テモ委任ノ欠缺ヲ調査スルヲ得ヘシ何トナレハ委任欠缺スルルハ審
理ハ全ク無効ニ歸スレハナリ又裁判所ハ委任ナク若クハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出
頭シタル者ニ事情ニ依リ保證ヲ立シメ若クハ立シメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ
得ヘシ

委任ナク又ハ適式ノ委任ナキ代理人ニ假ニ訴訟行爲ヲ許ス所以ノモノハ本人不在若クハ
他ノ事故ニ依リ自ラ其權利ヲ保護シ能ハサルヲ以テ第三者本人ノ依頼ヲ俟タス切迫シタ
ル損害ヲ救護スル等ノ場合ヲ豫慮シタルモノナリ

既ニ假ニ訴訟ヲ許シタル上ハ其者ノ爲シタル行爲ハ有効ナリトス然レハ或定期間ニ欠缺
若クハ不適法ヲ補正セサルルハ以前ニ溯リ最初ヨリ無効トナス且一方ノ請求ニ依リ欠缺
判決ヲ與エサル可ラス

以上ノ如クナルヲ以テ之ヲ補正スルト否トニ拘ラス裁判所ハ補正ノ爲メ與タル定期間内
ハ裁判ヲ與フ可ラス又期限ヲ過クルモ口頭辯論ノ終結マテハ之ヲ追完スルヲ得ヘシ
〔參照〕獨 第八十四條 委任ノ缺乏ハ訴訟中何時タリトモ對手人ヨリ之ヲ責責スルコト

ヲ得

裁判所ハ代理人ヲ以テ代理セシムルヲ要セサル場合ニ限り職權ヲ以テ委任ノ缺乏ナキヤ
ニ注意スヘキモノトス

獨 第八十五條 原告若クハ被告一方ニ代リ委任ナクシテ事務擔當者トナリ又ハ委任狀ヲ呈出ス
ルコトナクシテ訴訟代人トナリテ處置スル者ハ費用及損害ニ付テノ保證ヲナシ又ハ之ヲ
ナスコトナクシテ訴訟ヲナスコトヲ一時許サル、コトヲ得終局判決ハ承諾書ヲ呈出スル
爲メ定ムヘキ期限ノ經過シタル後始メテ之ヲ言渡スコトヲ許スモノトス
原告若クハ單ニ口頭上ノ委任ヲ與ヘタルルハ又ハ訴訟執行ヲ明諾シ又ハ黙諾シタルルキト雖モ
訴訟執行ヲ自己ニ對シテ効力アラシムヘキモノトス

第七十一條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁
判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ
出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦ス
ル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルトキ
ニ限り原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

〔解説〕本條ハ訴訟附添人ノ事ヲ示定セリ

○訴訟代理人及ヒ輔佐人

○訴訟費用

本條ノ瓶義ハ訴訟人ヲシテ其權利伸暢ノ爲メ努メテ自由ヲ得セシメントスルニ在リ
原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲スルハ一人ニテハ十分權利ヲ伸暢シ又ハ辨護ヲ爲スニ覺束
ナシト思考スルルハ辨護士又ハ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人トシテ(即チ現今ノ附添人)共ニ
出頭スルコトヲ得ヘシ

輔佐人ノ職務ハ通常代人ト同シク權利ヲ伸暢シ又ハ主張ニ對シ辨護スルニ在リ然レド輔
佐人ハ本人ト共ニ出廷スルモノニシテ特立シテ訴訟ヲ擔任スルニアラサルヲ以テ他ノ代
人ノ如ク委任ヲ必要トセサルナリ

輔佐人ノ供述ハ本人ニ於テ直ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルルハ即チ本人之ヲ認許スルモ
ノト看做スヘキヲ以テ本人自ラ供述シタルト同一ノ効力アリトス

〔參照〕 獨 第八十六條 代人ヲ以テ代理セシムルヲ要セサル場合ニ限り原被告ハ各訴訟
能力者ヲ以テ附添人トナシ出廷スルコトヲ得
附添人ノ供述ハ之ヲ原被告ノ申立テタルモノト看做ス但原被告直ニ其供述ヲ取消シ又ハ
更正スルトキハ此限ニアラス

第五節 訴訟費用

第七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因
リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ

相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告
若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

〔解義〕 本條ハ訴訟費用ノ負擔方ヲ示定セリ

訴訟費用トハ裁判所費用即チ裁判所ニ納ムヘキ費用(手数料又ハ裁判所ノ立替金ノ類)及
ヒ裁判所外ノ費用(代言人執達吏ノ手数料及ヒ立替金其他原被告ノ旅費又ハ書狀認料又
ハ書狀送達料ノ類)ヲ云フ

訴訟費用ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ於テ負擔セサル可ラス而シテ其費用ハ訴訟ヨリ生シ
タルモノニシテ且裁判所ノ意見ニ於テ權利伸暢又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ
限レリ

右ノ外費用ニ關シ特ニ後條ニ掲グルモノ數多アリ本法第七十七條第九十八條第二百
六十二條第二百九十四條第三百二十一條第三百三十二條第三百九十二條第四百九十二條
第五百五十四條第五百六十四條第五百七十八條ノ如キ之ナリ

抑敗訴者ハ自己ノ費用ヲ辨償スル而已ナラス更ニ對手人ニ生シタル失費ヲモ辨償ス可キ
ハ普通ノ原則ナリ然レド本法ハ例外トシテ三箇ノ場合ヲ示定セリ即チ第七十四條第七十
六條第七十八條第三項之ナリ

又訴訟中ニ訴ヲ即チ請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スルルハ即チ自己ノ非理ヲ

○訴訟費用

○訴訟費用

敗訴者ノ代言人ノ手数料及立替金ハ總テノ訴訟ニ於テ之ヲ辨償スヘキモノトス他所ノ代
言人ノ旅費ハ裁判所ノ見込ヲ以テ權利伸達又ハ權利辨護ノ爲メ必要ナリト認ムル場合ニ
限リ之ヲ辨償スヘシ數名ノ代言人ノ費用ハ代言人ノ一名ノ費用ヲ超過セサル場合又ハ代
言人ノ身上ニ關シ交代スヘキ場合ニ限リ之ヲ辨償スヘシ

第七十二條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其
費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當
事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スル
コトヲ得ス

然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ラス且別段ノ費用
ヲ生セザリシトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ
因リ要求額ヲ定ムルニ非ラサレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルコトヲ得
ザリシトキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ヲ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

〔解説〕 本條ハ原告被告兩造互ニ相勝敗スル場合ニ於テ其費用ヲ相消シ又ハ割合ニ應ジテ分
擔ス可キ事ヲ示定セルモノニシテ即チ前條ノ原則ヲ適用スルニ過キス
原告被告互ニ勝敗アル時ハ裁判所ハ其費用ヲ相消スルカ若クハ由直ノ程度ヲ計リ割合ヲ以
テ分擔ス可キコトノ言渡ヲ爲スモノトス
其費用ヲ相消ストハ各當事者其支出シタル費用ヲ互ニ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨償ヲ請求
セザルヲ云フ故ニ民法上ニ所謂義務相殺トハ相異ナルモノトス何トナレハ相殺ハ畢竟簡
便ナル辨償方法ニ過キスシテ決シテ各自々辨スルノ趣義ニ在ラサレハナリ
割合ヲ以テ之ヲ分擔スルニハ或ハ原告被告ノ一方ニ費用ノ幾部分ノ額ヲ定メテ之ヲ課シ其
餘分ハ他ノ一方ヲシテ負擔セシメ或ハ一定ノ割合ヲ定メテ之ヲ負擔セシメ得ヘシ此割合
ヲ定ムルニハ費用全般ノ積額ニ就テ之ヲ算當シ又ハ其部分ニ限リ之ヲ爲シ得ルナリ而シ
テ幾部分ノ額ヲ一定スルニハ原告被告兩造ニ生スル費用ノ全部ヲ合計シテ一額ト爲シ之ニ
依テ其課スヘキ多寡ヲ定メ又一定ノ割合ヲ爲スニハ對手人ノ負フタル費用ノ一定ノ割合
額ヲ一方ヲシテ辨償セシムルナリ此他ニ至テハ兩造ノ支出スル費用ヲ各自辨スルノミ
然レハ裁判所ハ原告被告一方ノ請求適當ナルモ其額僅少ニシテ特別ノ費用ヲ生セザリシト
キ又判事ノ意見鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ依ラサレハ容易ニ過分ノ要求額ヲ知ル
能ハサルトキハ裁判所ハ原告被告一方ニ其費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得ヘシ

〔的例〕 其要求格外ニ過分ナルニ非ラス且別段ノ費用ヲ生セザリシトキトハ例ニハ百圓ノ

○訴訟費用

○訴訟費用

訴訟起シ其中八十圓ハ正當ナル事雖下モ殘餘二十圓ハ請求ノ權利ナシト判決セラレ別段ノ手数料要セサルトキハ如キナ云フ何トナレハ二十圓カ過分ナリトテ之カ爲メ訴訟費用ノ増加スルコトナケレハナリ

判事ノ意見鑑定人ノ鑑定ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ云々トハ例ニハ損害賠償ヲ求ムル場合ニ於テ判事ノ意見鑑定人ノ鑑定ニ因ラサレハ其損害高チ定ムル能ハサル如キナ云フ

相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非ラサレハ云々トハ例ニハ商業上數多ノ取引アリテ交互計算ヲ遂クルニ非ラサレハ正確ナル計算ヲ得サルヲ以テ其概算額ニ因リ訴ヲ起セル如キナ云フ

〔參照〕 獨 第八十八條 原被告ノ各方一部勝訴トナリ一部敗訴トナリタルトキ費用ハ互ニ消除シ又ハ割合ヲ以テ分擔スヘキモノトス

裁判所ハ一方ノ過分ノ要求割合ニ僅少ニシテ別段ノ費用ヲ生セザリシトキ又ハ一方ノ要求額裁判官ノ見込ヲ以テスル確定又ハ鑑定人ノ鑑定又ハ相互ノ計算ニ依リ定マルトキハ他方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非ラサルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラス其負擔ニ歸ス

〔解義〕 本條ハ特ニ原告ニ於テ費用負擔ノ義務アル場合ヲ示定セリ

本條ハ前第七十二條ノ原則ノ例外ニ似タリト雖モ唯其外觀ニ於テ然ルノミ即チ本條ハ被告ノ所爲ニ因テ起訴セシメタルニ非ラヌ且直ニ承認スル場合ヲ示定セルモノナレハ原告告間現實ノ争訟ナシ又被告ニ本然ノ敗訴之レアラサルモノナリ

被告ノ所爲ニ因テ出訴セシムルニ至リタルヤ否ハ被告ノ答辨書又ハ審理期日ノ主張ニ依テ判斷セラル可キナリ

被告カ準備書面ノ交換ニ方テ原告ノ請求ニ抗争シ而シテ口頭審理ノ期日ニ至テ之ヲ承認スル如キハ其各場合ノ情狀ニ因テ直チニ請求ヲ承認シタルモノト看做サル可キナリ

本條ノ場合ニ於テハ原告自己ニ支出シタル費用ヲ自辨シ且被告ニ生シタル費用ヲモ(本條第七十二條ニ基キ)辨償セサル可ラサルナリ

〔分析〕 本條ハ二箇ノ條件ヲ要ス

第一 被告ノ作爲即チ所爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメサルヲ要ス例ヘハ其義務ノ履行ヲ拒マヌ又ハ反對權利ヲ主張セサルヲ要ス而シテ辨償スヘキ資力ナキ爲メ辨償ヲ怠慢セル如キハ本條ノ優待ヲ受ケルヲ得ス

第二 被告審理期日出廷スルカ又ハ代入ヲ出シテ直ニ其義務ヲ認諾スルヲ要ス

〔的例〕 本條ノ場合ハ原告カ被告ニ督促セシメテ直ニ權利上關係ノ存否ノ確定、證書ノ承認又ハ證書ノ正否ノ確定ニ付テ訴ヲ起ス等ノ時ニ生ス

○訴訟費用

○訴訟費用

〔參照〕 獨 第八十九條 被告其舉動ニ依リ訴訟ヲ提起スルニ至ラシメタルコトアリタル場
合ニ於テ被告其請求ヲ直ニ承認スルトキ訴訟費用ハ原告ノ責ニ歸スルモノトス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更
辯論ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲
滯ヲ生ゼシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ラス
此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)
ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ラス
其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

〔解義〕 本兩條ハ費用ノ特別負擔ヲ示定スルモノニレテ訴訟淹滞ヲ防遏スルカ爲メ有効ナ
リトス

第七十五條 原告ノ一方期日(即チ口頭審理ノ期日)若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失
ニ因リ期日ヲ更新セシメ辯論ヲ延期セシメ辯論續行ノ爲メニスル期日ヲ撰定セシメ若ク
ハ期間ヲ延長セシメ其他訴訟ヲ遲滯セシメタルハ本案ノ勝訴者タルニ拘ラス爲ニ生ゼ
シタル費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十六條 又原告ハ假令勝訴ヲ得ルト雖モ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張スル

キハ之カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可キ言渡ヲ受クルコトアル可シ

然レモ無益ナル攻撃又ハ防禦トアルハ前條ト同シク自ラ過失ノ意義ヲ包含セル者ナリ抑
原告ハ其權利ヲ伸暢スルニ不羈自由ナルヲ以テ若シ本條ヲ課用スルハ大ニ權利ヲ損
傷スルニ依リ裁判官ハ尤モ審議決定セサル可ラス

〔參照〕 獨 第九十條 裁判期日又ハ期限ヲ怠リタル原告又ハ自己ノ過失ニ依リ裁判期

日ヲ變換セシメ又ハ審問ヲ延期セシメ又ハ審問繼續ノ爲メニスル裁判期日ヲ定メシメ又
ハ期限ヲ延長セシムルニ至ラシムル原告ハ之ニ依テ生シタル費用ヲ擔當スヘキモノト

獨 第九十一條 効驗ヲカリシ攻撃方又ハ辨護方ノ費用ハ本事件ニ於テ勝訴トナリタル
トキト雖之ヲ申立タル原告ニ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル
原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルトキ
ハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合
シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告前審ニ於テ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實又ハ攻撃

○訴訟費用

若少ハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原告若シハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルコトヲ得

〔解説〕 本條ハ上訴ニ關スル訴訟費用ニ付キ示定セリ

第七十七條 本條ハ本法第七十二條ニ定ムル普通原則ニ適合スルモノナリ無益ナル上訴又ハ取下タル上訴ハ即チ敗訴シタルト同一ニ見做ス可キモノナリ

第七十八條 上訴ニ因リ全部若シハ一部ノ効力ヲ生シ前裁判ノ更改セラレタルキハ從テ前裁判ノ消滅ニ歸ス可キヲ以テ更ニ前後ノ訴訟費用ニ付言渡ヲ爲サル可ラス而シテ其費用ノ負擔方ハ普通ノ原則ニ準據シ即チ本法第七十二條ニ依リ敗訴者之ヲ辨償シ又互ニ勝敗アルキハ第七十三條ニ依テ決セサル可ラス

然レハ原告若シハ被告カ前訴訟ニ於テ提出シ得ヘカリシ事實又ハ攻撃若シハ防禦ノ方法ヲ新ニ上級裁判所ニ提出シ爲ニ勝訴ト爲ルトキハ即チ原告若シハ被告ノ怠慢タルヲ免レサルヲ以テ仮令勝訴トナルモ上訴費用ノ全部又ハ一部ヲ負擔セシメラル、コトアル可キナリ

〔參照〕 獨 第九十二條 呈出シタル効驗ナキ上訴ノ費用ハ之ヲ呈出シタル原被告ノ責ニ歸スルモノトス

整訴裁判ノ費用ハ裁判所ノ見込ニ從ヒ始審裁判ニ於テ申立ルコトヲ得ヘシト認メタル新ナル事實ニ依リ勝訴トナルトキハ勝訴者ニ其全部又ハ一部ヲ負擔セシムルコトヲ得

訴訟事件ノ價額ニ拘ハラス地方裁判所特ニ權限ヲ有スル請求ニ付テノ訴訟ニ關スル上告裁判ノ費用ハ訴訟事件ノ價額三百「マルク」以下ニシテ獨逸國又ハ各邦ノ代人上告ヲナシタルトキハ勝訴ノ場合ト雖獨逸國又ハ各邦ノ國庫之ヲ擔當スヘキモノトス

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ此限ニ注ラス

〔解説〕 本條ハ和解ノ場合ニ於ケル費用ノ負擔方ヲ示定セリ

訴訟物ニ付テ和解シタルキハ訴訟及ヒ和解ノ費用ハ互ニ之ヲ消除スルモノトス然レハ契約ハ自由ナルノ原則ニ依リ雙方ハ如何ナル契約ニテモ爲シ得ヘキナリ

和解ハ互ニ權利ノ一部ヲ推讓スルモノニシテ互ニ曲直ナキモノト見做ス可キヲ以テ費用ニ至テモ互ニ相消除ス可キハ當然ナリトス

〔參照〕 獨 第九十三條 完結シタル和解ノ費用ハ原被告ニ於テ別段ノ契約ナキハ互ニ消除シタルモノト看做スヘキモノトス和解ニ依リ完結シタル訴訟ノ費用ニ付テモ亦同シ但此費用ニ付テリ言渡未タ確定セサルトキニ限ル

第八十條 法律ニ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限リ其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レハ

共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得
共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔セズ

〔解釋〕 本條ハ共同訴訟人ノ費用負擔方ヲ示定セリ

共同訴訟人ハ訴訟費用ニ付キ分頭ニ負擔スルヲ以テ普通トナシ法律ノ規定ニ從ヒ訴訟費用ニ付キ連帶義務ヲ生スルヲ以テ之カ例外トナス而シテ連帶義務アルハ對手人トノ關係及ヒ共同訴訟人相互間ノ關係ニ付キ如何ナル効果ヲ生スルヤハ民法ノ規定ニ依テ決セサル可ラス又共同訴訟人間其利害ノ關係著シク異ナルハ其關係ノ割合ニ從ヒ負擔セシムルコトヲ得ヘシ(例ヘハ所有者及ヒ利益者ニ係リ物上ノ訴訟ヲ起シタルト如シ)
又共同訴訟人ハ互ニ相獨立シテ攻撃防禦ヲ爲シ得ヘキヲ以テ若シ共同者ノ一人特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ用ヒ之カ爲ニ費用ヲ生シタルハ固ヨリ其者ノ負擔ニ歸セサル可ラ

〔參照〕 獨 第九十五條 敗訴者數人ナルトキ其數人ハ費用辨償ニ付キ平等ニ其責ヲ負フ

訴訟ヲ立入ニ著シキ差異アルトキハ裁判所ノ見込ニ依リ其立入ヲ標準トナスコトヲ得

訴訟仲間ノ一名特別ノ攻撃方又ハ辨護方ヲ申立テタルトキ其他ノ訴訟仲間ハ之カ爲メ生シタル費用ニ付キ其責ヲキモノトス
民法ノ規定ニ依ル費用ニ付キ連帶シテ責ニ任スルキ義務ハ本條ノ規定ノ爲メ變更ヲ受クルコトナシ

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ

第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ
從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルトキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

〔解釋〕 本條ハ從參加ノ費用ニ付キ示定セリ

原告若クハ被告カ從參加ニ對シ異議ヲ述フルハ一ノ中間判決ヲ爲ス可キモノトス此時ハ本法第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒ中間訴訟ヨリ生スル費用ニ付テモ併セテ判決セサル可ラス
裁判所ニ於テ從參加ヲ許シタルハ又ハ一方異議ヲ述ヘサルハ猶ホ前數條ノ規定ニ從ヒ本案判決ト共ニ從參加ニ付キ生シタル費用ノ負擔ヲ決定ス可キナリ

主參加ニ付テハ固ヨリ前條ニ從ヒ決定ス可シト雖トモ訴訟告知若クハ本人指示ニ付テ
ノ費用ハ告知者又ハ指示者ニ於テ負擔セサル可ラス然レニ被告知人被指示人ニシテ訴訟
ニ參加スルハ即從參加人トナルヲ以テ本條ノ規定ニ從フ可キモノトス

〔參照〕 獨 第九十六條 第八十七條ヨリ第九十三條ヲノ規定ハ副立入ニ依リ生シタル
費用ニモ亦之ヲ適用スルモノトス副立入人本原被告ノ訴訟仲間トナルトキハ(第六十六
條)第九十五條ノ規定ニ依ルモノトス

第八十二條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ
得ス然レニ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルトキニ
限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

費用ノ點ニ限リタルトキト雖ニ相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル
場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ費用ノ裁判ニ對スル上訴ノ事ニ付キ示定セリ
費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス然レニ本案ノ裁判ニ對シ上訴スルハ
最早費用ノ點ノミニ付キ審理ヲ許サ、ルノ理由ナキヲ以テ此場合ニ於テハ不服ヲ申立ツ
ルコトヲ得ヘシ
又相手方ヨリ上訴シタルハ費用ノ點ニ限リタル裁判ニテモ之ニ附帶シテ上訴スルコト

ヲ得ヘシ

上來ノ如クナルヲ以テ費用ノ裁判ニ付テハ還ニ上訴ヲ爲ス能ハサル場合之レアルヘシ例
ヘハ本法第七十四條第七十六條第七十八條第二項ニ於ケル如キ之ナリ

〔參照〕 獨 第九十四條 費用ニ付テノ裁決ニ對スル不服ハ本事件ニ於ケル裁決ニ對シ上
訴ヲ呈出セサルトキハ之ヲ許サ、ルモノトス

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏
ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ
又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシムル決定ヲ爲スコトヲ得但
其決定前關係人ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時
抗告ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 本條ハ一定ノ人ノ過失ニ因リ費用ヲ負擔スル場合ヲ示定セリ
裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ハ已ノ過失怠慢ニ因リ費用ヲ
生シシメタルトキハ之ヲ辨濟ノ責任ニ任セシメラル、コトアル可シ裁判所ハ當事者ノ申立
ニ因ルモ又職權ヲ以テモ之ヲ決定ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レトモ決定以前ニ於テ之カ關係
人(即チ辨濟ノ責任アル者及ヒ訴訟人)ニ口頭又ハ書面ヲ以テ陳辯ヲ爲サシメサル可ラ

費用ヲ生ゼシメタルトキトハ依頼本人ノ爲メ生ゼタル費用ノミナラス相手人ニ對シ生ゼシメタル費用ヲモ含蓄スルナリ右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ヘシ又其判決ヲ受ケタル者及ヒ申立ヲ却下セラレタル者（即チ原被告）ハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨 第九十七條 訴訟裁判所ハ裁判所書記、法律上代人、代言人及其他ノ訴訟代人並ニ裁判所使吏ニ對シ其大過失ニ依リ生ゼタル費用ヲ職權ヲ以テモ亦擔當セシムルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

其裁決ハ口頭上ノ審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得其裁決前關係者ハ尋問セラレヘキモノトス

其裁決ニ對シテハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得

第八十四條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ附與ス可キ計算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得 裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ検査ヲ命スルコトヲ得 裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳述ヲ爲スコキ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ分擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出スコキ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ顧ミス之ヲ爲スコシ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ケト爲ルコト無シ

〔解義〕（理由） 此三條ハ對手人ニ辨償ス可キ費用額ヲ裁判所ニ於テ確定スル事ヲ付キ示定セリ

○訴訟費用

第八十四條 費用額ノ確定ハ當事者ノ申請ニ因リ第一審ニ繫屬シタル裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

又費用額確定ニ付テノ申請ハ第七十二條ニ定ムル訴ヲ取下ケ請求ヲ拋棄シ又相手方ノ請求ヲ認諾スル場合及ヒ上訴取下ノ場合ヲ除キ其他ハ必ス執行シ得ヘキ裁判ニ在ラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

執行シ得ヘキ裁判トハ確定裁判、假執行附ノ判決、執行裁判、和解及ヒ執行ス可キ證書ヲ云フモノニシテ本法第四百九十七條第五百三條第五百十四條第五百十五條第五百五十九條第三第四第五第五百六十二條是ナリ

抑本案審理中費用ノ項目ヲ證明スルハ困難ニシテ爲ニ審理ヲ中止スルコトアリ又口頭審理ニ付テ冗贅ナル材料ヲ要セシムルコトアル可シ加之訴訟中ハ概シテ費用ヲ確定スル能ハス又初審裁判ノ變更スルコトアリテ徒勞ニ屬スルコトアル可キナリ是ヲ以テ本條ハ裁判言渡ノ確定シタル後初テ計算シ且確定スルモノト決定セリ

第一審ニ繫屬シタル裁判所トアリ故ニ上級裁判所ニテ生シタル費用ト雖ハ第一審裁判所ニ於テ確定ス可キハ明カナリ又本條ハ簡便ニシテ迅速ナル審理手續ヲ採用シ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ爲シ得ヘク申請ニハ計算書并ニ計算書ノ謄本及ヒ説明書類ヲ添付スルノモノヲ是レリトセリ

第八十五條 費用確定ノ裁判ニ付テハ口頭辨論ヲ用ユルト否トハ裁判官ノ斟酌ニ任セリ

蓋シ費用確定ノ裁判ハ本案ノ裁判ニ何等ノ効力ヲ及ボサ、ルヲ以テ成ルヘク簡易迅速ニシテ費用ノ輕減ヲ主トセサル可ラス故ニ寧ロ口頭審理ヲ用ヒサルヲ可トスヘシト雖ハ若シ繁雜必用アルキハ口頭審理ヲ閉ク固ヨリ不可ナルコトナシトス

費用確定ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキナリ而シテ其期限及ヒ期限ノ起算ハ後條ニ至リ知ルコトヲ得ヘシ

第八十六條 本條ハ割合分擔ヲ爲ス場合ニ於テ費用確定ノ裁判ヲ爲ス方法ヲ定ムルモノナリ

〔參照〕 獨 第九十八條 訴訟費用辨償ニ付テノ請求ハ權制執行ヲナスニ適切ナル名義ニ依ルニアラサレハ之ヲ申立ルコトヲ得ス

辨償スヘキ額ヲ確定スル爲メノ申立ハ之ヲ始審裁判所ニナスヘキモノトス其申立ハ裁判所書記ニ陳述シテ之ヲ筆記セシムルコトヲ得費用計算書及對手ニ交付スヘキ其計算書ノ謄本並ニ各箇金額ノ辨明ニ供スル證書ヲ添フヘシ

獨 第九十九條 其確定申立ニ付テノ裁決ハ豫メ口頭上ノ審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得

各箇ノ金額ヲ採用スルニハ之ヲ證明スルヲ以テ足レリトス

其確定ヲナス決議ニ對シテハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得

獨 第一百條 訴訟費用ハ全部又ハ一部ヲ割合ニ從ヒ分配シタルトキ原被告ハ對手ニ對シ

○訴訟費用

辨償額確定ノ申立ヲナス前ニ費用ノ計算書ヲ一週ノ期限内ニ裁判所ニ呈出スヘキコトヲ
督促スヘキモノトス此期限空シク經過シタル後ハ對手ノ費用ニ拘ラス裁決ヲナスモノト
ス對手ハ之レカ爲メ後日費用辨償ニ付テノ請求ヲナスノ權ヲ害セラル、コトナシ又對手
ハ後日ノ裁判手續ニ依リ生スル費用増額ニ付キ其責ヲ負擔スルモノトス

第六節 保 證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律
ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク
外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託
シテ之ヲ爲ス

〔字解〕〔解義〕〔理由〕 本條ハ訴訟ニ關スル保證(訴訟上ノ擔保)ヲ立テ得ヘキ一般ノ通
則ヲ示定セリ

訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合及ヒ裁判所ノ自由ナル意見ニ任ス場合ヲ
除ク外裁判所ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲サル可
ラス
有價證券トハ公債證書、鐵道株券、銀行株券ノ如キヲ云フ
現金又ハ有價證券トアリ故ニ抵當物又ハ保證人ヲ以テ保證スルヲ許サス若シ此類ノ方法

ナ以テ保證ヲ立テシムルハ保證義務ニ付テノ爭執ノ外更ニ保證方法ノ當否ニ付テ紛爭
ヲ起シ爲メニ訴訟ヲシテ淹滞ニ至ラシムルヲ往々ニシテ之レアルヲ免レヌ是レ本條ニ於
テ現金又ハ有價證券ニ制限シ務メテ簡單ナル方法ヲ執リタル所以ナリ

當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意
見ニ任スル場合ヲ除ク外トアリ故ニ合意又ハ此法律ニ於テ裁判所ノ意見ニ任スル場合ハ
必ス現金又ハ有價證券ナラサルモ抵當又ハ保證人ヲ以テ保證セシムルコトヲ得ヘシ
此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ハ本法第七百四十
一條第七百四十五條ニ規定セリ

訴訟ニ關スル保證ニ付テハ次條以下ニ定ムル外本法第五百條第五百三條第五百五條第五
百十二條第五百四十七條第五百四十九條第七百四十三條第七百五十九條ニ示定セリ
保證金預置ノ方法ハ特別規則ニ依テ定メラレタリ

〔參照〕 獨 第一百一條 訴訟上ノ保證ハ原告ニ於テ別段ノ契約ヲナサス又ハ此法律ニ於
テ裁判所ノ見込ヲ以テ定ムヘキ保證ヲ許ス場合ニ限リ現金又ハ裁判所ノ見込ニ依リ充分
引當トナル有價證券ヲ藏貯シテ之ヲナスヘキモノトス

第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因
リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ
左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生セス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ナキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

〔解義〕〔理由〕 本條ハ原告トナリタル外國人ニ訴訟費用ノ保證ヲ立ルノ義務ヲ負ハシム可キ事ヲ示定セリ

原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ノ請求アルル訴訟費用ニ付保證ヲ立テサル可ラス

原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人トアリ故ニ外國人ト雖モ被告人トナルルハ保證ヲ立ツルノ義務ナシ何トナレハ自ラ進テ訴訟ヲ爲スニアラサレハナリ抑又原告タル外國人ヲシテ保證ヲ立テシムル所以ノモノハ外國人ハ異域ニ住居シ隨テ財産モ本國ニ存在スヘキヲ以テ一朝訴訟ヲ起シ若シ已ノ敗訴ニ歸シタルルハ自由ニ本國ニ歸リ被告ハ遂ニ訴訟費用ノ辨償ヲ得ルコトノ道ヲ失スルコトアレハナリ

其求ニ因リトアリ故ニ被告ノ請求ナキハ固ヨリ保證ヲ立テス可ナリ若シ被告ニシテ之ヲ求ムルルハ地方裁判所ニ於テハ本案ノ審問前ニ之ヲ爲スヲ要ス(本法第二百六條)

又被告ハ原告カ保證ヲ立テサルル訴訟ノ答辨ヲ拒ムコトヲ得(本法第二百七條)又區裁判所及ヒ控訴ノ場合ニ於テハ本法第三百七十九條及第四百十四條ヲ參看ス可シ

訴訟費用ニ付キトアリ故ニ保證ノ請求ハ訴訟費用ニ付キテ之ヲ爲スコトヲ得ルノミ又被告ハ保證ヲ請求スルニハ其原告外國人タル事實ヲ舉クルヲ以テ足レリトナス

本條第二項ニハ外國人ト雖モ保證義務ヲ免ル可キ四個ノ場合ヲ舉示セリ

第一ノ場合ニ於テ保證義務ヲ免シタルハ必竟交互相應的ニ基ケルモノナリ

第二及ヒ第四ノ場合ニ於テ保證義務ヲ免シタルハ元此訴訟タル被告ヨリ先キニ攻撃セルニ因テ起ルノ理由ニ出ルモノナリ第四公示催告ニ關シテハ本法第七編ニ規定セリ

第三ノ場合ニ於テ保證義務ヲ免シタルハ此等ノ訴訟ニ付テハ別ニ簡易迅速ナル審判手續ヲ特定スルニ由レリ證書訴訟及ヒ爲替訴訟ニ付テハ本法第五篇ニ規定セリ

〔辨疑〕 本法ニ於テハ原告訴訟進行中本邦人タル資格ヲ失フ時又外國人ニシテ保證義務ヲ免レタル條件ノ消滅セル時ニ何等ノ規定ナキハ猶ホ此場合ニ於テモ保證義務ヲ免除スルノ精神ナリヤ如何曰フ否ラス假令別段ノ規定ナシト雖モ本條ノ律意ヨリ推考スルルハ此等ノ場合ニ於テハ當然保證義務ヲ生スルモノト決定セサル可ラス何トナレハ此等ノ場合ノ生スルルハ最早免除スルノ理由存セザレハナリ故ニ若シ此等ノ事故生スルルハ被告ハ保證ノ請求ヲ爲シ得ヘキナリ

〔參照〕 獨 第二百二條 原告タル外國人ハ被告ノ求メニ依リ之ニ訴訟費用ニ付テノ保證ヲ

ナスヘキモノトス

此ノ義務ハ左ノ場合ニ於テハ生セサルモノトス

第一 原告ノ屬スル國ノ法律ニ從ヒ獨逸人同一ノ場合ニ於テ保證ヲナスノ義務ナキ作

第二 證書裁判又ハ爲替裁判ニ於ケルトキ

第三 反訴ノトキ

第四 公告ヲ以テスル督促ニ依リ提起スル訴訟ナルトキ

第五 獨逸國官署ノ地所帳又ハ書入質帳ニ記入セラレタル請求ヨリ起ル訴訟ナルトキ

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ

此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕 本條ハ原告ノ爲ス可キ保證ハ裁判所其額ヲ定ム可キコトヲ示定セリ

前條第一項ノ原告タル外國人カ保證ヲ立ツ可キ場合ニ於テ其保證ノ數額ヲ定ムルハ裁判

所ノ任ナリトス

然レモ裁判所ニ於テカ保證額ヲ定ムルニハ被告カ訴ヲ受ケタル爲ニ初審及上級審ニ於テ支出ス可シト認ムル訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲サ、ル可ラス

又訴訟進行中保證ノ不足ヲ生シ且被告ヨリ追増保證ヲ要求スル時ニ在テモ前ト同シク被告カ支出ス可キ費用ヲ標準トシテ定メサル可ラス然レモ原告カ請求セル中ヨリ被告カ認

許セル部分ニテ擔保ニ十分ナリト認ムルハ故ラ追増保證ヲ爲スノ必要アラサル可シ裁判所ハ以上保證義務ノ有無及ヒ其數額ニ付キ爭アルハ裁判ヲ爲サ、ル可ラス而シテ棄却ノ裁判ニ對シテハ直ニ控訴スルコトヲ得ヘキモ此他ノ場合ニ於テハ本案終局判決ニ對スル控訴ヲ併セテ爲サ、レハ之ヲ許サ、ルナリ(本法第二百七條第三百九十七條)

又訴訟進行中保證額ニ不足ヲ生スルハ其原因ノ如何ニ出ツルチ間ハサルナリ故ニ先ニ差入レタル有價證券ノ相場下落セルニ依ルコトアリ或ハ最初ノ評定算價ニ失セルノ明カナルニ因レルコトモアラシ

〔參照〕 獨 第四百四條 保證ヲナスノ額ハ裁判所其見込ヲ以テ之ヲ確定スルモノトス

其確定ニ方テハ被告ノ支出スヘキ訴訟費用ノ額ヲ標準トナスヘキモノトス反訴ニ依リ被告ニ生スル費用ハ之ヲ限外トス

訴訟中保證ニ不足アルコトノ判然スルトキ被告ハ引當ニ充分ナル訴訟上請求ノ部分ニ付異議アル場合ニ限り更ニ保證ヲ求ムルコトヲ得

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

〔解義〕 本條ハ裁判所カ保證ヲ命スルニ當テ之カ期間ヲ定ム可キコトヲ示定セリ

裁判所ハ保證ヲ命スルト同時ニ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定メサル可ラス

若シ期間内ニ保證ヲ立テサルキハ被告ハ原告カ其訴ヲ取下ケタリトノ宣言アラソコ又訴

訟カ上訴ニ係ルキハ其上訴ヲ取下ケタリトノ宣言アラソコノ請求ヲ爲シ得ヘキナリ

上訴中此宣言ヲ受ケタルキハ原告ノ權利上ニ蒙ル可キ損害殊ニ著大ナリトス何トナレ

ハ訴訟却下ノ言渡ヲ受ケタルキハ原判決遂ニ確定スレハナリ

然レハ本條ノ期間タル不變期間ニ非ラサルヲ以テ假令其期ニ後ル、ニ未タ棄却ノ判決アラサル以前ナレハ之カ保證ヲ立ツルコトヲ許サ、ル可ラサルナリ

又期間ノ進行ハ其言渡ヲ以テ始ム可シ此期間タル不變期間ニ在ラサルヲ以テ本法第百六

十九條乃至第七十一條ヲ適用シ相當ノ理由アルキハ其期間ヲ伸縮スルコトヲ得ヘキナ

リ

〔參照〕 獨 第百五條 裁判所ハ保證ヲ命スルノ際原告ニ對シ保證ヲナスヘキ期限ヲ定ム

ヘキモノトス其期限經過ノ後其裁決マテニ保證ヲナサ、ルトキハ被告ノ申立ニ依リ訴訟ヲ取下ケタルモノトシテ言渡シ又原告ノ上訴ニ付キ審問スヘキトキハ其上訴ヲ棄却スヘ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非

サレハ訴訟費用ヲ出タヌコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコト

ヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ

非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同

一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限り之ヲ求ム

ルコトヲ得

〔解義〕 此兩條ハ無資力者訴訟上ノ救助ニ關スル要件ヲ示定セリ

第九十一條 自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ノ辨償ヲ爲シ能ハ

サル者ハ費用ノ猶豫ヲ認可セラル可キ請求ヲ爲シ得ヘキナリ而シテ此猶豫ヲ請求スルニ

ハ其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込アルモノト認定ス可キ時ニ限

ルコトヲ得

○訴訟上ノ救助

○訴訟上ノ救助

必要ナル生活ヲ缺クニ非ラサレハ訴訟費用ヲ出タスコト能ハサル者トアリ故ニ一口ニ云ヘハ無資力者ナラサレハ此恩典ニ與カレテ得ヌ而シテ如何ナル者チ無資力トスルカ至テハ別ニ規定セテト雖僅少ノ公費ヲ納ムルカ又ハ至ク之ヲ出サス且其無資力ナルカ爲メ裁判所ニ請テ權利ヲ伸暢シ能ハサル者ハ概テ無資力者ト見做スコキナリ而シテ無資力者ニ證明スル方法ニ至テハ本法第九十三條ニ示定セリ

其目的トスル權利ノ伸暢又ハ防禦ノ輕忽ナラサルヤ否又ハ見込アリト認定スルニ足ル可キヤ否ニ至テハ偏ニ裁判所ノ所見ニ任サ、ル可ラス然レ見込ナキニ非ラスト見ユルトキトアルハ必ス勝訴トナル場合ニ局限ス可ラス訴訟ノ勝敗ハ到底結局ニ至ラサレハ之ヲ知ルコト能ハス只最初一見スル所ニ於テ見込アリト認メラレハ可ナリ又權利伸暢及ヒ防禦ニ付テハ敢テ其種類ノ何タルヲ問フテ要セス督促命令手續又ハ證據保全手續ノ類ニテモ亦辨償猶豫ヲ求ムルコトヲ得ヘキナリ

第九十二條 外國人ハ國際條約ニ於テ彼我互ニ猶豫ヲ請求スルコトノ定メアルカ又ハ本邦人カ同一ノ場合ニ遭遇スルモ其外國ノ法律ニ依テ救助ヲ求ムルコトヲ得ヘキトキハ之ヲ求ムルコトヲ得ヘシ是レ彼我應酬ノ旨趣ニ基クモノナリ

〔理由〕 無資力者ニ訴訟上ノ救助ヲ與フル所以ハ貧人富者ノ權利ヲ平等ニ保護スルノ趣旨ニ因由ス

〔參照〕 獨ニ第百六條 何人タリトモ自己及其家族ノ爲メ必要ナル生計ヲ害スルニアラサ

レハ訴訟費用ヲ支拂フコト能ハサル者ハ其主旨タル權利伸暢又ハ權利辨護ヲ輕卒ニ出テ又ハ見込ナクシテナシタリト認ムヘカラサルトキ受救權ノ許可ヲ受ルノ請求ヲナスコトヲ得

外國人ハ相互ノ保證アル場合ニ限り受救權ヲ受ルノ請求ヲナスコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出スコシ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出タスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證スコシ

〔解釋〕 本條ハ訴訟救助ノ申請方法ヲ示定セリ

訴訟上救助ノ申請ハ權利ノ關係及ヒ立證方法ヲ表示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ提出セザル可ラス又申請ハ必ス書面ニ依ラサルモ口頭ヲ以テモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ救助ヲ求ムル審級ノ裁判所トアリ故ニ初審裁判所ニ限ラズ請願ヲ爲ストキ訴訟ノ受理セラレタル裁判所ヲモ包含スルハ明カナリ

○訴訟上ノ救助

○訴訟上ノ救助

又申請ヲ爲ス原被告ニ其申請ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル無資力證明書ヲ提出セサル可ラス而シテ其證明書ニハ原告若クハ被告ノ身分職業財產並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支辨ノ資力ナキコトヲ證スルヲ要ス

〔理由〕 救助ノ申請ヲ爲スニ訴訟ノ關係及ヒ證據方法ヲ表示セシムルハ裁判所カ輕忽ノ訴訟タルヤ否ヲ審理スルニ便ナラシムルモノナリ若シ證明方法ノ不十分ナルハ裁判所ハ之ヲ補充セシムルコトヲ得ヘキナリ(本法第百二十二條)

〔參照〕 獨 第百九條 受救權ノ許可ヲ求ルノ申立ハ訴訟裁判所ニ呈出スヘキモノトス其申立ハ裁判所書記ニ口述シテ筆記セシムルコトヲ得

ハ職業、財産ノ現狀及家族ノ關係并ニ原被告ノ納ムヘキ直接國稅ノ額ヲ記載シテ訴訟費用ノ辨償無資力ヲ明證スルモノトス後見又ハ管財ヲ受ル人ニアリテハ後見官署ニ於テモ亦其證書ヲ交付スルコトヲ得

其申立ニハ證據物ヲ記載シテ訴訟ノ關係ヲ明ニスヘキモノトス

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ニ付テモ之ヲ付與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ資力ヲ證スルコトヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上

ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤヲ調査スルコトヲ要セス

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ訴訟上ノ救助ノ認否ハ每級裁判所ニ於テ爲ス可キヲ示定セリ訴訟上ノ救助ハ每級裁判所ニ於テ之ヲ附與ス何トナレハ原裁判所ニ於テ與ヘタル審査ハ上級裁判所ヲ拘束スルノ理ナケレハナリ

又第一審裁判所ニ於テ救助ヲ與フルトキハ強制執行ニ付テモ亦之ヲ付與スルモノトス前審ニ於テ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テ最早無資力ヲ證スルヲ要セス何トナレハ前審ニ於テ救助ヲ受ケタルトキハ當然無資力ヲ認定スルニ足レハナリ而シテ此時ト雖輕忽ノ訴訟タルヤ否又見込ナキニアラスト見ユルヤ否ニ至テハ猶ホ調査ヲ遂ケサル可ラス若シ輕忽ノ訴訟ナルカ又ハ見込アリト見ユサルトキハ上級審ハ之ヲ救助ヲ許可セサルコトヲ得ヘシ

然レニ相手方ニ於テ上訴シタルトキハ唯前審ニ於テ救助ヲ受ケタル而已ヲ以テ足レリトス何トナレハ自ら進テ訴訟ヲ起スニ非ラサレハナリ

〔參照〕 獨 第百十條 受救權ヲ受ルノ許可ハ各階級ノ裁判所ニ於テ各別ニ之ヲナシ始審裁判所ニ於テハ權利執行ヲ合シ之ヲナスモノトス

上級ノ裁判所ニ於テハ下級ノ裁判所ニ於テ受救權ヲ許可セシトキ無資力ノ證明ヲ要セス對手上訴ヲナシタルトキ上級ノ裁判所ニ於テハ其原被告ノ權利伸張及權利辨護ヲ輕卒ニ

○訴訟上ノ救助

○訴訟上ノ救助

出テ又ハ見込ナクシテナシタリト認ムヘキヤヲ検査スルコトヲ要セス

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セサリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリトモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

〔解義〕 此兩條ハ救助ノ消滅スル場合ヲ示定セリ

第九十五條 訴訟ノ救助ハ本法第九十一條ニ規定スル如ク無資力ナルノ輕忽ヲサレノ二條件ヨリ成立ス若シ此二條件ノ中一箇ニテモ當初ヨリ備ラサルカ又ハ後日ニ於テ之レナキニ至リタルトキハ裁判所ハ職權ニテモ又對手人ノ申立ニ因ルモ之カ救助ヲ取消シ得ヘキナリ而シテ其取消ノ効力ハ只當初ヨリノ又後日ノ資産上ノ景況ニ因テ之ヲ取消シタル場合ニ限リ其既ニ經過シタル時期中ノ費用ニマテ及ホスナリ何トナレハ本法第百條ニ據ルモ資産ノ回復ニ因テハ追納スルノ義務アルモノト定メアレハナリ

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ無資力者ノ相續人ニ向テモ之ヲ與ヘタルモノト云フ可ラス故ニ救助ハ其原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス可キナリ然シ此者等ト雖モ規定スル所ノ要件アルニ於テハ更ニ之カ申請ヲ爲シ得ヘキナリ

此他之ヲ取消ス可キ原因ナキニアラス例ヘハ本法第五十八條第六十二條ノ如ク其救助ナ

受クル訴訟人訴訟ヲ脱スル時ノ如キ之ナリ

〔參照〕 獨 第百十二條 受救權ハ其許可ノ要件存セサリシコト又ハ消滅シタルコトノ判

然トスルキ何時ニテモ之ヲ取上ルコトヲ得

獨 第百十三條 受救權ハ其許可ヲ受ケタル人ノ死去ト共ニ消滅スルモノトス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ効力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟清スルコトノ假免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及ヒ執行行為ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ訴訟上ノ救助ノ効力ヲ示定セリ

訴訟救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ左ノ事項ニ對シ辨償猶豫ヲ得ルモノトス

第一 裁判費用ヲ辨償スル假免除

○訴訟上ノ救助

裁判費用ニハ國庫立替金ヲ包含ス立替金トハ訴訟用印紙代公示送達ノ費用郵便稅登記
手数料檢記旅費等ノ類ヲ云フ又假免除トハ一時辨償ノ猶豫ヲ得ルノ云ヒニシテ決シテ辨
償ヲ免除セラルルニアラザルナリ

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

此保證免除ハ本法第八十八條ニ定ムル保證ヲ指稱スルモノナリ

第三 送達及ヒ執行行為ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

此外必要ナル場合ニ於テハ申立ニ依リ又裁判所ノ職權ヲ以テ無報酬ニテ辨護士ノ附添ヲ
命令スルコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨 第七條 受救權ノ許可ヲ受ルニ依リ其原被告ハ左ノ權利ヲ得ルモノトス

第一 官吏ノ手数料、證人及鑑定人ニ與フヘキ報酬及其他ノ現金立替並ニ印紙稅ヲ併セ

未納ノ裁判費用及將來ニ生スル裁判費用ノ支拂ヲ一時免除セラル、コト

第二 訴訟費用ニ付テノ保證ヲ免除セラル、コト

第三 送達及執行處分ヲ一時無報酬ニテサシムル爲メ裁判所使吏ヲ付セシメラル、ノ
權及代官人ヲ以テ代理セシムルコトヲ要スル場合ニ限り一時無報酬ニテ其權利ヲ行ハシ
ムル爲メ代官人ヲ付セシメラル、ノ權

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影

響ヲ及ボサス

〔解義〕 本條ハ費用辨償ノ義務ニ關スルコトニ付キ示定セリ

本條ハ費用ノ最終ノ結算ニ付キ本法第八十四條以下ノ規則ニ依リ無資力者ヨリ對手人ニ
辨償ス可キ費用ニ關シテ規定シタルモノナリ即チ訴訟上ノ救助ヲ受クルト雖に決シテ相
手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スルノ義務ヲ免ル能ハス故ニ訴訟上曲者ノ言渡ヲ受クルトハ
費用ノ辨償ヲ爲サル可ラサルナリ

〔參照〕 獨 第八條 受救權ヲ受ルノ許可ハ對手ニ生スル費用ヲ辨償スルノ義務ヲ變更
セサルモノトス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟清ヲ免除シタ

ル裁判費用ハ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ
上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方
ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一
ノ條件アルトキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料
及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ訴訟救助ヲ受ケタル者ノ對手人ヨリ費用ヲ辨償ス可キ場合ヲ示定セリ
訴訟救助ヲ受ケタル者ノ對手人訴訟費用ヲ辨償ス可キ判決ヲ言渡サレ其判決確定シタル

キハ自己及ヒ救助ヲ受ケタルモノ、爲ニ生シ且假免除ニ係リタル裁判費用ハ該對手人ヨリ取立ツ可キモノトス又救助ヲ受ケタル者ノ對手人ニシテ訴若クハ上訴ヲ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キモノトシテ該對手人ヨリ取立ツルモノトス又救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル達執吏又ハ辨護士ハ救助ヲ受ケタル者ノ對手人敗訴ノ判決ヲ言渡サレ其言渡確定シタルトキ又對手人ニシテ訴若クハ上訴ヲ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キトキハ該相手人ヨリ其手数料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得ヘシ

本條第二項ハ執達吏又ハ辨護士ノ爲メ一ノ保護ヲ與ヘタルモノナリ故ニ執達吏又ハ辨護士ニ於テ寧ロ無資力ナル本人ニ掛リ請求スルヲ便利ナリトスルトキハ固ヨリ之ヲ訴フルコトヲ得ヘシ即チ本條第二項ニ於テハ末尾ニ得ノ字ヲ加ヘテ此權利アルヲ示定セリ

〔參照〕 獨 第百十四條 貧困ナル原告ノ一時支拂ヲ免除セラレタル裁判費用ハ未納裁判費用徴收規則ニ從ヒ訴訟費用辨償ノ言渡ヲ受ケタル對手ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得 貧困ナル原告一方ノ對手ノ一時支拂ヲ免除セラレタル裁判費用ハ其對手ヨリ之ヲ取立ツヘキモノトス但其對手訴訟費用辨償ノ言渡ヲ受ケ又ハ其費用ニ付キ判決ナクモテ訴訟ヲ終結シタルトキニ限ル

獨 第百十五條 貧困ナル原告ニ付セラレタル裁判所便吏及代言人ハ其手数料及立替金ヲ訴訟費用辨償ノ言渡ヲ受ケタル對手ヨリ徴収スルノ權アルモノトス

貧困ナル原告ノ身上ヨリ生スル辨償ハ同一ノ訴訟ニ於テ其費用ニ付キ言渡サンタル裁判ニ依リ貧困ナル原告ノ辨償スヘキ費用ノ差引計算ヲ求ル場合ニ限リ之ヲナスコトヲ得

第百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

〔解義〕 本條ハ假免除ノ費用ヲ追償スル場合ニ付キ示定セリ

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額ヲ追償セサル可ラス

抑裁判所ニ於テ一旦假免除ノ認許ヲ與ヘタルモハ訴訟中救助ヲ受ケタル要件存セサルカ或ハ消滅セシカ(本法第九十五條)又ハ本人死亡セシカ(本法第九十六條)ニ因リ假免除ノ消滅セサル限り依然効力ヲ保持ス可キハ明カナリ加之假令輕忽ニ爲シタル訴訟ナリトシテ認許ヲ取消サル、ト雖モ既往ノ費用ニハ更ニ追及スヘカラサルナリ

然ルニ濟清シ得ヘキ資産ヲ生シタルトキハ特リ將來ノミナラス既往ノ費用マテモ追償セサル可ラサルナリ

右ノ如ク本法第九十五條第九十六條ハ將來ノ費用ニ付キ假免除ヲ許サル、ノ効力アルニ

○訴訟上ノ救助

過キサルヲ以テ既往ニ溯リ之ヲ追償スルニハ特ニ本條ノ設ケアラサル可ラサルナリ

〔參照〕 獨 第一百十六條 受救權ヲ許サレタル原被告ハ自己及其家族ノ爲メ必要ナル生計ヲ害スルコトナクシテ辨償スルコトヲ得ヘキトキハ一時支拂ヲ免除セラシ額ヲ直ニ辨償スルノ義務アルモノトス

對手ノ一時支拂ヲ免除セラシ額ニ付テハ貧困ナル原被告訴訟費用辨償ノ言渡ヲ受ケタルトキニ限り前項同一ナリトス

第一百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與並ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ救助ノ認否ニ付テノ手續ヲ示定セリ

裁判所ハ救助ノ付與並ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、救助ノ取消及ヒ追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲スニハ豫メ檢事ノ意見ヲ聽クコトヲ要ス又決定ヲ爲スニハ口頭辯論ヲ須ヒサルコトヲ得ヘシ

救助ヲ與フルト否又辯護士附添ヲ命スルノ必要アリヤ否ニ至テハ尤モ受救者ノ保護上ニ關係セル大ナルヲ以テ常ニ裁判所ニ於テ公益ノ監察ヲ掌ル檢事ノ意見ヲ聽クコトヲ必要

トセルモノナリ又是等ノ申請ヲ認否スルコト追拂ヲ命スルコトニ至テハ偏ニ裁判所ノ意見ニ在ル可キヲ以テ敢テ口頭對審ヲ經ルヲ要セサルモノトス

〔參照〕 獨 第一百七條 受救權ノ許可ヲ受クルノ申立、受救權取上及受救權ヲ許サレタル原被告又ハ對手ノ一時支拂ヲ免除セラレタル額ノ後拂義務ニ付テハ豫メ口頭上ノ審問ナクシテ之ヲ裁決スルコトヲ得

第一百二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限リ抗告ヲ爲スコトヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 本條ハ救助ニ關スル決定ニ對シテ上訴ヲ許スル場合ヲ示定セリ

救助ヲ付與シ又ハ救助ノ取消ヲ拒絕シ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒絕スル決定ニ對シテハ檢事ノ外抗告ヲ爲スコトヲ得ス何トナレハ對手人ニ在テハ敢テ之カ抗告ヲ爲ス可キ利益ヲ有セザレハナリ

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ許サス何トナレハ辯護士ノ附添ヲ命スルト雖モ對手人ニ於テ之カ上訴ヲ爲ス可キ理由ナクハナリ又附添ヲ命セラレタ

○訴訟上ノ費用

ル辯護士ハ其命ニ應スルノ義務アルコトハ辯護士ニ關スル特別規則ニ規定セラル可キナ
リ
救助ノ申請ヲ拒絕シ若クハ救助ヲ取消シ又ハ辯護士附添ノ申請ヲ拒絕シ又ハ費用ノ追拂
ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ニ於テ抗告ヲ爲シ得ヘキナリ

〔參照〕 獨 第百十八條 受救權ヲ許可スル決議ニ對シテハ上訴ヲナスコトヲ許サス受救
權ヲ拒絕シ又ハ取上又ハ費用ノ後拂ヲ命スル決議ニ對シテハ故障ヲ申立ルコトヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリト
ス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキ
ハ此限ニ在ラス

〔解義〕 本條ハ訴訟ノ辯論ハ一般ニ口頭ニ依ル可シトノ原則ヲ示定セリ

本條ハ舊慣ヲ改正セシ最モ著明ノ點ナリ即チ訴訟ニ付テノ辯論ハ此法律ニ於テ例外ヲ示
サ、ル以上ハ總テ口頭ニ因ル可シトセリ故ニ舊慣ノ如ク書面ヲ以テ辯論ヲ戰ハシ或ハ書
面口頭兩ナカラ之ヲ用ルカ如キヲ許サ、ルモノトス
然レモ當初ヨリ直チニ口頭審理ヲ開ク能ハス之カ訴答ヲ爲スニ當リ自ラ一定ノ順序規律

ナカル可ラス即チ本法ニ於テハ先ツ暫ラク書面ヲ以テ口頭辯論ヲ準備ス可キコト、セリ
本條口頭辯論ヲ採用シタル法制ヨリ左ノ如キ効果ヲ生ス

第一 準備書面ニ掲ケサルコト、雖モ口頭審理ノ際之ヲ陳述セシキハ總テ之レヲ參酌採
用セサル可ラス

第二 準備書面ニ掲ケタルト雖モ口頭審理ノ際之ヲ陳述セサルキハ決シテ參酌採用スルヲ
得ズ

以上口頭審理ノ主義トスル所裁判官ハ親ク聽聞スル所ニ限り採用ス可シト云フニ在リ而
シテ此主義ヨリ又左ノ効果ヲ生ス審理ノ席ニ莅ミタル裁判官ノ外判決ヲ爲ス可ラサルナ
リ若シ裁判官更迭シタルトキハ必ス更ニ口頭審理ヲ開カサル可ラス

〔參照〕 獨 第百十九條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ審問ハ口頭上審問ナリトス

第百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第百五條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判所、訴
訟物及ヒ附屬書類ノ表示

第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立

第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係

第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述

第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用ヰントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述

第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印

第七 年月日

第六六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ此他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲クルコトヲ得ス

〔解義〕 第四百四條ハ口頭辨論ハ書面ヲ以テ準備ス可キコトヲ示定シ第五百五條ハ準備書面ノ條件ヲ示定シ第六六條ハ準備書面ノ記載方法ヲ示定セリ

第四百四條 口頭辨論ハ書面ヲ以テ準備セサル可ラス故ニ口頭ニテ起訴シ或ハ控訴スルモ其効ナカルヘキナリ又訴訟ノ變更ニ付テモ口頭ノ申立ハ其効力ヲ生セサル可シ(本法第百九十五條第四百十三條)

又準備書面タル訴狀反訴狀等ヲ交付スル爲メ送達スルルハ本法第百九十五條ノ効力ヲ生スル而已ナラス期滿免除ヲ中斷シ得ヘシ然レハ區裁判所ニ訴アルルハ必ス書面ヲ用ヒサルモ口頭ヲ以テモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ

又一定ノ裁判期日ニハ豫メ期日ノ指定ナクシテ直ニ裁判所ニ出頭シ口頭ニテ辨論ヲ爲スコトヲ得ヘシ(本法第三百七十四條第三百七十八條)

第五百五條 本條ハ素ト訓諭法ニシテ頗ル口頭審理ノ準備ヲ爲ス目的ニ適當セリ乃チ能ク本條ノ規則ヲ遵奉シ且本法ニ規定スル所ニ依テ其書面ノ送達ヲ適當ノ時期ニ於テ爲スルハ原告被告ハ攻撃又ハ辨護ノ準備整頓シテ速ニ口頭審理ヲ開キ得ヘキナリ又是カ爲メ完全ナル審理ノ進行ヲ迅速ナラシメ且準備書面ノ原本ハ對審前受訴裁判所ノ書記局ニ出シ置カサル可ラサルヲ以テ(本法第百八條)更ニ手續上適當ノ指揮ヲ爲スニ付便利ヲ與フ可キナリ

本條列記セル事項ハ一讀明了ニシテ別ニ解釋ヲ要セス

第六六條 本條準備書面ニハ事實ヲ簡明ニ記載ス可シトシ又事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ之ヲ掲クルヲ得ストセシハ能ク準備書面ノ性質ヲ明示スルニ足ル可シ素ト準備書面ハ口頭ヲ準備スルニ過キサルヲ以テ若シ其書面中ニ事實ノ景況ニ關スル所之ヲ詳舉シテ其要否ヲ擇フコトナク而シテ又其關係ノ要旨ヲ簡約ニ抄出スルナクシテ精細冗長ニ論述シ且法律上ノ論辨ヲ喋々シテ更ニ煩雜ナラシムルニ至テハ即チ立法者ノ企圖セル所ニ戻リ反テ其主義トナル所ヲ認ルニ至ル可キナリ

〔辨疑〕 第五百五條ニ列記セル事項ヲ遺漏セシキ如何ナル効果ヲ生ス可キヤ曰ク第五百五條ハ一ノ訓諭法ニシテ彼ノ本法第百九十四條第四百一一條第四百三十八條ノ如ク制限セルモノト

○口頭辨論及ヒ準備書面

異ナルヲ以テ假令遺漏スルコトアルモ其書面ハ無効トセサルノ趣旨ナル可シ本法第二百二十三條ニ於テ書面上ノ遺漏ヲ追正シ得ルニ依ルモ自ラ知了セラル可キナリ然レハ準備書面ノ不十分ナル爲メ口頭審理ヲ變更シ若クハ期日ニ至テ延期シ又ハ後ノ期日ヲ定メ之ヲ繼續スルニ至ラシムルモハ之ヨリ生シタル費用ヲ負擔セサル可ラス

〔參照〕 獨 第二百二十條 口頭上審問ハ代言訴訟ニ於テハ書面ヲ以テ之ヲ準備スルモノトス此規定ヲ遵守セサルモ事件ニ關シ權利上損害ヲ受クルコトナシ其他ノ訴訟ニ於テハ準備書面ヲ交換スルコトヲ得

獨 第二百二十一條 準備書面ニハ左ノ件々ヲ記載ス可シ

第一 原被告及其法律上代人ノ氏名身分又ハ職業住所及原被告タルノ資格裁判所及訴訟事件並ニ附屬書類ノ頁數

第二 原被告法廷ニ於テオサント欲スル申立

第三 申立ノ理由トナル事實上ノ關係

第四 對手ノ事實上主唱ニ付テノ陳述

第五 原被告ニ於テ事實上主唱ノ證明又ハ駁斥ニ供セント欲スル證據物並ニ對手ノ記載ナル證據物ニ付テノ陳述

第六 代言訴訟ニ於テハ代言人ノ署名其他ノ訴訟ニ於テハ原被告本人又ハ之ニ代テ訴訟代人又ハ業務擔當者トナリ委任ナシテ處置スル者ノ署名

第一百七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル

證書カ既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第一百八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

〔解義〕 〔理由〕 第一百七條ハ證書ノ謄本ヲ提出スルコトニ關シ第一百八條ハ準備書面ノ謄本ヲ裁判所ニ呈出スルコトヲ示定セリ

第一百七條 原被告ノ手裏ニ存在スル證書ニシテ且申立ノ證明ノ爲メ引用セルモハ其證書ノ謄本ヲ準備書面ニ添附セサル可ラス

然レハ證書ノ一部分ヲ引證スルモハ其全部ノ謄本ヲ以テセズモ其冒頭、引用ノ部分、終尾日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添付スルヲ以テ足レリトス

○口頭辨論及ヒ準備書面

○口頭辯論及ヒ準備書面

又引用セル證書ノ相手方ニ知レタルトキ又濬、濬ニシテ容易ニ謄寫スル能ハサルモハ相手方ニ閲覧セシメント欲スル旨ヲ附記スレハ可ナリ
 蓋シ原被告ハ審理期日前ニ證書ノ條件ヲ知了セルトキハ口頭審理ニ於テ提出スル證書ニ對シ辨護スルノ準備ヲ爲シ得又審理期日前ニ證書ノ閲覧ヲ請求シ得ヘキ場合ニ於テハ其之ヲ提出シタル時直ニ該證ノ眞否ニ付キ説明シ得ルナリ即チ本條ハ審理ヲ迅速ナラシムルニ切要ナル規則ナリトス
 原被告其書面中ニ引用スル證書ニシテ自己ノ掌裏ニ存在スルモノヲ提出スルチ肯セサルモハ相手人ハ其辨明ヲ爲スコトヲ拒ミ其他一方ノ費用ヲ以テ期日ノ更定ヲ請求スルノ權アリ若シ又其證書ヲ本案終局判決アルマテ提出セスシテ止ム時ハ則其立證方法ハ自ラ滅却ス可キナリ

〔然レハ證書及ヒ爲替ニ關スル訴訟ニテハ必ズ初メヨリ證書ノ原本又ハ謄本ヲ添ヘテ提出セサル可ラス(本法第四百八十五條)〕

又對手人自己ノ立證ノ爲メ又ハ反對立證ノ爲メ他人ノ所持スル證書ヲ提出セシメント欲スルモハ本法第三百三十五條以下ノ手續ニ依ラサル可ラサルナリ

第百八條 本條準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出サシムル所以ノモノハ亦裁判所ヲシテ準備ヲ爲シ得セシメ乃チ審理ニ付キテ適當ノ處理ヲ稽留セシメサルノ準備ヲ爲シ得ルニ在リ

〔分拆〕 第百七條ノ規則ハ二箇ノ條件ヲ要ス

第一 原被告其訴訟中ニ引用スル證書ナルコト
 第二 證書ノ原被告ノ手裏ニ現在セルコト

〔參照〕 獨 第百二十二條 準備書面ニハ原被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ其書面ニ引用スルモノ、原本又ハ謄本ヲ添フヘキモノトス

證書ノ一部ノミヲ要スルモハ其拔書ヲ添フルヲ以テ足レリトス其拔書ニハ證書ノ冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附及ヒ署名ヲ載スヘシ
 對手ニ於テ既ニ證書ヲ知了スルトキ又ハ其證書ノ大部ナルトキハ之ヲ詳記シ其展覽ヲ許スノ申込ヲナスヲ以テ足レリトス

獨 第百二十四條 原被告ハ其準備書面及附屬書類ニシテ訴訟裁判所ニ差出スヘキ謄本ヲ裁判所書記局ニ納付スヘキモノトス

此納付ハ裁判所期日ヲ定ムヘキトキ又ハ裁判所書記ヲ經テ送達ヲナスヘキトキハ原本ノ呈出ト同時ニ之ヲナシ其他ノ場合ニアリテハ準備書面ノ送達ヲナシタル後直ニ之ヲナスモノトス

第百九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得
 裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了ス

○口頭辯論及ヒ準備書面

ルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直ニ辯論續行ノ期日ヲ定ム
裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長
ハ口頭辯論ヲ閉テ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言渡ス

第一百十條 口頭辨論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル

當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ
口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルコトヲ許サス文字上ノ旨趣ヲ要用ト
スルトキハ其要用ナル部分ニ限り之ヲ朗讀スルコトヲ得

〔解義〕〔理由〕 本兩條ハ口頭審理ノ本體ニ關スル制規ニ付キ示定セリ

第九九條 裁判長ハ口頭辨論ノ準備整フタルハ其期日ニ於テ訴訟ニ莅ミ口頭辨論ヲ開
始シ且辨論ノ順序等ニ付キ之ヲ指揮スルモノトス

期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マルモノトス(本法第六十三條)即チ當事者ヲ訴訟ニ呼入レ
口頭辨論ヲ開始スルモノナリ

本條ハ固ヨリ區裁判所ニモ適用スルヲ以テ裁判長ノ語體ヲラサルカ如キモ區裁判所ニテ
ハ區裁判官ヲ指シ義ト解釋セサル可ラス

裁判長ハ當事者ニ發言ヲ許シ又其命令ヲ奉セサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得
裁判長ハ事件ニ付キ當事者ヲシテ辨論ヲ盡サシメ且間斷ナク辨論ヲ完結スルコトヲ努メ

サル可ラス又必要ノ場合ニ於テハ直ニ口頭審理繼續ノ爲メ後ノ期日ヲ定ムルモノトス
又裁判所ニ於テ事件ニ付キ辨論全ク盡キタリト認ムルハ裁判長ハ口頭辨論ヲ閉テ及ヒ
裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言渡スモノトス

裁判所ニ於テトアリ抑裁判ハ裁判所之ヲ爲スモノニシテ裁判長ハ畢竟之カ機關ニ供セラ
ルハ過キス故ニ辨論カ裁判ヲ爲スニ熟シタルヤ否ハ裁判所ニ於テ之ヲ決スルモノト爲
サ、ル可ラス裁判長陪席裁判官等ニ於テ之ヲ審理結了スルハ即チ裁判所カ審理結了スル
ノ道理ニ歸スル者トス又一旦口頭辨論ヲ閉テタル後ト雖モ若シ取調不十分ト認ムルトキ
ハ之カ再開ヲ命スルコトヲ得ヘシ(本法第二百二十四條)

裁判所ニ於テ判決決定ヲ爲スニハ會議室ニ於テスルモノニシテ是ニ關スル要件ハ裁判所
構成法ニ規定セリ然レモ事件ノ簡易ナルハ訴訟ニ於テ密議シ即時ニ之ヲ言渡スコトヲ
得ヘシ

又裁判長ハ訟廷内ノ靜肅及ヒ秩序ヲ保持セシムルノ權アルモノニシテ同シク裁判所構成
法ニ規定セリ

又訟廷ニ於テノ辨論ハ一般國語ヲ以テス可キモノニシテ又當事者ノ外國人タルハ若クハ
暗哑者等ニシテ言語ノ通セサルハ之ニ通事ヲ付スルコトアリ此等ニ關シテモ裁判所構成
法ニ規定セリ

〔參考〕

○口頭辨論及ヒ準備書面

裁判所構成法

第四百四條 訴訟審問ノ上席及指揮ハ合議裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル裁判長ニ屬シ區
裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル判事ニ屬ス

裁判長ニ屬スル權ハ裁判上一人ニテ職務スル判事ニモ亦屬ス

第四百五條 裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ハ其理由
ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ス此場合ニ於テ裁判所ノ判決ヲ言渡ストキハ再ヒ公
衆ヲ入廷セシムヘシ

第四百六條 裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入廷ノ特許ヲ與フルコトヲ至當ト認ムル者ヲ
入廷セシムルノ權ヲ有ス

第四百七條 裁判長ハ婦女兒童及相當ナル衣服ヲ着セサル者ヲ法廷ヨリ退カシムルコトヲ
得其ノ理由ハ之ヲ訴訟ノ記録ニ記入ス

第四百八條 開廷中秩序ノ維持ハ裁判長ニ屬ス

第四百九條 裁判長ハ審問ヲ妨グル者又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者ヲ法廷ヨリ退カシムルノ權
ヲ有ス

前項ニ掲タル違反者ノ行狀ニ因リ之ヲ拘引シ閉廷ノトキマテ之ヲ拘留スルノ必要アリト
認ムルトキ裁判長ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有ス閉廷ノトキ裁判所ハ之ヲ釋放スルコトヲ命
ジ又ハ五圓以下ノ罰金若ハ五日以内ノ拘留ニ處スルコトヲ得

此處罰ニ對シテハ上告ヲ許シ控訴ヲ許サス且其ノ所爲ノ輕罪若ハ重罪ニ該ルヘキモノナ
ルモキハ之ニ對シテ刑事訴訟ヲ爲スコトヲ得

第一百十條 前條ノ規定ハ左ノ變更ヲ當事者證人及鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス

第一 裁判所ハ開廷ヲ待タズシテ本條ノ違反者ヲ即時ニ罰スルコトヲ得

第二 違反者原告ナルトキハ裁判所ハ處罰ノ上仍本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不
敬ノ罪ヲ謝スルマテ其ノ審問ヲ中止スルコトヲ得

第一百十一條 裁判長ハ不當ノ言語ヲ用ケル辨護士ニ對シ同事件ニ付引續キ陳述スルノ權
ヲ行フコトヲ禁スルコトヲ得其禁止ハ此行狀ニ付懲戒上ノ訴追ヲ爲スコトヲ妨ケス

第一百十二條 裁判所ノ開廷中秩序ヲ維持スル爲第百九條第百十條及第百十一條ヲ以テ與
ヘタル權ハ豫審判事又ハ受命判事又ハ法律ニ從ヒ其ノ職務ヲ行フ試補モ亦之ヲ行フコト
ヲ得

此ノ場合ニ於テノ異議ハ二十四時以内ニ其ノ判事又ハ試補ニ之ヲ申出ルコトヲ得
豫審判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ノ屬スル裁
判所ハ刑事支部若ハ刑事支部ニ於テ前項ノ異議ヲ裁判ス受命判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試
補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ニ命シタル裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第一百十三條 第九條第百十條第百十一條及第百十二條ヲ以テ與ヘタル權ヲ行ヒタルト
キハ訴訟ノ記録ニ之ヲ記入シ及其ノ理由ヲ記ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ所爲ノ重罪若ハ輕罪ニ該ルヘキモノナルカ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其事件ヲ更ニ處分スルノ權アル官廳ニ報告ヲ爲ス

第百十五條 裁判所ニ於テハ日本語ヲ用フ

當事者證人又ハ鑑定人ノ中日本語ニ通セサル者アルトキハ訴訟法又ハ特別法ニ通事ヲ用ルコトヲ要スル場合ニ於テ之ヲ用フ

第百十六條 通事ノ任命及使用並ニ訴訟手續上其ノ行フヘキ職務ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百十七條 通事ノ得難キ場合ニ於テ書記其言語ニ通スルトキハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ニ用テラルコトヲ得

第百十八條 外國人ノ當事者タル訴訟ニ關係ヲ有スル者及其ノ訴訟ノ審問ニ參與スル官吏ノ或ル外國語ニ通スル場合ニ於テ裁判長便利ト認ムルトキハ其外國語ヲ以テ口頭審問ヲ爲スコトヲ得但シ其審問ノ公正記録ハ日本語ヲ以テ之ヲ作ル

第百十九條 合議裁判所ノ裁判ハ此ノ法律ニ從ヒ定數ノ判事之ヲ評議シ及之ヲ言渡ス

第百二十一條 判事ノ評議ハ之ヲ公行セズ但シ豫備判事及試補ノ傍聽ヲ許スコトヲ得判事ノ評議ハ其裁判長之ヲ開キ且之ヲ整理ス其ノ評議ノ顛末並ニ各判事ノ意見及多少ノ數ニ付テハ嚴ニ秘密ヲ守ルコトヲ要ス

第百二十二條 評議ノ際各判事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ヲ終トス

官等同キトキハ年少ノ者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始トス

第百二十三條 裁判ハ過半數ノ意見ニ依ル

金額ニ付判事ノ意見三說以上ニ分レ其ノ說各々過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至マテ最多額ノ意見ヨリ順次算額ニ合算ス

刑事ニ付其ノ意見三說以上ニ分レ各々過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第百二十四條 判事ハ裁判スヘキ問題ニ付自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス

第百十條 裁判長カ口頭審理ヲ開タル後當事者ハ先ツ互ニ其要旨ニ付キ申立ヲ爲シ即チ裁判所ハ其訴言ノ申立ニ依リ切要ノ點ヲ知了シタル後當事者ハ該申立ニ付キ理由ヲ付スルカ爲メ陳述スルモノトス(本法第二百二十二條)陳述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ付キ訴訟ノ關係ヲ明瞭ニスルヲ以テ目的トシ且任意ニ之ヲ爲スヘキモノトス

口頭ニテ爲メ陳述ニ代フルニ準備書面ヲ朗讀シ若クハ其陳述ヲ爲サスシテ之ヲ準備書面ニ讓ルコトヲ得然レトモ文字上ノ趣旨ヲ要用トスルトキハ其部分々之ヲ朗讀スルコトヲ得ヘシ

若シ口頭陳述ニ代ヘ書面ヲ朗讀シ又口頭陳述ヲ書面ニ讓ルルハ口頭審理本然ノ原則ニ背

戻スルノモナラズ遂ニ審理ハ書面上ノ審理ト變スルニ至ラシ抑口頭ニ代テ書面ノ朗讀ヲ爲スコノ收テ許ス可ラサルハ口頭審理ノ原則ニヨリ自然ニ生スル結果ナリト雖モ立法者特ニ本條第三項ヲ設ケタルハ口頭審理ノ主義ニ付テ更ニ疑惑ヲ起サシラシメンカ爲メナリ

〔參照〕 獨 第二百二十七條 裁判長ハ口頭上審問ヲ開始シ及ヒ指揮スルモノトス

裁判長ハ發言ヲ許シ及其命令ニ從ハサル者ニ對シ發言ヲ禁スルコトヲ得
裁判長ハ事件ニ付テノ辨論ヲ盡スコト及間斷ナク審問ヲ終ルコトニ注意ス可キモノトス
必要ナル場合ニ於テハ審問ヲ繼續スル爲メ直ニ開廷日ヲ定ムヘシ
裁判長ハ裁判所ノ見込ニ依リ事件ニ付充分辨論シタリト認ムルトキ審問ヲ終結シ及裁判所ノ判決及決議ヲ言渡スモノトス

獨 第二百二十八條 口頭上審問ハ原告被告其申立ヲナスヲ以テ始マルモノトス
原告被告ノ供述ハ言語ヲ以テ之ヲナシ事實上及法律上ニ於ケル訴訟關係ヲ包含スヘキモノトス

口頭上審問ニ換ヘテ書面ヲ引用スルコトハ之ヲ許サス書面ノ朗讀ハ其文字上主旨ノ必要ナルトキニ限り之ヲ許スモノトス

代言訴訟ニ於テハ代言人ノ外原告被告本人モ亦申立ニ依リ發言ヲ許サルヘキモノトス

第二百一十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯ハレサルトキハ自白シタルモノト看做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタルモノニモ非サル事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

〔解義〕 本條ハ辨明ノ義務及ヒ權利ノ毀損ニ付キ示定セリ

原告被告ノ一方ヨリ主張スル事實ニ付テハ他ノ一方ニ於テ辨明セサル可ラサルナリ而シテ其一般ニ亘リテ爲シタル抗辨ハ果シテ十分ノ効力アリヤ否ニ至テハ各場合ニ於テ裁判所ノ取捨判斷ニ任スヘキナリ

事實ニ付キ確然辨明ヲ爲サス且原告被告ノ他ノ辨明ニ於テ之ヲ抗爭セント欲スル意思ノ顯ハレサルトキハ即チ之ヲ自認シタルモノト看做ス可キナリ反之他ノ辨明ニ於テハ之ヲ抗爭セント欲スル意思ナルコトヲ見ルヘキナリハ則チ事實ニ對シ抗爭スルモノト爲ス可キナリ而シテ又本來ノ審理期日ヨリ更ニ多數ノ期日ニ亘ルに渾テ之ヲ一個ノ審理ト認ムヘキ原則ナルニ依リ新ニ期日ヲ指定シ或ハ更ニ審理ヲ開クコトヲ爲ス間何時ニテモ抗爭セサル事實ニ付キ抗爭ヲ爲シ得ヘシ然レバ時機ヲ失シテ抗爭ヲ爲メニ訴訟ヲ延滞ニ至ラシムルハ訴訟費用ノ全部又ハ幾部ヲ科セラルコトアル可キナリ原告被告カ自己ノ行爲ニ非

ラサル事實又ハ親驗セサル事實ニ付テハ之ヲ知了セスト答フルコトヲ得ヘシ乃チ此時ハ抗爭シタルモノト看做スヘキモノトス例ハ他人ノ行爲又ハ先人ノ生前中結ヒタル契約ニシテ親驗セサル件之ヲ知了セスト答フルカ如シ

若シ一朝巳ノ意ニ依リ自認ト看做サレタルトキハ種々ノ効果ヲ生シ得ヘシ本法第七十三條第二百五十一條第四百十七條第四百十八條等ニ定ムルモノ之ナリ

又自認ハ民法上尤モ有力ナル證據ニシテ事實上ノ錯誤ニアラザレヨリハ之ヲ取消スコトヲ得ス(民法證據篇第三十六條)

〔參照〕 獨 第二百二十九條 各原被告ハ對手ノ主唱シタル事實ニ付陳述ヲナスヘキモノトス

明ニ不服ヲ受ケサル事實ハ之ニ對シ不服ヲ申立ントスルノ主旨原被告ノ其他ノ陳述ニ依リ判然セザルトキ之ヲ承諾シタルモノト看做スヘキモノトス

知了セスト言ヘル陳述ハ原被告ノ自己ノ行爲及其實驗シタル事件ニアラサル事實ニ付テノミ之ヲナスコトヲ許スモノトス

第一百二十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル

ル陳述ヲ爲サシム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ其問ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

〔解義〕〔理由〕 本條ハ裁判長ハ審問權ニ付キ示定セリ

抑裁判所ノ機關タル裁判長ハ審理スル原被告ニ對シテ職權冷淡只々聽聞者トシテ安坐スヘキニ非ラズ必ス其審理ヲ提督シ之ヲ發達セシメ又時トシテハ審理原則ノ範圍内ニ於テ之ヲ翼賛スルコトアルヘシ乃其事件ノ蘊奧ヲ盡シ審理ヲ中止スルナク之ヲ結了スルニ至ルコトヲ努メ必要ナル場合ニハ又タ審理繼續ノ爲メ直チニ訟廷ノ再開ヲ指定ス可キナリ本條ハ復々事件ノ蘊奧ヲ盡サシムルノ方法トシテ裁判長ニ質問權ヲ付與セリ

裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起サ、ル疑ノ存スルトキ其疑ニ付キ注意セシムルコトヲ得ヘシ
職權上調査ス可キ點トハ訴訟能力ノ適否、法律上代理權ノ當否、又ハ訴訟代理權ノ適否ノ類ヲ云フ

裁判長ハ當事者ノ申立ニシテ不明瞭ナルハ之ヲ釋明セシメ又當事者ノ主張セル事實ニシテ其證明不十分ナリト思料スルハ之ヲ補充シ及ヒ立證方法ヲ指定セシメ其他事件ノ關係ヲ確定スルニ切要ナル各辨明ハ之ヲ爲サシメサル可ラス
陳述ヲ爲サシム可シトアリ故ニ此等ノ質問ヲ爲スハ特ニ裁判長ノ權利ノミナラス又之カ義務アルモノトス實ニ口頭審理ノ効用ハ寬優ニシテ且機敏ニ果達スル裁判官ヲ俟テ初メテ完全ヲ得ヘキモノナリ

右質問權ハ特リ裁判長ニ屬スル而已ナラス陪席判事モ亦之ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レハ訟廷ノ審問ハ裁判長ニ於テ之ヲ爲スヲ普通ノ原則トナス且審理ノ亂雜ニ至ルノ恐アルヲ以テ一應裁判長ニ告ゲタル上質問ニ取掛ラサル可ラス

又當事者モ相手方ニ對シ質問スルコトヲ得ヘシ然レハ相互ニ問答スルハ訟廷ノ規律ヲ亂スニ至ルヲ以テ裁判長ニ對シ之カ質問ヲ求メサル可ラス

當事者ニシテ裁判長陪席判事若クハ相手方ノ問ニ對シテ答辨セヌ又ハ確答セサルハ相手方ノ利益トナル可キ答ヲ爲シタルモノト看做サル、モノトス即チ答辨ヲ怠ルハ前條第二項ノ處分ヲ受ケ又立證方法ニ付キ之カ指定ヲ爲サルハ無證左ノモノト決セラル可キナリ

【參照】 獨 第三百十條 裁判長ハ問ヲ付シテ不明瞭ナル申立ヲ明瞭ナラシメ申立テタル事實ノ不充分ナル點ヲ補充シ及證據物ヲ指定セシムル等總テ事件ノ關係ヲ確定スル爲メ

重要ナル陳述ヲナサシムヘキモノトス

裁判長ハ職權ヲ以テ注意スヘキ點ニ付テ存スル不完全ニ注意セシムヘキモノトス
裁判長ハ求メニ依リ裁判所各職員ニ問ヲ付スルコトヲ許スヘキモノトス

第百十三條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

【解義】 【理由】 本條ハ辯論ニ與カル者ニ於テ命令及ヒ質問ヲ拒スル場合ヲ示定セリ

事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命即チ審理期日ニ於ケル裁判長ノ指揮又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル質問ニ對シ辯論ニ與カル者ヨリ異議ヲ述ヘタルハ裁判所ハ之カ裁判ヲ爲サル可ラス

裁判所之ヲ裁判スト定メタルハ元裁判長ハ裁判所ノ假定ノ全權者トシテ事件ノ整理ヲ爲スノ權利ヲ施行スルニ過キスシテ固有ノ全權者タルニ非ラス故ニ裁判長ハ其申立ヲ專決ス可ラスト云フノ理由ニ基ケリ

辨論ニ與カル者トハ訴訟人證人鑑定人ヲ云フ

又裁判所ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ爲シ得ヘキナリ

【參照】 獨 第三百十一條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命令又ハ裁判長又ハ裁判所職員ノ付シタル問ニ對シ審問ニ關係シタル者ヨリ許サレサルモノトシテ異議スルトキハ裁判

所之ヲ議決スルモノトス

第百十四條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ原告本人ヲ審問スルコトニ付付キ示定セリ

裁判所ハ現實ノ狀況ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告ノ一方又ハ雙方ヲシテ自身ニ出頭セシムルコトヲ得ヘシ

原告ニ出廷ヲ命スルハ特リ裁判所ニ限リテ裁判長ハ此權ヲ有セス

又裁判所ハ訴訟ノ和解ヲ試ミシムル爲メ受命判事若クハ受托判事ノ面前ニ自身出廷ヲ命スルコトヲ得ヘシ(本法第二百二十一條)

又當事者本人ノ訊問ニ付テハ本法第三百六十條以下ニ規定セリ

〔參照〕 獨 第三百二十二條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告一方本人ノ出廷ヲ命スルコトヲ得

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ援用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作りタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得
此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

〔解義〕 第百十五條及ヒ第百十六條ハ裁判所カ證書ノ提出ヲ命シ得ヘキコトヲ示定シ第百十七條ハ裁判所カ檢證及ヒ鑑定人ヲ命シ得ヘキコトヲ示定セリ

裁判所ハ質問權アリト雖モ事件ノ關係ヲ更ニ明瞭ナラシムルニ付テハ未タ足ラサル所多シ是レ第百十五條乃至第百十七條ノ設ケアル所以ナリ

第百十五條 裁判所ハ原告ノ援用シタルモノニシテ且手中ニ存スル證書ニ限り之カ提出ヲ命スルコトヲ得ヘシ

原告ノ證左ニ供セス單ニ其陳述ヲ辨明スルニ止マルモノハ之カ提出ヲ命スルヲ得ス

第百十六條 裁判所ハ原告ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ審理及ヒ裁判ニ關スルモノノ提出ヲ命シ得ヘキナリ

第百十七條 裁判所ハ原告ノ申立ヲ俟タズ自ラ臨檢ヲ果行シ又鑑定人ヲ命スルコトヲ得ヘキナリ

右ノ臨檢鑑定人ヲ命スルニモ通常申立ニ依リ命スル檢證及ヒ鑑定ノ手續ニ從フモノト

原被告第百十五條第百十六條ニ依テ命スル所ニ從ハサルハ種々ノ不利益ナル効果ヲ受ク可シ

〔參照〕 獨 第百三十三條 裁判所ハ原被告ニ對シ其手中ニ存スル證書ニシテ引用シタルモノ並ニ系圖細圖略圖及其他ノ圖面ヲ呈出スルコトヲ命スルヲ得

裁判所ハ呈出シタル書類ヲ其定ムヘキ時間中裁判所書記局ニ留置スヘキコトヲ命スルヲ得

裁判所ハ他國語ニテ作りタル證書ヲ付テハ宣誓シタル通事ノ作りタル譯書ヲ差出スヘキコトヲ命スルヲ得

獨 第百三十四條 裁判所ハ原被告ニ對シ其現有スル書類ヲ差出スヘキコトヲ命スルヲ得但其書類ハ事件ノ密問及裁決ニ關スルモノナルトキニ限ル

獨 第百三十五條 裁判所ハ檢證處分並ニ鑑定人ノ鑑定ヲ命スルコトヲ得其手續ハ申立ニ依リ命シタル檢證處分又ハ鑑定人ノ鑑定ニ關スル規定ニ從フモノトス

第百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲スコキヲ命スルコトヲ得

第百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提

出シタルトキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限スコキヲ命スルコトヲ得

第百二十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合スコキヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

〔解義〕 第百十八條乃至第百二十條ハ裁判所ニ於テ證據ヲ分合スルコトニ付示定セリ

第百十八條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲シ得ヘキコトハ本法第四條ニ於テ見タル所ナリ此場合ニ於テ裁判所ハ取調ノ便宜ニ因リ數箇ノ請求ヲ分別シテ審理スルコトヲ命シ得ヘキナリ而シテ本訴ト反訴ニ付テノ辯論モ亦之ヲ分離シテ審理スルコトヲ命シ得ヘシ而シテ數箇ノ請求中又ハ本訴反訴ノ中其一箇ヲテ裁判ヲ爲スニ熟スルルハ一分判決ヲ以テ終局裁判ヲ與フルコトヲ得ヘキナリ(本法第百二十六條)

然レ其請求若クハ訴ノ相互ニ關聯シテ分ツ可ラサルハ固ヨリ分離セサルヲ可トス第百十九條 一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻擊若クハ防禦ノ方法ヲ用ユルルハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限スコキコトヲ命シ得ヘキナリ

例ヘハ貸金ノ訴ヲ起シタルニ既ニ辨濟ヲ爲シタル旨ノ抗辨ト時効ニ罹レル抗辨トヲ併セテ爲シタル時裁判所ハ先ツ時効ノ抗辨ニ付テノ辯論ヲ爲サシムルノ類是ナリ

第二百十條 又裁判所ハ同時ニ審理及ヒ裁判ヲナス爲メ其裁判所ニ屬スル同一又ハ各別ナル原被告ノ數多ノ訴訟ヲ合同スルコトヲ命シ得ヘキナリ然レニ其訴訟ノ目的物タル請求ハ一箇ノ訴ヲ以テ主張シ得ヘキ時ナラサル可ラス

本法第四十八條ニ定ムル共同訴訟人トシテ訴フルヲ得ヘキ場合ニ於テ各自ニ之ヲ訴フルルハ即チ之ヲ合併シ得ヘキナリ例ヘハ數多ノ相續人ニ係リ各自ニ訴ヲ起シタル時ノ如キ之ナリ

本條但書ノ條件ナキト雖ヒ之ヲ合併シ得ヘキ場合ハ特リ本法第七百七十六條ニ規定セリ

以上訴訟ヲ分離シ又ハ合併シタル時ハ裁判記録モ亦之ヲ各冊ニ別ケ又ハ之ヲ一冊ニ合セサル可ラス

又訴件ヲ分離シ合併スルモ毫モ裁判權限上ニ影響ヲ及ボサルモノトス

〔參照〕 獨 第三百三十六條 裁判所ハ一訴訟ニ於テ申立テタル數箇ノ請求ヲ分離シタル裁判手續ヲ以テ審問スルコトヲ命スルヲ得

訴訟ニ於テ申立テタル要求ト權利上ノ連係ヲ有セサル反對要求ヲ被告ノ申立テタルトキモ亦同シ

獨 第三百三十七條 裁判所ハ同一ノ請求ニ關スル數箇獨立ノ攻撃方又ハ辨護方（訴訟理由辨駁再辨駁等）ニアリテ先ツ其一又ハ二三ニ限リ審問ヲナスヘキコトヲ命スルヲ得

獨 第三百三十八條 裁判所ハ同時ニ審問及ヒ裁決ヲナス爲メ同一又ハ各異原被告ノ裁判關係トナリタル數箇訴訟ノ連合ヲ命スルコトヲ得但其訴訟事件トナル請求權利上ノ連係ヲ有シ又ハ一訴訟ニ於テ申立ルコトヲ得ヘキニ限ル

第二百一十一條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繋ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ

第二百二十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行爲ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但其罰ス可キ行爲カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ボストキニ限ル

〔解義〕 本兩條ハ裁判所カ職權ヲ以テ審判ノ中止ヲ命シ得ヘキ場合ヲ示定セリ

第二百一十一條 一訴訟ニ付テノ裁判ノ全部若クハ一部ニシテ他ノ訴訟ノ結果即チ權利ノ成立不成立ニ關スルキハ其訴訟ノ完結スルマテ之ヲ中止セサル可ラス

例ヘハ貸金ノ元金ニ對スル訴ト之レヨリ生スル利子ノ請求ト各自ニ起ルルハ先ツ元金ニ對スル訴訟ノ完結スルマテ利子ニ付テノ辨論ヲ中止セサル可ラス何トナレハ元金ノ利息ニ於ケルハ因果ノ關係アルヲ以テ若シ果ナル利息ニ付キ先ニ裁判ヲ與フルルハ後日ニ至リ元金ノ成立セサルコトノ裁判アルトキ忽チ不都合ヲ見ルコトアレハナリ

第二百二十二條 又訴訟ノ進行中、罰セラル可キ行為ノ嫌疑アリテ其行為カ訴訟ニ影響ヲ及
ホス可キトキハ刑事手續ノ完結スルマテ之ヲ中止セサル可ラス
中止ノ終了スルニハ裁判ノ確定其他和解、拋棄及ヒ治罪手續ノ停止アルヲ要ス
中止ニ付テハ本法第百八十六條第百八十七條第百八十九條ヲ參看ス可キナリ

〔比較〕 本法第百廿一條ト本法第百九十五條第一トハ混同ス可ラス第百二十一條ハ二箇ノ
訴訟互ニ因果ノ關係アルモ其爭フ所ノ目的相異ナリ反之第百九十五條ノ場合ハ同一物
件ヲ爭ヘルモノナリ又第百二十一條ハ之ヲ中止スルモ第百九十五條ハ新ニ起ス訴訟ヲ却
下スルノ結果ヲ生スヘキナリ

〔參照〕 獨 第百三十九條 訴訟ノ裁決ノ全部又ハ一部權利上關係ノ存否ニ依テ定マル場
合ニ於テ其關係裁判關係トナリタル他ノ訴訟事件トナルトキ又ハ行政廳ノ確定スヘキモ
ノナルトキハ他ノ訴訟ノ完結又ハ行政廳ノ裁決ニ至ルマテ審問ヲ延期スヘキコトヲ命ス
ルヲ得

獨 第百四十條 裁判所ハ訴訟中罰セラルヘキ行為ノ嫌疑アル場合ニ於テ其索知裁決ニ
關係ヲ有スルトキハ刑事裁判手續ノ終結ニ至ルマテ審問ノ延期ヲ命スルコトヲ得

第二百二十三條 裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命令ヲ取消スコト
ヲ得

第二百二十四條 裁判所ハ閉キタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕 第二百二十三條ハ訴訟ノ分合ニ付キ發シタル中止ハ命令ヲ取消スコトヲ示定シ第百
二十四條ハ再ヒ審理ヲ開クコトニ付キ示定セリ

第二百二十三條 訴訟ノ分合ニ付キ發スル命令ハ素ト訴訟整理上ノ性質ノモノナリ故ニ裁
判所ハ其命令ヲ再ヒ取消シ得ヘキナリ

第二百二十四條 裁判所ハ訴訟ニ付充分ニ辨論シ了レリト認ムルキハ審理ヲ閉ツ然レハ裁
判ニ付キ會議スルニ當テ彼此ノ點ニ於テ未ダ結了スルニ至ラサルコトヲ發見スル時ハ裁判
所ハ既ニ閉キタル審理ヲ再ヒ開クコトヲ命令シ得ヘシ而シテ再ヒ開クノ結果ハ先キノ審理
全部ニ亘リテ新タニ開キタルモノト看做スニ在ルナリ

〔參照〕 獨 第百四十一條 裁判所ハ分離連合又ハ延期ニ付キ發シタル命令ヲ更ニ取消ス
コトヲ得

獨 第百四十二條 裁判所ハ終結セシ審問ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第二百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ
立會ハシム但裁判所構成法第百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

〔解義〕 本條ハ日本語ニ通セサル者アルトキ通事ヲ立會ハシムルコトヲ示定セリ
裁判所ニ於テハ一般ニ日本語ヲ用ユ可キコトハ裁判所構成法第百十五條ニ規定セリ而シ
テ辨論ニ參カル者若シ日本語ニ通セサルトキハ如何ス可キヤニ至テハ本條ノ決定スル所
ナリ即チ此場合ニ於テハ通事ヲ立會ハシメサル可ラサルナリ

然レ本條ハ裁判所構成法第百十八條ニ定ムル場合ニ於テハ必ス通事ヲ立會ハシメサル
モ可キリトセリ即チ外國人當事者タル場合ニシテ其訴訟ニ關係ヲ有スル者及ヒ其訴訟ノ
審問ニ參與スル裁判官或ル外國語ニ通スル者ハ其外國語ヲ以テ口頭審理ヲ爲スコトヲ得
ヘキナリ

而シテ裁判所構成法第百十五條第二項ニ依レハ通事ノ任命使用并ニ其職務ニ關スル規則
ハ司法大臣之ヲ定ムトアリ故ニ此等ニ關スル規則ハ特別ニ定メラル可キナリ

本條ニ關スル裁判所構成法ノ條文ハ本法第百十條ノ解義中ニ掲出セリ

第百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者暨又ハ啞ナルトキ之ニ文字ヲ以
テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ辯論ニ與カル者暨又ハ啞ナル者之ヲ如何スヘキヤニ付キ示定セリ

辨論ニ與カル者暨又ハ啞ナル者ハ文字ヲ理會セサルハ通事ヲ立會ハシムルコトヲ得
ル者又ハ啞者ト雖モ若シ文字ヲ理會スルハ文字ヲ以テ之ヲ審問セサル可ラス

又本條末尾ニ得ノ字ヲ加フルヲ以テ考フレハ通事ヲ用ユルト否トハ裁判所ノ權内ニ存ス
ルカ如キモ若シ暨又ハ啞ナル者之ヲ理會セサルハ之ノニテ審理ヲ止ム可キノ理ナキナ
リ以テ此場合ニ於テハ寧ロ前條ト均シク通事ヲ立會ハシムルノ義務アリト決スルヲ可トス

第百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被

告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯
護士ヲシテ演述セシムル可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥
セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若
クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セズ

〔解義〕 本條ハ發言ノ禁止及ヒ潛リ代人ヲ退斥スルコトニ付キ示定セリ

裁判所ハ陳述ヲ爲ス能力ヲ有セサル原告、訴訟代理人、輔佐人ニ向後ノ陳述ヲ差止ムル
コトヲ得ヘシ而シテ此差止ヲ爲スト同時ニ新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシムヘキコ
トヲ命スルモノトス若シ新期日ニ至リ辯護士ヲ出サ、ルハ缺席ノ儘裁判セラル、ノ不
利益ヲ見ル可キナリ

又裁判所ハ訴訟代理ヲ常業トスル者訴訟代理人若クハ補助人ト爲リ出廷セシルハ之ヲ退
斥セシムルコトヲ得ヘシ是ノ潛リ代言人ノ増殖ト弊風ヲ防遏矯正スルニ最モ必要ナル法
定ナリトス而シテ如此退斥セシメタルハ新期日ヲ定メ右退斥ノ決定ヲ原告ニ送達セ
サル可ラズ乃チ此カ送達ヲ爲シテ新期日マテニ原告本人出廷スルカ辯護士ヲ差出スカ

○口頭辨論及ヒ準備書面

之ヲ撰擇セシメサル可ラス而シテ新期日ニ至リ辨護士又ハ自身出廷セサルハ亦欲席裁
判ヲ免レサルモノトス

本條ノ規定ニ從ヒ裁判所カ爲シタル命令ニ對シテハ不服ヲ唱へ上訴ヲ爲スコトヲ得ス故
ニ本條ノ命令ニ從ハサルハ徹底不利益ニ歸スルモノトス

辨護士ハ十分ノ能力ヲ備フルモノト見做ス可キヲ以テ其發言ヲ禁シ又之カ退斥ヲ命スル
コト能ハサルナリ然レハ裁判所構成法第百十一條ニ定タル場合ハ此限ニアラストス（構
成法第百十一條ノ正文ハ本法第百十條ノ解義中ニ掲載セリ）

〔參照〕 獨 第四百三十三條 裁判所ハ適切ナル供述ヲナスノ能力ヲ有セサル原告訴訟代
人及附添人ニ其後ノ供述ヲナスコトヲ禁止スルヲ得

裁判所ハ裁判所ニ於テ辨論ヲ常職トスル訴訟代人及附添人ヲ退斥スルコトヲ得
此命令ニ對シテハ不服ヲ申立ルコトヲ許サス
代言人ニハ本條ノ規定ヲ適用セサルモノトス

第二百二十八條 辨論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辨論ノ場所ヨリ退斥セラ
レタルトキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ
之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第百十條ニ依リ中止シタル場合ハ
此限ニ在ラス

前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ
前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

〔解義〕 本條ハ退斥セラレタルヨリ生スル結果ヲ示定セリ

辨論ニ與カル者不當ナル行狀ノ爲メ退廷ヲ命セラルトキハ恰モ任意ニ退廷シタルト同
一ノ處分ヲ受ク即チ申立ニ依リ欲席判決ヲ言渡スモノトス本法第二百四十六條第二百五
十條第二百五十二條乃至第二百五十四條ヲ參看ス可シ

辨論ニ與カル者トハ原告被告若クハ訴訟代理人ハ勿論證人鑑定人ヲモ包含ス可シ乃チ證人
ニシテ時刻前退廷セシメラルハ本法第二百九十四條又鑑定人ナルハ本法第三百
二十八條ヲ適用ス可キナリ

然レハ裁判所構成法第百十條ニ依リ審理ヲ中止スル場合ハ決シテ本條ノ取扱ヲ受クル
ナシ（構成法第百十條ノ正文ハ本法第百十條ノ解義中ニ掲載セリ）

又前條發言ヲ禁止セラレタル者若クハ退斥セラレタル者再ヒ出廷スルハニ於テモ前ト均シ
ク任意ニ退去シタルノ取扱ヲ受クルモノトス

〔參照〕 獨 第四百四十四條 審問ニ關係シタル者秩序ヲ維持スル爲メ審問ノ場合ヨリ退ケ
ラレタルトキハ申立ニ依リ本人隨意ニ退出シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ニ對シ處分スル
コトヲ得前條ノ場合ニ於テハ禁止又ハ退斥ヲ既ニ前審問ニ於テナセシトキニ限り亦同一
ナリトス

○口頭辨論及ヒ準備書面

第二百二十九條 口頭辨論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 辯論ノ場所、年月日

第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名
若シ原告若クハ被告關席シタルトキハ其關席シタルコト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第二百三十條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解

第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又

ハ以前ノ供述ニ異ナルトキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書類ニ於ケル

記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

〔字解〕 自白トハ己レニ不利益ナル事實ヲ認ムルコトヲ云ヒ認諾トハ相手方ノ權利即チ請

求ヲ認ムルコトヲ云フ

〔解義〕 本兩條ハ審問調書ノコトヲ示定セリ即チ本條以下第三百三十三條マテハ裁判所書記

ノ職務中最モ必要ナル調書ノコトニ付キ規定セルモノナリ

第二百二十九條 本條ハ審問ノ法式ニ付テノ規則ニシテ本條列記スル所ノ條項ハ必ス調書

ニ記載セサル可ラス

本法第四百三十六條ニ第一規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシハ第五原告カ法律ニ

從ヒ代理セラレザリトキ第六訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル云々トアリ而

シテ本法第三百三十四條ニ依ルハ方式ノ遵守ハ調書ノミヲ以テ之ヲ證スルヲ得トアルヲ

以テ右裁判所ノ構成上ニ違法キヤ否正當ニ代理セラレタルヤ否又訴訟手續ハ公行セシ

否否ハ調書ヲ措テ他ノ之ヲ知ルノ道ナシ故ニ本條列記ノ條項ハ一々嚴明ニ之ヲ調書ニ記

○口頭辨論及ヒ準備書面

載セサル可ラサルモノトス
 本條列記ノ條項ハ行文明瞭ニシテ毫毛疑ノ生ス可キモノナシ
 第三百三十條 本條ハ辨論進行中ノ調書ニ關シ規定セリ即チ辨論ノ進行ニ付テハ其要領ノ
 調書ニ記載シ又調書上特ニ明確ニス可キ條項ヲ掲載セリ
 認諾、拋棄及和解ハ準備書面ニ掲クルト否トチ問ハス法廷調書ニ於テ之ヲ確定セサル可
 ラス又裁判上ノ自白ハ容易ニ之ヲ取消ス能ハサルヲ以テ同シク調書ニ確定スルヲ必要ト
 明、確、ニ、ス、可、キ、規、定、ア、ル、申、立、及、ヒ、陳、述、ト、ハ、本、法、第、二、百、二、十、三、條、第、三、百、八、十、條、ニ、定、ム、ル、如、キ
 場、合、チ、云、フ
 證、入、鑑、定、人、ノ、供、述、及、ヒ、檢、證、ノ、結、果、ニ、至、テ、ハ、大、ニ、訴、訟、ノ、消、長、ニ、關、係、ス、可、キ、ヲ、以、テ、特、ニ、調、書
 ニ、確、定、ス、ル、コ、ト、必、要、ナ、リ
 又、書、面、ニ、作、リ、調、書、ニ、添、附、セ、サ、ル、裁、判、即、チ、訟、廷、ニ、於、テ、口、頭、ヲ、以、テ、直、ニ、言、渡、シ、タ、ル、裁、判、及、ヒ
 裁、判、ヲ、言、渡、シ、タ、ル、コ、ト、ハ、之、ヲ、明、確、ニ、セ、サ、ル、可、ラ、ス
 準備書面ニ申立テサルコト及ヒ準備書面ト異ナル申立ニ付テハ調書ニ附録トシテ添付ス
 可キ書面ヲ提出セサル可ラサルコトハ本法第二百二十二條ニ規定セリ若シ此等ノ書面ヲ
 提出シテ該書面ハ附録トスル旨ヲ該書ニ附記シアルハ調書ニ記入シタルト同一ノ
 効アルモノトス

訴訟記録ハ法廷調書並ニ其附録裁判所へ提出シタル準備書面ノ謄本及ヒ其附屬書類其他
 訴訟ニ關係スル裁判所ノ書類ヨリ成立ツモノトス

〔理由〕 抑法廷調書ヲ以テ確定スルモノハ判決中ノ事實關係ヲ正適ニ確定スルコトヲ保證ス
 ル目的ニ出ツルモノナリ即チ判決中事實書ニ於ケル事實關係ノ列擧ニ付キ對證ノ用ニ供
 スルモノナリ故ニ裁判官ハ調書ニ掲ケサルモノヲ判決中ノ事實トシテ掲クルヲ得サルナ
 リ

〔辨疑〕 辨論進行中ノ調書ニハ第三百三十條ニ列記スル條項ノミヲ明確ニシ他ノ事項ハ之ヲ
 記載セシメテ可ナリヤ曰否ナ第三百三十條第一項ニ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シトアリ
 故ニ訴訟進行中ノ辨論モ其要領ヲ記載セシムルノ律意ナルハ明カナリ若シ然ラサルハ
 判決中ノ事實ヲ保證シ又ハ對證スル由ナク又該訴訟ノ上級裁判所ニ繫屬セシキ上級裁判
 所ハ殆ント前審理ノ適否ヲ知了スル能ハサレハナリ而シテ第三百三十條第二項ニ列記セル
 條項ニ至テハ特ニ明確ニス可キコトヲ注意セシモノト解釋セサル可ラス

〔參照〕 獨 第四百十五條 裁判所ノ口頭上審問ニ付テハ筆記ヲ作ルヘキモノトス
 其筆記ニハ左ノ件々ヲ記載スルモノトス

- 第一 審問ノ場所及日時
- 第二 裁判官及裁判所書記ノ氏名通事ヲ立會ハシメタルトキハ其氏名
- 第三 訴訟事件

○口頭辨論及ヒ準備書面